
Dear Girl

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dear Girl

【Nコード】

N0731B

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

FtM・GID・性同一性障害。小学校6年生の時にそう診断された刑部真夕は、それを受け入れる事によって元気な学生生活を送っていた。しかし、思春期に差し掛かるに従い、苦悩は確実に加速していく。身体的異性と精神的異性への恋愛の相違・・・障害を吹き飛ばす勢いで元気に駆け抜ける、少女、いや少年のお話です。

プロローグ ― 【第1話】（前書き）

女性の身体でありながら、男性の性自認をしている障害をFtM・GIDと言います。これに対して、男性の身体で、女性の性自認をしている障害をMtF・GIDと言います。

プロローグ ― 【第1話】

（プロローグ）

二日間降り続いた雨が上がると、外は清々しい風が吹き抜けて、道端の雑草は、雨露にきらめきながら、青々と見違えるほどの背丈に成長している。

一雨ごとに暖かくなる陽射しは、確かな季節の移り変わりを示していた。

目覚まし時計の音で目が覚めた。が、異常に眩しい。

適当に閉めたカーテンの隙間から、久しぶりの太陽の光が差し込んで、「彼女」の顔を照らしていたのだ。

刑部真夕は大きなあくびをしながら渋々とベッドから起き上がり、パジャマを脱ぎ捨てると、白いブラウスに袖を通して、全体にプリーツの入ったミニスカートを履いた。

面倒臭そうにブラウスのボタンを下の方だけ閉めて、スカートの中へ入れ、筆筒の引出しから取り出した、学校指定の紺色のハイソックスを、ベッドの上にひっくり返って履く。

カーテンを勢い良く開けると、抜けるような春の青空がどこまでも広がっていた。

校章ワッペンの着いた、紺色のブレザーを片手に階段を降りてキッチンへ行くと、母が入れていった コーヒーが、コーヒーサーバーのガラス容器に残っている。

これは何時もの事で、真夕はそれを自分のマグカップに注ぎながら、食パンをトースターに入れた。

リモコンを使って、リビングのテレビを点けると、お決まりの、朝のワイドショー番組が流れていた。

別に真剣に見るわけではないが、何時もの習慣で何となく点けるのだ。

学校でのおしゃべりの話題にも役立つ。

お天気コーナーが流れるまでには朝食を済ませなくてはならない。携帯電話の着メロが鳴って、出てみると、クラスメイトの加奈からで、

「貸したCD、今日忘れないで持ってきてね」と言われた。

「大丈夫、持っていくよ」と応えて電話を切ると

真夕は慌てるようにして、二階の自分の部屋へ駆けて行き、加奈に借りていたCDをミニコンポから取り出し、ケースに収めて力バンに詰め込む。

既に、MDとiPodへのダウンロードは済んでいたが、一週間借りっぱなしだった。

トーストを齧りながら、他に忘れ物が無いか、少しだけ考える。

宿題は無かったし、和弥に借りている漫画は当分返さなくて大丈夫だろう。

朝食を済ませると、洗面所へ行き、鏡に向かって歯を磨く。

スタイリンググーンスをピンポン球の大きさに手のひらに出して、髪に着けてから軽く手グシで馴染ませ、ブラウスのボタンを上までキッチリ留めて、モスグリーンのリボンを結ぶ。

淡いピンクの色着きのリップを唇に薄く塗って……

そして、何時も小さな溜息をついてから、「よしっ」と自分に気合を入れるのだ。

母の部屋から、八時知らせるハト時計の鳴き声が聞こえてきた。8時20分までに校門を潜るには、もう出かけないと間に合わない。

慌ただしくキッチンへ戻り、ブレザーを着て、カバンを持って玄関に向かおうとした時、真夕の左足の小指がドアの端っこにぶつかった。

「痛ってえ…… 畜生！」

僕は僕である為に、「彼女」の身体を纏って生まれ「彼」として生きている。いや、この身体にしてみれば、僕の心に支配されて生きる「彼女」なのかもしれない。

人は「性自認」というものに従って、女性は女らしく、男性は男らしく生きることが出来る。しかし、全ての人間が身体の性と自認する性が同調するとは限らないのだ。

神様の些細な悪戯か手違いが、身体的な性別を容認できず、反対の性的文化に属してしまう人間を、稀に造り出す。

目覚めた自我が性自認するまでは、他の女兒となんら変わりなくフリルの着いたスカートを履き、三歳の七五三では晴着を纏っている。

ある朝目覚めた時、ちゃんとした男の身体に戻っていて、全ては夢だったのだと思う事がある。

しかし、それこそが、夢の中の話なのだ。

幼稚園も小学校も、スカートなど履いた事はなかった。

いつも半ズボンかジーパンばかり履く僕に、少しでもかわいく見えるようにと、母がサロペットを買って来た事があったが、トイレが面倒であまり履かなかった記憶がある。

自分の事をずっと「俺」か「僕」と呼んでいた。

男女とからかわれた事もあったが、活発で比較的誰とでも仲良くなれた事と、常に学級委員候補の和弥と仲が良かったせいもあって、これと言った嫌悪感を味わった事はない。

どちらかと言うと、男子と女子の間を橋渡しするような、そんな存在だったと思う。だから、小学校の頃、僕のいたクラスは男女の仲が非常に良くて、一緒に遊ぶ事も多かった。

刑部真夕……僕は自分の名前に「子」が付いていない事に少しだけ安心感を持っていた。「マユ」と言う名前は、稀にだが、男の

子にもいるからだ。

しかし、中学に入ってプリーツの四つ入った紺色のスカートを初めて履いた時、他人から見れば僕は「彼女」以外の何者でもないのだと実感した。

股間と太腿辺りがやたら風通しよくて非常に頼りないその布切れは、初めのうち、身体を動かす度に揺れて奇妙な気分だったが、慣れてくるとついあぐらをかいてしまったりする。

白いブラウスの下に着けたブラジャーも勿論初めてだった。

「絶対に着けなさい」と、僕の一番の理解者である母が言った。

仕方なく従って、デパートの下着売り場で渋々試着をしたが、人並みに張り出てきた胸には、意外なほど納まりが良かった。

中学校の入学式の日、僕のスカート姿を初めて見た和弥は、なんの遠慮も無く大笑いして、最後に優しい笑みを浮かべて「似合うよ」と言った。

中学に入ると三つの小学校が一緒になり、その中には、既に男を何人も知っていそうなほど異常にマセた娘もいて、教室には不釣合いなフレグランスの香をプンプンと匂わせていた。

そういった娘達の影響もあり、同じ小学校から来た連中も、あつという間に色気着いて、少しツツパツたクラスの男子に色目を使ったりする。

勉強も出来てスポーツ万能の、絵に描いたような和弥は、不良達とはまた違った意味で女生徒達の人気を集めた。

ある時、それを気に入らない他のクラスの不良グループが、放課後に校門の前で待ち伏せしていた事があった。が、一緒にいた友人の話によると、和弥はあつという間に三人を倒し、四人目はひたすら彼に謝罪の意を露わに泣いたそうだ。

その事件以来、和弥はどんな連中にも一目置かれているようだった。

中学に通うようになって、僕は女言葉を意識して使うようになった。

「彼女」にしか見えない以上そうするしかない。

もし、自分の全てを打ち明けるとしても、会う人全てにいちいち説明するのはウンザリするし、理解してもらえない人も中にはいるだろう。

それなら、地方出身者が東京へ行けば東京弁、地元では方言を使い分けるように、僕も二種類の言葉を持ち歩けばいいことだ。

使い出して気付いた事だが、二種類の言葉を使い分けるのは、そんなに難しい事では無い。

微妙なイントネーションの違いで、自然に語尾が違ってくるのだ。ショートカットの男勝りな娘が、同じ学年にも何人かいたが、僕から見れば彼女らは明らかに女性だった。

しかし、端から見れば、そんな彼女達よりも僕の方が女の子らしかったに違いない。

僕は、何時しかそれを楽しめるようになった。

容姿に合った言葉、仕草、態度。それを、心の片隅から観察する「僕」がいる。

意外とおもしろい。

【第2話】

中学二年の冬に初めてラブレターというものを貰った。

6組の、話をした事もない島田典之と言う奴らしい。6組に仲の良い友達がいる、ミクが手渡しを頼まれて来たのだ。

「彼って、剣道部で次期部長らしいよ」

ミクが言った。

僕にはそんな事はどうでもいいのだが、とりあえずは考える振りをするのが礼儀だと思い、その旨を書いたメモをミクに託した。

すると島田は、少しは脈ありと思ったのか、翌日、今度は「アンケート」なるメモが廻ってきた。

好きな食べ物・嫌いな食べ物・好きな芸能人・趣味・好きな男性のタイプ・嫌いな男性のタイプ……

「これって、本当に島田くんからなの」

僕は、なんだか、からかわれているような気がしてミクに尋ねた。

「そうだよ。ほら、書き方は千恵美が教えたらしいけど、字は島田君本人のだよ」

「ふーん」

僕は何となく胡散臭いその手書きのアンケートなる用紙を眺めた。そんな怪訝そうな僕の様子を見ていたミクが言った。

「マユ、あんたけっこう人気あるんだよ」

はつきり言って、僕はその言葉に驚愕した。と、言うか正直恐ろしかった。

放課後よく見かける光景のように、自分が誰か男の子と手でも繋いで一緒に歩く姿を想像しただけで眩暈がしそうだった。

それは、十二歳の夏に、初めて月のものが来た時以来のショックだった。

母が炊いてくれたお赤飯を、複雑な気持ちで食べたっけ。

「サッカー部の山田も気があるって、前に聞いたよ。コクる勇氣は

ないらしいけど」

ミクは笑いながら、続けざまに言った。

サッカー部の山田と言えば、ガ体もよく、身長が180センチはあるようなニキビ顔のあいつか…… そう言えば和弥と一緒にいる時、何度か話をした事がある。

もうそれ以上言わないでくれ。

僕はそれ以上聞きたくは無かった。

そう言う事は、できる事なら知らないまま卒業したい……

さすがに男との恋愛は、考えられないと思った。

何故なら、僕は「彼女」という身体を纏った「彼」なのだから。

高校は、共学に進んだ。女子しかない空間で毎日過ごすのは耐えられそうも無かった。

しかし、後で聞いた噂によると、女子高という空間では、まるで宝塚のように頻繁に男役が出現する事が日常で、架空の男性が同性のみの空間を、少しだけ中和するのだという。

ほんとうにそうだとしたら、あからさまに僕の心をオープンに出る場が合ったのではないか、などと空しい妄想に駆られたりしたが、それは、あくまでも男っぽい女性の受けがいいだけで、男として受け入れられる訳ではない。

高校に入ると、社会的に見ても完全な「彼女」として生きなければならぬ事を実感した。

世間的にカミングアウトをして、ホルモン治療などを受け、頑張っ

って本当の自分を取り戻そうとしている人をテレビで観た。

しかし、僕にはアレだけの努力をする自信も覚悟もない。

今まで、女として一緒に過ごして来た娘達はどう思うだろうか…… それを考えるだけでも、不特定多数の人に今更自分の正体を打ち明ける勇気は無かった。

小学六年生の時に僕は性同一性障害と診断された。

ただ、思春期を迎える頃には次第に症状が緩和して、女性の性自認ができる可能性もあると言われた。が、しかし、今の所そいつた都合の良い傾向は見当たらない。

高校に入った頃から僕はナチュラルに化粧をするようになった。

薄くファンデーションを乗せ、楽天市場で買ったホットビューラーで、元々長めの睫毛を上向きにカールし、マスカラでなぞる。

眉はカットで整え、気が向けば眉ライナーを引いたりする。

ちよつとだけアイラインを引くと、目の周りが別人のように輝く。そして、薄いピンク系のグロスを塗る。

グロスは色が出が強いので、普段は色着きリップの方が使いやすい。

まるで実物大のフィギュアに自分好みの塗装を施しているようで、意外と楽しい事に気付いたのだ。

自分の顔に合った色を探すのも、まさしくモデルと共通する部分がある。

以前ガンブラにハマっていた時、戦闘で着いた自然なヨゴレを丹念に塗装で表現した事を思い出して、すこし可笑しな気持ちになる。中学の時、隣のクラスにいた美少女フィギュアオタクの鈴木高貴に言ったらどんな顔をするだろう。

卵型の小さい顔に、笑うと目立つ白い犬歯。

ほんのり水色掛かった白目に、ダークブラウンに輝く虹彩の瞳…

…これで男を表現しろと言われても正直困ってしまう。

何時しか、鏡を見るのが少しだけ楽しくなっていたが、それは二面性を強調させる手段でもあった。

「彼」の心と「彼女」の身体はあくまでも表裏一体で存在している。だから、「僕」という存在を強調するには、あえて他人の目に映る彼女も強調してやる必要があるような気がした。

男である僕が、わざと彼女の振りをする。

そつする事で、僕はF t M G I Dという事のストレスから開放

されているのかもしれない。

何とか男らしい装いをして、自分の性自認を表現する人が大半らしいが、そう考えると僕は少し違っている。

しかし、丸みを帯びた小さな顔とつぶらな瞳を男らしくモディファイするよりも、より女っぽい外見を演出させる方が楽だし、気分的にも楽しい。

それに、この柔らかい女々した声は、高校生の少年を演じるにはどうしても違和感があるのだ。

社会適応を容易にする為に、性自認とは逆の、身体の性に適合した行動様式をとる場合があるそうだが、僕の場合はそれに当てはまるのかもしれない。

勿論、社会適合と言うより、僕的に楽な方を選んだ結果にすぎないが。

しかし、もし僕が心と身体と同調が取れた健全な男性だったなら、きっとカッコ着けのナルシストか、変身願望を持ったコスプレマニアになっていたかもしれない。

【第3話】

高校一年の冬からハンバーガーショップでアルバイトを始めた。学校から家までの間に出来た、大型スーパーのテナントに入っているのも、非常に通い易い。

満面の笑みを浮かべ

「いらっしゃいませ」

と言っている自分に、時々自分で吹き出しそうになる。

そこでも「彼女」という仮面が時には優遇を受ける事を知った。

男性アルバイトに厳しい社員も、僕の仮面の笑顔に惑わされ、十分までの遅刻は全て多めにみてくれた。

「松村ムカツクよな」

バイト仲間の秀雄が僕と二人きりの時に、よく口にする言葉だ。

彼は、事在るごとに社員の松村に指導と言う名の説教を受けていた。

「あたしは別に」

女性にだけは、余ったソフトクリームやポテトを呉れるし、遅刻はオマケしてくれる。

時々意味も無く手に触れてくると、詰らないギャグを除けば特に不満は無かった。

「女は得だよな」

オーブンを掃除しながら秀雄が言ったその言葉に、僕は心の中で同意した。

女子高に通う同い年の香織も僕より遅刻が多いにもかかわらず、遅刻の評価はいつも無遅刻だった。

きっとバレンタインのチョコレートが最高に効いているのだろう。バイト先では、学校では出会えない、一味違った連中との出会いが楽しい。

香織は男遊びが好きで、バイトが終わる頃には必ず男が車で迎え

にくる。

駐車場の段差を超えられないほど低い車高のエスティマやステツプワゴンの窓からチラリと見える、肩にタトゥーの入った金髪の横顔がどういふ男達なのか、気のいい誠実な青年ではない事ぐらい、何となく想像は出来る。

彼女はローライズのジーンズやヒップボーンの白いミニスカートに着替えると、日替わりでそんな車の中に消えていく。

「ねえねえ、マユ。今夜、飲みあるんだけど、あんたもいかない」

「あ、ウチ夜敵しいから。ごめんね」

時折香織は僕を誘うが、毎回柔らかく断るようにしている。

あの車達の餌食にはなりたくないのが本音だ。

秀雄は、仕事はがさつだが県下一の進学校に通う気のいい奴だ。バイクのローンとガソリン代を払う為にせつせとバイトに励んでいるらしい。

学校の試験勉強で判らない所は、誰に聞くよりも丁寧に教えてくれる。

学力では和弥より上かもしれない。

僕は、母親から毎月小遣いを貰っている。高校生活にはさほど困らなかったが、去年の冬にアルバのセーターが欲しくて始めたのがバイトのキツカケだ。

既にセーターを手に入れた今、殆どのバイト代は今のところ貯金に回っている。

しかし、僕がバイトを辞める日は突然訪れた。

ある遅番の日、閉店時に松村と二人になった。

掃除が終って松村に報告をしに事務所に入った僕は、くだらない雑談を嫌々ながら付き合った後、着替えようとしてロッカー室に向かう為、彼に背を向けた。

すると松村は、背中から僕の身体に突然抱きついてきたのだ。

僕の仮面の笑顔が彼に好意を持っていると勘違いしたのか、それとも遅刻をオマケしている見返りが欲しかったのかは判らない。

僕は背筋に悪寒を感じ、全身に鳥肌が立つのを感じた。

勿論驚いたが、悲鳴など上げはしない。

「彼女」の胸を後から驚づかみにした松村の手を、思い切り振り払いながら振り返った僕は、その反動を使って幕の内一歩ばりのリバーブロー、とまでは行かないが、みぞおちに一発、軽い体重の全てを乗せて打ち込んだ。

身長155センチの華奢な真夕が、まさか拳を繰り出すなどとは思ってもいなかったのだろう。

若干贅肉体質の松村は、驚愕と苦痛の表情を露わに、腹部を抑えてのた打ち回り、翌日、僕はバイトを辞めた。

突然バイトを辞める理由として店長に全てを話すと、松村はその後、首になっただけの事、香織から聞いた。

「ねえ、ヒデちゃんがマユに会いたって言ってたよ」

その時、香織が言った。しかし、秀雄が僕に会いたい理由は判っている。

彼は僕を覆った「彼女」としての刑部真夕が好きなのだ。

一緒に働いている時から気付いてはいたが、できるだけ意識しないようにしていた。

もし、彼の気持ちを聞いてしまったら、結末は判り切っているのだから。

【第4話】

(F t M G I D・)

2

放課後、高校からマウンテンバイクを飛ばして農道を走る。

ライトグレーに紺とグリーンのチェックのミニスカートが風で靡いて、通り過ぎる車のドライバーはいついっ瞬脇見運転に転じてしまっ
うだろうが、そんな事はお構い無しに風を切って走るのは気持ちイ
イ。

小さな水路に山なりに掛かる橋を一気に上って全力で下ると、時
にオバチャンが運転するトロイ軽自動車を追い越す時がある。

二十一段変速のトップギヤのままペダルをこぎ続ける。

コンビニの在る交差点の信号が青の時は、そのまま600メートル
ほど先のT字路の突き当りまでノンストップで行ける。

T字路を右折して以前バイトをしていたハンバーガーショップも
入っている大型スーパーの横を素通りすると、何時も立ち寄る古本
屋がある。

店の前には学校帰りの立ち読み軍団の自転車行列をなして止まっ
ているが、僕も人の事を言える立場ではない。

「いらつしゃい」

顔なじみの僕に、店主の早川さんが声を掛ける。

僕は太抵ペコリと頭を下げる程度だが、女だてらに少女コミック
には目もくれず、サイコや北斗の拳などを愛読する風変わりな女
子高生という特別な認識があるらしい。

以前から欲しかったバリバリ伝説の全巻セットを買って店を出る。
古本屋の周辺は大きな新興住宅街になっているが、僕の住む住宅
地まではまだ1キロ弱はある。

農道を再び走ると自動車専用道路の高架橋の下を潜って右側に母
校の中学が見える。田んぼの真ん中に立っている為、かなり遠く

からでもその姿が見えるのだ。

左側には小高い丘が見え、草木が生い茂り、春夏は緑一面に葉緑素の匂いが立ち込め、秋冬は黄金色のススキと枯れ草の匂いが辺りを包む。

季節を色と香気で表現してくれる場所だ。

まあ、この丘が無くても辺りに広がる田園が十分に季節を彩る風景ではあるのだが……

丘には奥へと続く一本道があるが、何処へ続いているのかは定かではない。

緩くカーブしてその先は、鬱蒼と茂る草木の中へ消えている。

だた、この丘の下を通る時、微かに聞こえるエンジン音と入り口に掲げられた「CART」という看板の文字がやたらと気になって、緩くカーブした一本道を僕はいつも覗き込むように眺めた。

田んぼの埋立地に広がる住宅街には、僕が幼稚園に入る半年くらい前に引越してきた。と記憶している。

モデルハウスの建て売り一軒家を安く買ったのだ。

リビングとキッチンのデザインを母が担当した為、販売の抽選では優遇を受けたとか、受けないとか。

「あれ、母さん今日は早いだね」

夕方に母が家にいる事は非常に珍しい。

「これから打ち合わせなのよ。夕飯はカレー作ったから、後で温めて食べて」

母はそう言いながら、ライトグレーのスーツの上着を羽織ると、玄関からそそくさと出て行き、ガレージのアルファ155に乗り込んだ。

僕の母はインテリアデザインをする会社で、デザイナー兼プロデューサーをやっているらしい。

父とは僕が生まれて間も無く離婚した為、僕は父の顔を知らない。母が女手一つで育ててくれた訳だが、デザイナーの仕事は忙しく時間も不規則な為、小さい頃から夜を一人で過ごす事も多かった。そのお陰で母子家庭の割には何不自由なく暮らせるのも事実なのだが、以前通ったクリニックスでは、幼児期の孤独な心が「僕」を作ってしまった可能性も無くはない、などと曖昧な診断をする医者もいた。

しかし、小学校二年生までは、祖母が僕の面倒を見ていたわけで、幼児期に人並み以上の寂しさを感じた記憶はないし、物心着いた時に、僕は既に「僕」だったと記憶している。

それに、百メートルほど離れた場所には和弥の家が在り、幼稚園で知り合った彼とは、その頃はまだ空き地だった裏手の原っぱで、何時も夕方まで遊んでいた。

小学校に入ると、時折夕飯にも呼ばれたので、あまり寂しさは感じなかった。

ある金曜日の放課後、校門を出た僕に声を掛ける男がいた。

ヒステリックグラマーの長Tにエビスジーンズ、何より足元の黒いレッドウィングは見覚えのある出で立ちだった。

秀雄が校門前で待っていたのだ。

彼の通う進学校は、勉強さえきちんとしていれば何も文句は無いらしく、殆ど校則と言うものが無い。したがって、制服も無いのだ。「ごめん。待ち伏せするのもどうかと思ったんだけど、真夕の携帯番号知らないし、香織も教えてくれないから……」

「うん。別にいいけど」

すまなそうにしていた秀雄を少しだけかわいそうだと思った。

一緒に校門まで来たクラスメイトの晴香と加奈に手を振って、二人で自転車を押しながら県道を歩いた。

野鳥避けのテープが、水田のあちらこちらで風に揺れながら日の

光を受けてキラキラと反射光を発している。

「バイト、これから？」

僕が秀雄に尋ねると、彼は肯いた。

「学校早かったの？」

沈黙した空気が嫌で、片言の質問を僕は彼に投げ掛ける。

「今日は、職員会議が何かで短縮授業だったんだ。なんだか、どうしてもまた会いたくて……」

少し俯いたまま、遠慮がちな笑顔で話す秀雄の言葉に、僕はどう応えればいいのだろう。

彼の事は嫌いではない。いい奴だと思っている。ただ、それは紛れもなく、男同士で感じる感性以外の何物でも無い。

しかし彼は、僕のフィジカルな「彼女」に好意を持っているのだ。「付き合っている人とか、いるの？」

彼は俯いたまま、僕を盗み見るようにして微笑んだ。

「いや…… ああ……」

僕はどうすれば秀雄を傷付けずにこの状況を抜け出せるか考えていた。

「付き合ってるっていうか、凄く親しい奴はいるよ」

僕は、和弥に犠牲になってもらう事にした。

「同じ学校の人？」

「う、うん。小学校から一緒なんだ」

僕は、彼に向かって精一杯の笑みを浮かべて見せた。

彼も、僕の仮面の「彼女」の笑顔につられて微笑んでいたが、その顔は何処か引き攣っていた。

「特定の彼氏がないなら………俺と、付き合ってくれないかな」
ついに秀雄は禁断の言葉を口に出してしまった。

【第5話】

彼にしてみれば、さんざん迷い、悩み、覚悟を決めてここまで来て、ようやく発した言葉なのだと思う。

バイトの時より緊張した口元、少し引き攣った笑顔。彼の表情や仕草で痛いほどそれが感じ取れた。

僕はどうか婉曲な断り方が無いものかと、一瞬のうちに目まぐるしく頭を回転させた。しかし、いい言葉は浮かばない。

「あ、あのね…… ごめん。それは、無理だと思う」

僕は、自分の中の、本当の自分を言ってしまうおうか迷い、何度も喉まで出かける言葉を呑み込んだ。

「俺の心は男なんだ。だから、お前はいい奴だけど男女の交際は出来ないんだ」と。

「そう」

秀雄は下を向いたまま呟いた。

「あの……… 友達じゃ…… ダメ？」

僕も下を向いたまま呟く。

「ありがとう。お前いい奴だな。多分、そんな所が好きになったのかも。また会えてよかったよ」

彼は、少しだけ晴れやかな笑顔を見せると、押していたドッペルゲンガーのATBに跨って「じゃあ」と言って走り去った。

もし、身体もれつきとした男だったなら、いい友達になれたと思うと、今まで感じた事の無い悲壮感に包まれた。

性自認と同性の付き合いを求めても、時に身体の性別がそれを邪魔する。

自分も傷つき、同時に他人も傷付けてしまう。

これが、F t M G I Dとして最も辛い瞬間かもしれない。

僕は、秀雄に全てを説明して理解してもらおう勇気が出なかったのだ。

僕は少しの間、その場に立ち尽くして秀雄の後ろ姿を見つめていたが、彼の後を追わないルートを使って、別の農道を迂回した。

直線道路の先に、何時までも秀雄の姿を見るのが辛かったから。少しでも近道をしようと途中で入り込んだ住宅街を抜けると、初めて通る道に少し迷いながら、何時も通る高架橋の下に出た。

僕は何故だか目の前の、丘の上に続く道に向かって、マウンテンバイクのペダルを踏み込んだ。

どうしても、今すぐあの甲高いエンジン音の正体が知りたくなったのだ。

それを探求する事で、今さっき起こった出来事全てから逃避したかったのかもしれない。

両脇に草木が生い茂る舗装道路を、マウンテンバイクで駆け上がる。

緩いカーブの先には同じく青々と茂る草むらがガードレール越しに何処までも続いている。

自転車をこぎながら上を見上げると、鬱蒼と草木の茂る緑の丘の彼方には、五月の青い空に残像のように薄っすらと浮かぶ白い満月が見えた。

しばらく右にカーブした道は突然Ｔ字路になっていて、「CAR T」の文字の看板には矢印が記されていた。

真っ直ぐ行くと再び丘を下るのだろうかと思いつながら、僕は看板の矢印が指す丘の上にひたすら続く道へ右折した。

ギヤを二速まで落として一直線に伸びた坂道を一気に上がる。

坂道の向こうに、高圧線の鉄塔の先が見えて来て、その全貌が次第に露わになる。すると、途端に広くて平坦な道になった。

鉄塔は道路の右側に、左側には「CAR T・IN」の文字が書かれた看板が在って、ドライバーの身体が剥き出しの車の絵が描いてある。

「CAR Tって、ゴーカートの事……」

僕はその絵を見て、小さい頃に遊園地で乗った記憶のある、歩く

ようなスピードでチンタラと走る自動車に似た乗り物を思い浮かべた。

少し傾斜した入り口から、車が二十台は止められそうな広い駐車場に入ると、端のほうに数台の車が止まっているのが見える。

どうやらエンジン音は奥のフェンスの向こう側から聞こえてくる。フェンスの手前には、ギャラリー用と思われる二階建ての鉄骨で出来た見物台のようなものがあり、その横にはプレハブ小屋が建っていた。

フェンスの向こうに何かが通り過ぎるのがチラリと見えた。

僕は自転車に乗ったまま、フェンスの側まで近づいた。

乾いたオイルの匂いが薄っすらと漂っている。

目の前の直線を一台の小さな車が甲高い唸りを上げて駆け抜ける。「なんだ、これ……」

ヘルメットを被り、グローブをはめたドライバーは小さく首を横に傾けながら最初のカーブに進入していく。

車が小さく横滑りをしているのが見た目にもハッキリと判る。彼は小刻みにハンドルを修正しながら次のS字型にくねったカーブを通過して行った。

すると、別の車が目の前の直線を立ち上がって来るのが見えた。ワッペンを沢山貼り付けた鮮やかな黄色のツナギ姿は、まるでテレビで観たF-1ドライバーだ。メタリックグリーンのヘルメットが、太陽の日差しを受けてきらきらと輝いている。

遊園地のゴーカートとはまったく別の乗り物なのだと直ぐに理解した。

僕はギャラリー台の支柱に自転車を立てかけると、スクートを翻して二階へと階段を駆け上がった。

ギャラリー台の二階からはコース全体が見渡せ、その中を四、五台のカートが走っている。

急カーブでは時折キュッキュツとタイヤの鳴る音が聞こえた。

僕はギャラリー台の手すりにしがみ付いて食い入るようにそれら

を見つめた。

「スカートでそこに上るとパンツ見えちゃうよ」

男の声に振り返ると、少し汚れた作業用のツナギを来た青年が、階段を上がって来た。

【第6話】

「カート、興味あるの？」

少し汗ばんだ顔で笑いながらツナギの彼が言った。

「これって、普通の人も乗れるんですか？」

「みんな、普通の人だよ」

みんな普通の人…… と言う意味だろう。ミハエル・シューマ

ツハだって、佐藤琢磨だって見方によれば普通の人だ。

僕の訊き方に問題があつたようだ。

「乗ってみるかい」

彼の言葉に、僕は思わず大きく瞬きをした。

「えっ、乗れるんですか？」

「ああ、誰でもね。ビジターだと5分で千五百円。会員になると二時間4千円で乗り放題も選べるよ」

「カートは貸してくれるんですか」

「もちろん。ほとんどの人はレンタルカートを使ってるよ。あのツナギの彼と彼は自分のカートだけだね」

彼は、サーキットの中を指で指して言った。

「自分のカート」

よく見ると、レーシングスーツを来た人のカートは、赤や黄色でペイントされハンドルも青いが、他のカートは小さな白いカウルが着いているだけで各パーツもシンプルだ。

しかも自前のカートは、目の前のストレートを駆け抜けるスピードが白いカートとは全然違う。

それでも、レンタルでいいから乗ってみたかった。

僕はカバンからCOACHの黒い財布を取り出して中身を確認した。

所持金は4558円…… 乗れる。

「あの…… 乗ってみたいんですけど」

僕は、手すりに寄り掛かりながらタバコを吹かしていた彼に言った。

「そう。いいよ。でも、スカートじゃ…… ジャージ貸そうか」

「あ、大丈夫です。ジャージ持ってますから、着替えます」

僕はそう言つて、彼の後について階段を降りると、横のプレハブ小屋に入つて1500円を払い、書類にサインして、女性用ロッカーで学校ジャージに着替えた。

「そのヘルメット使つていいですから」

着替えを済ませてロビーに出てきた僕に、ヘルメットが複数並んだ棚を指差して受付の女性が言った。

明るい茶色の髪を後で束ね、化粧は少し濃い目だが、小柄で目のパッチリとしたかわいい感じの人だ。

僕が幾つかのヘルメットを被つてみて、一番ぐらつかないものを選ぶと、彼女が受け付けカウンターから出てきて顎紐の締め方を教えてくれた。

彼女はTシャツにナイロン生地のスツフジャンパーを羽織つたラフな格好をしていたが、甘いミントのような不思議な香りがした。思わず首からぶら下げたスタツフIDを見ると、天野千夏と言う名前らしい。

「あと、これ」

そう言つて彼女は小さな女性用サイズの軍手を貸してくれた。

「今日はこれで我慢してね。本当はドライビンググローブの方が、ハンドルにシックリくるんだけど」

彼女は笑顔でグッツ販売のコーナーに視線を送ったので、僕もその視線が示す場所を見た。

ドライビンググローブはS/M/Lのサイズが在ったが、値段を見るとどれも6千円前後だったので、僕は思わず途方に暮れた。

「黄色い旗が振られたら注意走行。赤旗は……」と彼女が簡単にフラッグの説明してくれた。

その時、走り終えた二人の男がロビーに戻つてきて、興奮覚めや

らぬといった感じで言葉を交し合っている。

自販機でジュースを買いながら僕を盗み見る二人の男の視線は「おいおい、このオネエチャン走るのか」といった感じた。

壁に掛かった大きな鏡に映し出された僕の姿は、155センチの小さな身体に大きなヘルメット……昔のB級SF映画に出てくる宇宙人のようだ……しかも、学校ジャージ……

「ピットへどうぞ」

さっきのツナギの彼に呼ばれて僕はピットに出る。

「フラッグの説明は受けたね」

僕はハイと応えた

「彼が、一周先導するから後ろについて、その時走行ラインを良く見て真似してね」

彼は優しく笑顔で説明してくれた。

既にエンジンのかかったカートのバケットシートに腰を埋める。

グラスファイバーでできたガチガチに硬いシートは、見た目よりも遥かに低い位置にある。まるで地べたに座る感じだ。

足を伸ばすと、ただの棒状のアクセルとブレーキのペダルにかかるうじでつま先がかかる。

（これで、大丈夫なのだろうか……）そう思っていると、ツナギの彼がウレタンのパッドを幾つか持ってきてくれた。

「このパッドを挟むといいよ」

腰の両サイドに一枚ずつ、もう一枚を腰の後ろに入れると、妙にシツクリ来てペダルもさつきより踏みやすい感じた。

「じゃあ、いきます」

僕の前に陣取っていた先導係りの、赤と黒の、背中にBridgestoneと書かれたツナギを着た男性が声を掛けてカートをスタートさせた。

初めての体験を目前に僕の心臓の鼓動は最高潮に達して破裂しそ

うに高まる。

足の先がカタカタと微かに震えていた。

先導係の彼の跡を追って、僕もアクセルバーを少しずつ踏み込んだ。

エンジンが軽い唸りを上げると、遠心クラッチが作動してガグンツという軽いショックと共に車が走り出す。

遊園地で体験したスピード感はあるという間に通り越して、それでも先導する彼は離れていく。

アクセルを更に深く踏み込むとエンジンが高らかに唸りを上げて地を這うような景色は後へ飛んでいく。

コーナーで先導係が大きくスピードを緩めたので一気に差が詰まった。

僕は彼と同じ様に外側の縁せきギリギリからハンドルを切る。

「重い……」 思わず声に出た。

ほぼ直結ギヤ比のノンパワステと、スリックタイヤのグリップ力でハンドルは異常に重い。

しかしほんの少しの切り角で、カートの鼻先はグンツとイン側に切り込む。

S字を越えて緩い左の次は急激に回り込んだヘアピンカーブが左・右と連続する。

さすがに大きな切り角を要する為、重いハンドルを力いっぱい切る。

大きな切り角といっても九十度、しかしたった九十度ハンドルを切るのに異常な腕力を要する。

緩い右カーブを抜けるとバックストレートに入り加速力が背中を押す。

先導係りに置いて行かれないようにアクセルを踏み込む。

黒鉄色のような、ザラついたアスファルトの川がめまぐるしく流れている。

このストレートがどれ位の長さなのか、視線の低さから来る錯覚により、まったく目測出来ない。

白い月の浮かぶ青い空も、直ぐ横のフェンス越しに鬱蒼と茂る緑一色の草むらも、目を向ける余裕など一切無い。

（何キロくらい出ているんだろ。まるで全力で走っている犬の目線のようにだ）

低い目線によって、体感する速度は実測の二倍以上だそうだ。

先導の彼はスピードを緩める事無くストレートエンドの右の直角コーナーに飛び込んで行く。

（ノーブレーキって事…… 曲がれるのか……）

僕は恐怖心から少しだけアクセルを戻して左端のギリギリ外側からイン側の縁せきに向かってハンドルを切る。

切ると言うよりもあてるといった程度だ。

理想のコーナリングはアウト・イン・アウト。マンガで見たことがある。

か細い首に遠心力がかかり、ヘルメットの為に何時もよりも重い頭が持つて行かれそうになりながら堪える。

イン側の縁せきを舐めるように通過して外側に膨らんだ頃、再び今度は右・左の緩いカーブを連続で通過した。

その直後、先導のカーブが急減速をする。

次の左カーブは三角定規の先のように鋭角だった。

慌ててブレーキを踏んだ僕のカーブは右に向かって遠心力が残っていた為、ロックしたリヤタイヤが急激に外側へスライドした。

カーブのブレーキがリヤにしか無い事をこの時僕は知らなかった。反射的にカウンターを当ててなんとか急場を凌いだ。

後で聞いた話だが、カウンターステアと言うのは、誰でも反射的に行う行為らしい。

ただ、その的確な角度は、熟練によって培われるのだと言う。

よたよたしながら左の鋭角コーナーを抜けると、緩い右の後に、短いストレートがあつて、その先にある最終コーナーが見えた。

先導のカーブは最終コーナーからピットロードに入ると、先導係の彼が僕に腕を大きく振って「どうぞ走って下さい」と言うゼスチャーを見せる。

最終コーナーを立ち上がったホームストレートを今度はアクセル全開で通過した。

【第7話】

「速い……」

僕は楽しくて雄叫びを上げたい気持ちを必死で抑えてアクセルを踏んだ。

照り返して焼けたアスファルトの温度がシートの下から感じられるくらい低い目線に、猛スピードで飛び込んでくる景色は、人間を離れた違う生き物になった気分になる。

それは男も女もF t Mも、性別など何も関係ない。

ここにいる時間は全てを忘れ、そして誰もが平等に走ることだけに全てを注ぐのだ。

あつと言つ間の五分間、時間終了の合図のチェッカーフラッグが振られた。

カートから降りると腕がだるくて力が入らず、ヘルメットの中は五月の陽気と緊張で汗だくになっていた。

横Gで固いシートに押し付けられた骨盤の突起した部分が少し傷む。

ふらふらと纏れそうな足をようやく運んでロビーに入ると、レーシングスーツと呼ぶに相応しい華麗な黄色いツナギを纏った男が、スポーツドリンクを飲んでいた。

赤いカートに乗っていた人だ。

「キミ、女の子なのに凄いね」

彼はツナギのジッパーを開け、上半身だけを脱いでTシャツ姿になるとツナギの袖の部分を腰に巻きつけながら笑った。

「今日が初めて？」

「はあ」

僕は愛想笑いを浮かべて応えた。

「やっぱり、女の子は自重が軽いから有利だね」

「そう言うもんなんですか」

僕はなるほど、と言った具合で肯いた。が、壁に掛けられた大きな鏡に映った僕は、髪の毛が乱れ、まるでセックスの後の火照った顔で気だるく微笑む少女のようだった。

その時受付の天野千夏が僕に近づいてきて

「はい、おめでとう」

そう言つて小さな名刺大のカードを差し出した。

「ライセンスカードだよ」

ぼかんと口を開けたままカードを見つめる僕に向かってツナギの彼が言った。

「このカードはラップタイムで45秒を切ると、お渡しするんです。ステップアップして90CCの カートに乗る事ができるライセンスなんですよ。それと、持込のカート使用もOKになります。その場合は会員に入会する必要があるんですけどね」

千夏は丁寧に説明してくれて、一緒に各周のラップタイムデータをプリントアウトした用紙をくれた。

四ラップ目に44,669という数字が見えた。

(めっちゃ、ぎりぎりじゃん……)

しかし、初日でライセンスカードを発行した女性は僕が初めてだそうだ。

まあ、中味は「彼女」じゃ無いからね……

それにしても、一周たった45秒前後しかかからないとは思わなかった。走っているともっと長い 時間を掛けて一周しているように感じる。

しかし、制限時間の五分間はあつという間にやって来る。

「キミ、高校生だろ」

「ええ」

ツナギの彼に訊かれたまま僕は応えた。

「あ、えつと……」

「あ、ごめん。俺、柳川龍二。宜しく」

僕が呼び名に困っていたと思ったのか彼は自己紹介した。

「あ、お…… あたし、刑部真夕です」さっき迄のアグレッシブな余韻で、僕は危なく「俺」と言いそうになった。

龍二は白い歯を見せて外の陽気のようにさわやかに笑った。

「柳川君はレースもやっているんだ」

最初に声を掛けてくれた、ピットの作業ツナギを着た彼が割って入った。

龍二は運送会社でトラックを運転する側、プライベーターとしてCARTレースに参戦しているようだ。

それにしても、「彼女」の身体がこんなに脆く根を上げるとは、それにCARTの運転がこんなにも体力を消耗させるとは思っても見なかった。

モータースポーツは確かにスポーツだと思った。

僕はラップタイムのプリント用紙を綺麗に四つ折りにしてカバンにしまうと、ジャージ姿のままプレハブ小屋のロビーを出た。

「またいらしてね」

千夏の声に振り返り軽く会釈した時、龍二が再びコースに出て行く姿が見えた。

【第8話】

(KAZUYA MIURA)

1

和弥とは幼稚園の送迎バスに乗り込む待合場で初めて顔を合わせた。

当時新しく引っ越してきたばかりの和弥を、僕はあちこちに引っ張りまわして遊び相手にしていた。

その頃は近くに空き地や林があつて、子供の探検意欲をかき立てた。

小学校に入ってから和弥とは殆ど毎日遊んでいたが、三年生くらいの頃から二人の身長に差が生じ始め、五年生の夏には十センチの差がついてしまった。

六年生になったばかりのある日曜日、空き地に積み上げられた工事用資材の上で遊んでいた時に、僕は誤って二メートル下に転落しまった。

幸い、右足を亀裂骨折しただけで済んだが、一緒にいた和弥は、女の子を危険な場所に連れて行つたと両親にひどく叱られたらしい。僕が入院した病室に見舞いに来た和弥とその母親に、僕の母は何度も気にしないでくれと言っていた。

退院も近づいたある日の夕方、和弥が一人で見舞いに来た。

最初、少しだけ気まずい空気が流れたが、僕が誰かの置いていったクッキーの詰め合わせを差し出すと、和弥の顔に何時もの笑顔が戻った。

この時僕は、和弥に自分の真実を話す事を決意した。と言っても、一ヶ月前に診断を受けたばかりの小学生の自分にも、理屈はよく判らなかった。

「そうか、どうりで」

僕が、自分の言葉で性同一性障害の事を話終えた時、和弥は小さく笑ってそう言った。

「どうりで？」

僕は彼の笑顔を見つめた。

「マユと一緒にいると、女という感じがしないんだ。っていうより、そんな男とか女とかなんて感じさせない。だから、今でも平気で一緒に学校にも行くし、一緒に帰るのも何ともない」

小さい頃、男の子に混ざって男言葉を使う少女は必ずいるものだが、そう言った娘達とは何かが違うという事を和弥は気付いていたのだ。

「真夕」の中の同性に引かれた友情が、僕らの間には既に存在していたのかもしれない。

「変だと思わないのか？」

僕は、あまりにもあつさりと事実を受け止める和弥に尋ねた。

あまりのシヨックで今は平静を装っているが、次に会ったら今までの関係でいられなくなるのではないかと言う不安が頭の中に渦巻いていた。

「そりや変だよ」

彼は、さらりと言った。そして「でも、それがマユなんだからしようがないじゃん」

僕は、和弥の言う「しようがない」と言う言葉が、とても潔いものに思えた。

「そうなんだよ。しょうがないんだよ」

僕は、正面の白い壁を見つめて呟いた。

この時和弥の言った言葉が、その後も僕のFtMに対してのストレスを和らげていたのは事実だ。

「俺は、マユの性格もその容姿も好きだ。心は強いが、身体は女だから弱い。それは俺が守ってやる」

和弥は少しだけ真剣な目をして僕を見た。

「別に、守ってくれなくて大丈夫だよ」

僕は、和弥の視線に少してれながら言った。

「いや、お袋が言ってた。大きくなればなるほど男と女の身体には差が生じる。女の弱い部分は男が守るんだ。って」

「俺は大丈夫だよ」

「うん。俺もそうは思ってる」

辻褄が合っていないと、僕は思わず吹き出してしまった。

「もしも、って事さ」

和弥はそう言っただけで食事用のテーブルを僕のベッドの上に設置して、右腕を差し出した。

どうやら腕相撲をやるうと言っらしい。

昔何度かやったが、和弥には負けたことが無い。

僕も前屈みになって右手を差し出した。

今まで気に止めた事は無かったが、和弥の少し黒い腕と僕の白い腕の色の差が、あからさまに男女の差を表しているように感じた。

「何時でもスタートしていいよ」

和弥が自信に満ちた笑顔で言った。

【第9話】

手を握り合った握力の差を既に感じ取った僕は、少しでも隙を突こうと、一呼吸半の半端な間合いで右腕に渾身の力を込めた。

和弥の腕は一瞬ふらついたが、その後は鉄の棒でも掴んでいるかのようにびくともしない。

僕はその状況が信じられず彼の腕を睨みつけながら力を入れ続けた。

和弥は本気で力を入れていない様子で、軽く微笑んでいる。しかし、その直後、グイッと大きな力が掛かったかと思うと、あっという間に僕の白い腕はテーブルに叩きつけられた。

僕は、既にこんなに男女の身体の差が出ている事に驚きを隠せなかった。

「俺の態勢に無理があるんだよ」

僕は思わず言い訳がましく吐き捨てた。

「あははは、そうかもな」

和弥が笑って言ったその言葉は、彼なりの優しさの現れだった。

「あ、三浦が来てる」

病室の前にクラスメイトの由佳里と敬子が来ていた。

「じゃあ、俺帰るから」

そう言って和弥は何時もと変わり無い笑顔で帰っていった。

「三浦って、もしかして毎日来てるの？」

ベッドの横に近づいた由佳里は、興味津々の目で言った。普段から彼と仲がいいのは彼女も知っている。

「まさか。初めてだよ」

僕はチョットだけウソを言った。

「そうなんだ」

敬子がそう言いながら、お見舞いに持って来た小さな鉢植えの花を、ベッドサイドの棚に置いてくれた。

その後、お菓子を食べながら、いかにも女三人、と言うようにキヤッキヤと盛り上がる。

病室の窓からは、オレンジ色に焼けた空と雲に覆われて、歪んだ夕日が大奥山脈に沈んでいくのが見えた。

和弥は中学に入ると、僕とは対照的にみるみる男らしさを増していった。

身長も170センチを越え、僕との身長差はますます広がる。ただ、部活の関係もあって二人で登下校する事はほとんど無くなった。彼はサッカー部に入り、僕は写真部に入った。

本当は僕もスポーツをしたかったが、女子専用のユニフォームをどうしても着る気になれなかった。

女生徒の制服を着る僕がそう言うのも変だが、これが精一杯なのだ。

和弥とは一年と二年の時はクラスが違ったが、相変わらず僕達は仲が良かった。

僕が初めて他のクラスの男にラブレターを貰った話を見ると、腹を抑えて大笑いしていた。

クミと敬子は学校の帰り道が途中まで一緒だったので、よく一緒に帰ったが、ふと気付くと、五十メートルくらい後に和弥の姿が見える時がある。

そんな時は、クミと敬子に手を振った後、さりげなく彼を待っていてやったりもした。

クミの進めで少しだけリップを塗ったり、コロンを着けたりする僕を、和弥だけが昔のままの「僕」として対等に付き合ってくれる。僕はそう信じていた。

中学三年の夏休み、和弥は僕の部屋に遊びに来ていた。

「あ、これマユが使ってるコロン？」

和弥は、カラーボックスの上に置いてあるジバンシーのコロンを手にとって言った。

昔は、よくお互いの部屋を行き来していたが、最近は滅多に部屋に上がる事は無かった。

互いに男同士、女？同士の付き合いもあったし、和弥と遊ぶ時があっても、自転車に乗って、一緒に買い物をしたりゲーセンに行ったりするからだった。

「随分増えたね」

和弥は小さなチェストの上に並ぶ、バリ猫の置物に視線を向けて言った。

「あははは、何時もつい買っちゃうから、自然に増えるんだよ。でも、この前敬子が来た時二つ持っていかれたけどね」

猫の置物もそうだが、僕の部屋にはぬいぐるみの類も多数ある。

そう言った可愛いものが意外と好きなのだ。唯一、それを見ると母は安心するらしいが、別に男の子がぬいぐるみを好きでもおかしくは無いと、僕は思う。

だから、それが微かな女心……とは違うものだ、僕は思っているが。

その時、何かを指で指そうとした和弥は、カーペットの上に置いた麦茶の入ったグラスを倒してしまった。

「あ、ごめん」

「大丈夫だよ。すぐ拭き取れる」

僕は急いでタオルとティッシュを使ってそれを拭き取った。

今思えば、下着が透けるようなＴシャツにハーフパンツと言った、僕の無防備な格好も悪かったのかと思う。

心と身体が同調している健康な中学生の男子に対する認識が、甘かったのかもしれない。

【第10話】

和弥は急に僕の手を握ると、いきなりカーペットの上に押し倒してきた。

僕はあまりの突然の彼の行動に声が出なかった。

困惑した僕の顔は、おそらく普通の少女だったと思う。

和弥は僕の唇に、自分の唇を重ねようとしたが、僕は顔を背けてかろうじて難を逃れた。

しかし、彼は我を忘れたように僕の胸をまさぐり、股間に手を伸ばした。

僕は訳が判らず和弥の頭を抱えて自分の胸に強く押し当てた。

「したいの？」

僕が彼の耳元で呟くと、彼の手の動きが止まった。

「……和弥がどうしてもしたいなら………べつに、いいよ……」

その時言った僕の言葉は、なぜか本心だったと思う。

和弥は僕の声に我を取り戻したかのように起き上がると

「ごめん、ごめん。本当にごめん」

そう言って、床に頭をガンガンぶつけて誤った。

「いいよ。俺も、うかつだったんだ」

「違う。俺は……最近どんどん女らしくなっていくマユの外見に、惑わされそうになるんだ。外側ばかり見てしまうんだ。俺達は、メンタルで……男同士で付き合う間柄のはずなのに……」

和弥は涙を流しながら、抑えきれない自分の欲情する気持ちを恥じるように話した。

「違う、それは正常な事なんだよ。俺は、周囲に隠して女子として生きているし、学校ではお前と話す時も女の言葉を使う。だから、和弥が感じる感覚はきつと正常なんだよ」

僕は座り込んだまま和弥の頭を自分の胸に引き付け、両腕で抱え込んで言った。

彼の息遣いが心臓に直接掛かりそうなほどに熱く、僕の鼓動が大きく胸を震わせ、彼の頭蓋骨に響いていた。

「いや、やっぱり違うよ」

彼は僕の胸から頭を離して、僕に向き直った。

「俺だけは、マユのフィジカルな部分にとらわれてはいけないと思う。その外見を通して、あくまで男である真夕を見なくてはいいんだ」

彼は、両腕で涙を拭いながら言った。

GIDの苦悩は心身の成長と共に次第に増え、膨れ上がるのだと実感した日だった。

その夜僕は、明日からも今まで通り和弥と仲良くやって行けるかと言っ不安で殆ど眠れなかった。

何故なら、今のところ彼だけが、同世代で僕を理解してくれている、たった一人の親友だからだ。

和弥の手の感触が身体に残っている。

勿論、他人に触られたのは初めての経験だった。

いつその事、この身体で彼の男としての性欲を包んであげればよかったのかとも思う。

それが、「彼女」の身体を持った僕にできる、特別な手段のような気持ちさえ沸き起こるのだ。

「あなたは、心は男でも身体はれっきとした女性なんだから、これからはセックスをしたら子供もできる身体なんだからね」

初めて生理がきた日、母が僕に言った言葉を思い出した。

そしてこの日、ホルモン治療や外科的治療まで施して、自分の本当の姿になろうとする性同一性障害者達の気持ち、ほんの少しだけ判ったような気がした。

【第11話】

(KAZUYA MIURA)

2

「マユ、こつちにあるぞ」

陳列棚の影から和弥の呼ぶ声が聞こえた。

カー用品店の中をうろつく制服姿の高校生二人を、直ぐ近くにいた茶髪の男が怪訝な表情で見ていた。

僕は和弥を誘って大きなカー用品店に出向いていた。

カートに乗る為のグローブとヘルメットを購入する為だ。

ところが、和弥の呼んだ場所に行つて見ると、そこに吊るされているのは、手の甲が茶色のメッシュで出来ていて指が途中で無くなっている手袋だった。

「これ、違うんじゃない」

「そうなの？でも、俺のおじさんが昔、これ着けて車を運転してるの見たよ」

「これは、きつと普通の車用なんだよ」

そう言つて僕は別の棚を物色した。

一番奥へ行くとRECAROと書かれたシートが素で置いてあるのが見えた。

なんだかカートのシートをデカくしたような感じだ。

きつとレース用なのだと思います、その周辺の棚を見渡すと

「あつた！」

グローブが数種類陳列してある。

「あー、これかあ」

和弥が僕の後ろから覗き込むようにして言った。

SSのサイズのグローブを迷わず手にした。

何気なく横を見ると、白地に赤とブルーで鮮やかにペイントされたヘルメットが飾つてある。その下に吊るされたカタログを見ると、

真白なヘルメットでも値段は五万八千円もする。

「……高っ」

おそらくは、ペイント代は別なのだ。

「うわっ、たっけー」

僕が開いたカタログを覗き込んだ和弥が、思わず声に出した。

僕は近くにいた店員に、もっと安いヘルメットは無いかな尋ねた。

「自動車用は強度や機能面の関係でどうしても高いんですね。カ
ートだったらバイク用でもいいんじゃないですか？」

なるほど。バイク用なら、一万円前後から在るそうだが、しか
し、この店では二輪用は取り寄せになると言う。

とりあえず僕は、グローブを買って店を出た。

「そう言えば、前に智弘達で行ったバイクショップに沢山ヘルメッ
トが売ってたよ」

店の駐車場で和弥が思い出したように言った。

さっそくそのショップに案内してもらい店内に入った。

「気に入ったのがあったら被ってみてね。サイズはあるから」

屈んで在庫整理をしていた店員が言った。

僕は、Araiと描いてある赤いフルフェイスのヘルメットを買
った。結局三万円以上の出費だったが、店員の男性が、サービスで
スモークシールドを付けてくれた。

「俺もバイクの免許取ろうかな」

店頭に並ぶバイクに触発されたのか、帰り際に和弥が呟いた。

バイパスの大通りの歩道を和弥と並んでマウンテンバイクを走ら
せる。

歩道の段差でジャンプする和弥に負けじと、僕も立ち上がって、
ペダルを停止させて車体をホップさせる。

短いスカートが跳ね上がり、一瞬、股間を風が吹き抜ける。

対抗して走って来た自転車の、大学生風のリュックを背負った男

の目が「ラッキー」と言った具合にニヤケても、別に大した気にはならない。

中三の夏、不安で眠れなかった夜はウソのように和弥とこうして一緒に自転車を走らせている。

彼が僕の身体に覆い被さったあの後も、僕はそれまで通りの自分を変えなかった。

僕は、あくまでも僕らしく生きるしか方法は無いと思ったから。和弥も次第に、「今日は女っぽいな」とか、「たまには私服でもスカート履けば」などと冗談交じりの事を言うようになった。

制服のミニスカートを履いている時に「パンツ見えてるぞ」と言う事も、平気で言うてくるようになり、

「マユ、制服でジャンプしたら、パンツみえちゃうぞ」

ほら、和弥が言った。

「別にいいよ」

その応えが僕の口癖だった。

【第12話】

(After School)

稲の生え揃った新緑の水田をそよいで通過した風は、冷気を吸って半袖の制服には肌寒くさえ感じる。

しかし、長袖を着てカートコースを10ラップも走ると、アスファルトの照り返しもあつて、ヘルメットに納まった額は汗が滲んでいる。

初めてカートに乗って以来、僕は毎晩腕立て伏せを始めたが、「彼女」の身体は最近やっと三十回できるようになった。

高校に入ってもサッカー部に所属した和弥は、100回は楽勝で150回を越えるとおちよつとキツイかな。とあっさり言っていた。「タイム、かなり出てるよ」

ロビーで一休みする僕に、佐々木が声を掛けて来た。

佐々木とは、一番初めに声を掛けてくれた作業用のツナギを着た男だ。

彼は、ピットで主にメカニックを担当しているそうだ。他にもメカニック兼、先導係が二三人いる。

僕はウィークデイの放課後にココへくる事にした。今日で三回目だ。前回から会員に入り二時間の乗り放題コースを選択している。

この前、土曜日に来たら、大学生や一般の人などでかなり込み合っていて、順番待ちに時間が掛かりそうだったので平日に来る事にしたのだ。

平日の午後は、五、六人程度のお客なので、文字通り時間内は乗り放題だ。

ただ、乗り放題といっても、5周ごとにカートを乗り換える必要がある。

同じ車を走らせ続けると、エンジンやタイヤに負担がかかり、熱

ダレを起こしてしまうらしい。

そう言えば、最後の五ラップ目は何時もタイムが落ちているのは
そう言う理由なのかと知った。

「ねえ、これからも乗るんだったら、あたしのツナギあげようか。
お古だけど」

千夏が声を掛けて来た。

地方のカート場では、まだまだ女性が少ないという事もあり、彼
女は何かと僕によくしてくれる。

「えっ、ツナギ」

「ええ。使わなくなっただのがあるから、今度持つて来ておくわ」

薄々は感じていたが、やはり彼女もカートに乗るのだ。しかもツ
ナギをくれるなんて、なんてラッキーな事だろう。

女？でよかった！

「あ、はい。喜んでいただきます」

僕は満面の笑みで応えた。

「身長もあたしとあまり変わらないから、きっとサイズは大丈夫よ」
彼女はそう言いながら笑って、再びピットに入る僕を見送った。

* * * *

煙のような粒の細かい雨が、朝から激しく降り続いている。

草木の色が何時もより濃い緑色に染まり、辺りの景色はいつそう
暗さを増している。

こんな日は仕方なく家の近所からバスに乗って学校まで行く。

何時もは空いているバスも、雨の日は学生達で混雑し、女子高生
が圧倒的に多い車内は、少女達のムレた匂いで男子学生は圧倒され
る。

バスの高い窓からは、全ての車や通行人を見下ろせる為、日常か
らトリップしたようで少しだけ気持ちいい。

毎日見慣れた景色も、まるでどこか知らない場所へ来た気分になる。

水滴の着いた窓越しに、低い灰色の雲が何処までも上空を埋め尽くしている。僕は、その景色を眺めて、考え事に耽っていた。

何かバイトを探さなくてはならない。

一回に4千円が飛ぶカートに乗り続けるには、収入方法を考えなくてはならなかった。

ヘルメットとグローブにもお金をつき込んだ為、貯金がかなり減ってしまった。

それに、最近は90CCのカートにもチャレンジしてみたい衝動に駆られていた。しかし、レンタルカートの90CCは乗り放題が無いのだ。

いつそのこと、自分のカートを買ってしまおうか……　しかし、そんな金は何処にも無い。

学校前でバスを降りて正門に入ると、駐輪場に和弥の姿があった。

「こんな日に自転車で来たの？」

「ああ、帰りは部活があるからな」

和弥は濡れた髪をスポーツタオルで拭きながら笑って言った。彼は僕の傘に無理やり入り込むと、二人で昇降口まで走った。湿った空気に蒸されて、和弥の身体は男の匂いがした。

それは、僕の身体からは絶対に発しない匂い。

【第13話】

そんな日の帰り、昇降口を出た所で携帯電話が鳴った。

「もっしー、元気！」

以前のバイト先で知り合った香織からだった。

相変わらず陽気でハイトーンな声に思わず笑いが込み上げる。

「元気だよ。どうしたの？」

「マユって、今どうしてんの」

「どうしてるって？」

「バイトとか」

「ああ、今探してるところなんだ」

校門を出るとき、部室へ向かう和弥が僕の横を通り、軽く手をあげる。僕も携帯に喋りながら彼に軽く手を上げた。

高校に入ってから、僕達は校内で必要以上に二人でいる事は殆ど無い。今朝のような事も稀である。

僕はまだしも、和弥には彼女が出来てもおかしくないからだ。

女同士の噂話で、和弥が他のクラスや後輩にまで人気があることは、随分前から把握している。

僕は、出来るだけ周りの連中と同じ、ただ仲の良い友達に見えていなければならぬ。

和弥はと言うと、そんな事考えているのかいないのか、ただフラシクに接するよう心掛けているだけのようだ。

ただ、時々どちらかが映画へ行こうとか、買い物に行こうとか声を掛ければ、忽ち昔のように一緒に行動する。

お互い気が置けない間柄という事に变りは無かった。

「ねえ、聞いてる？」

香織が忙しく話し続ける。

「えっ」

「だから、いいバイトあるんだって」

「どんなバイト？」

香織がいいバイトと言う時点で、かなり怪しい…… 僕はダメ元で彼女と待ち合わせをした。

香織が通う女子高は、僕が何時も帰る道の途中、農道の突当たり丁字路を大型スーパーと逆に曲がってしばらく行くと在る。

近くに駅もあり、少しだけ拓けた商店街も建ち並ぶ。その駅前にある、シャルルと言う喫茶店で待ち合わせた。

朝、バスで来た僕は、帰る方向が同じ適当な奴に声を掛けて二ヶツしてもらった。

「橘、途中まで乗つけて」

丁度、駐輪場から出てきた彼は、同じクラスだが二人きりで話したことはあまりない。が、他の連中と複数で雑談を交わした事はあった。

彼の家は、確か僕の向かう方向に在ったはずだ。

「ああ、別にいいけど」

僕に声を掛けられた橘は、少し驚いていたが、軽く了承してくれたので、彼の自転車の後ろに立ち乗りして軽く肩に手を掛けた。

「なに、今日はバスで来たの？」

橘の声は、少し緊張した様子だった。

「うん。だって雨が凄かったじゃん。橘は？朝、濡れなかった」

髪を風で靡かせながら、僕は後から彼に応えて訊き返した。

「朝は傘さして来たけど、びしょ濡れだったよ。昼までジャージを着ていた奴らはみんなそうさ」

「あ、そうか」

立ち乗りの高い目線は軽い優越感を感じて意外と心地よい。

雨は昼頃にあがって、暖かい太陽が顔を出した為、路面は既に乾き、水田も何時もの明るい緑に戻っていた。

「刑部って、変ってるよな」

彼は僕に意外な事を言った。

「何で？」

「だって、けっこう人気あるのに、誰にでも親しく話すから」

「人気？」

僕は、彼の顔を覗き込むようにして応えた。

「あ、いや。別にいいんだ」

橘はそう言って少し俯いて笑うと、自転車のスピードを上げた。

友達と待ち合わせの事を話すと橘は

「少しだけ遠回りになるけど、サービスだ」と言っ、シャルルの前まで送ってくれた。

「ありがとう」

僕が笑って手を振ると、彼は少しだけ赤面しながら軽く手を上げて立ち去った。

シャルルに入って、香織を見つけて近づくと、彼女が笑って

「あんた、何気にアッシー持ってるの？」

「そんなんじゃないよ。今日はバスだったから」

「冗談だよ」

少し真顔で言い訳する僕に、彼女は笑って言った。

僕はアイスアップルティーを注文すると、早速香織に尋ねる。

「で、バイトってどんな」

「うん。実はあたしらの学校で、デート援交ってのが流行っててさ」

「援交……」

僕はヤッパリと思った。

「違うんだよ。普通のとは。ただオジサンとデートしてあげるだけ。食事とかドライブとか」

「エッチしないって事？」

「そうそう。いやらしい事は全部禁止」

「そんなんで、お金くれる人なんているの？」

「それが、けっこういるのよ。みんな女子高生と仲良くしたいらしくてさ」

香織は得意げな笑顔で話し続けた。

「危ない目にあっただ事とか無いの？」

僕はいちいち質問を投げかける。

「無いよ。あたしら四人で組んでるんだけど、今の所誰も」

僕は無言でアップルティーをストローで吸った。

「けっこう依頼が多くてさ。四人じゃ回らなくなったから。エッチな事が無ければマユも大丈夫かと思って」

「学校にばれない？」

「大丈夫、お客はみんな隣町や、もっと遠くから探してくるし、みんな口は堅いから」

僕は、考えておく。と言って、香織と別れ、駅前からバスに乗って帰宅した。

【第14話】

(M t F・G I D)

本革張りのダッシュボードにウツドのセンターパネル。

HDDオーディオの八個在るスピーカーからはエアロスミスの曲が流れている。

僕は濃紺に輝くBMWの、助手席の優美な本革シートに座っている。勿論、日曜だと言うのに、相手の希望で制服を着ている。

映画をみて、食事をして、洋服まで買ってくれる。

隣で運転する長岡理というこの男は、40代のやさおとこで、隣接する町で歯医者を開業しているそうだ。

妻子持ちでありながら、何が不満で女子高生を連れ歩くのか、僕には理解し難い。

二時間で1万円、延長一時間毎に5000円が追加される。

半日一緒にいれば、だいたい3万円くらいになるのだ。

まあ、エッチな行為が無いとこんなものか。

開始と終了の際、香織にメールを入れる。

掲示板に書き込むリスク料として、香織が1割を徴収している。

勿論、自己申告制だが。

物は試しと、香織の誘いに乗ったが、車での移動は手を繋ぐ必要も無く、意外と楽だ。

「時々は、手とか繋いであげるんだよ。スキンシップだから」香織はそう言ってアドバイスをしてくれたが、僕にはムリだ。が、長岡も別にそれを要求する事も無い。

こんなに楽にお金を稼いでいいのかと、在る意味不安になる。

この男と会うのは二回目だが、買物という僕がジーンズやTシャツばかり選ぶので少し不思議に思っているらしい。

「あたし、ボーイッシュな動き易い服が好きなんだ」

そう言って誤魔化すと、彼の綺麗な目は優しく微笑む。

彼は、ミニスカートやワンピースをしきりに勧めた。彼の気に入った服を買ったとしても、会う時は何時も制服だから、実際は関係ないのだが。

ダークブラウンに染めた髪、少し切れ長の二重はシャープな印象だが、瞳は透き通るように綺麗だ。

ハンドルを握る手は僕より遥かに大きい、何となくしなやかな長岡の指先は歯科医だからだと思っていた。

「キミは何か、コンプレックスでも持っているのかい？ いや、外見より、寧ろ心にコンプレックスを抱えている感じだ」

5回目に出会った時、少し離れたショッピングモールまで買い物に足を伸ばした帰り道、長岡が突然言った。

「どうして？」

僕が訊き返すと、彼は少しだけ笑って「いや、何となく」

高速道路の追い越し車線を、NSXが、甲高い音色を奏でながら猛スピードで走り抜けて行き、二人の視線は一瞬それを目で追った。

「僕は、男であって男じゃないんだ……」

少しの沈黙の後、長岡は視線を正面に向けたまま、突然呟いた。

僕はその言葉に思わず彼の横顔を見つめた。

「僕の本当の心は女性なんだ。僕は自分が何であるのかを知りたくて、歯科医を目指す側、心理学も勉強した。今でこそ誰でも聞いた事があるかと思うけど、僕は性同一性障害なんだ」

M t F G I D…… 僕は何のリアクションも出来なかった。

「なんで、そんな事、話すの……」

僕は、高速を走るBMWのエンジンノイズと、室内に立体的に流れるビーギーズの音色で掻き消されそうなほど小さな声で、長岡に尋ねた。

「僕は、こうして男の外観を貫き通す事によって、傍目には幸せな

家庭を持つ事が出来た。でも…… 今でも男性を欲する事はあるよ。ただ、こんな風に、若い女の子と買物したり、食事をしたりすると凄く気が紛れる」

「奥さんはその事、知ってるの？」

「まさか。妻は僕の心が女性だなんて知らないし、今更話す気もない。だって、メンタル的に見れば、レス行為によって子供を産んだ事になってしまうからね」

僕はその言葉に少しだけドキリとした。

そうだ、僕がもし好きな女性と抱き合ってキスをすれば、フィジカル的にはレスになってしまう。かと言って男と肉体的に繋がれば、メンタル的にホモ行為なのだ。

【第14話】（後書き）

注）G I Dと同性愛者が混同される場合が多々あるが、根本的に違うものである。G I Dの多くは、性自認する性別に対しての異性に心を引かれる。だから、身体的に見た場合同性に引かれているように見えるのだ。異性に引かれる場合を除いても、身体の性に反して自認する性別は、それ自体が個別のものなのだ。

【第15話】

「長岡さんは、女性とそういう事をするのに抵抗はなかったの？」

「最初は悩んだよ。男性とも何度か経験した。でも世間的に普通の家庭を持つ為には、結局僕が我慢するしかないんだと気付いたんだ。だから、今でも妻とはセックスをする」

僕は、この人の覚悟に驚いた。そんなに割り切れるものなのだろうか。

僕に、かわいいワンピースやスカートを勧めるのは、若い頃、自分が身に着けたくても出来なかった事への執着の現れだったのだ。

「じゃあ、奥さんと一緒にいるのと、あたしを連れまわす事の違いつて、何なの」

僕は、手っ取り早く少年を買った方がいいのではと思い、彼に尋ねた。

「何て言うのかな…… 高校の頃を思い出す。そして、自分の身体も女性だったら、当時、自分はどんな事をしたんだろうって。同級生の女の子達が普段どうしているのか、男兄弟しくない僕には謎だったからね」

「僕って変かな」と彼は最後に付け加えた。

僕は、無言で小さく首を振ってそれを否定した。

言われてみれば、僕は小さい頃から和弥が側にいる為、日常の、同世代の男の生態を常に身近に感じてきた。

僕の反射的な男としての行動は、周りの情報もあるが、和弥の影響も大きいはずだ。

もし近くに和弥がいなかったら、一人っ子の僕も、近づきたくても近づけない性自認する同性達にあこがれてしまっていたのだろうか。

「マユは……」

長岡が突然そう言って言葉を呑み込んだ。

「何？」

僕はその先の言葉が、何故か無性に聞きたかった。

「キミは、実は男の子じゃないのかい」

長岡は一瞬僕に笑顔で振り向いて、再び運転する視線に戻った。

「何故、そう思うの」

僕は出来るだけ、自然な笑みで応える。

おそらく長岡は自分と同じ臭いみたいなモノを感じたか、それとも心理学的見解から勘ぐったのか・・・僕はそう思った。

「マユが選ぶ服もそうだけど、時々一瞬見せる仕草でなんとなく。確信はないけど」

彼は、僕の事を僕が思っている以上に見て、考えているらしい。

「もしそうなら、キミはかなり頑張っているんだと思ってさ」

「頑張ってる？」

「だって、普通の人から見れば、どう見たってかわいい普通の女子高生だ。化粧も上手だし。言葉使いだって、全然普通の女の子だし。それって、僕が男を演じるよりも、ずっと大変なんじゃないかと思っ
つてね」

長岡はチラチラと僕に笑みを投げかけながら話した。

「普通なら、もっと男っぽい女になって自認する性をアピールする。それなのにキミは、女らしさをあえて楽しんでいるようにも見える」
当たっている。僕はいつその事、女らしい女を演じてやろうと日頃思っている。そしてそれを楽しんでいる。

だからストレスが少ないのだ。

「女の子になり切るのが楽しい…… のかもね」

僕はそれだけ言って微笑んで見せた。

それ以上ハッキリとは応えなかった。

こんなに自分を理解してくれる人に会ったのは初めてだった。

和弥は、確かに理解はしてくれるが、同じような境遇で生きている訳ではない。

しかし、長岡はきつと、僕の今までの辛い体験や、切ない気持ち

を理解してくれる。

彼も同じような体験を乗り越えて今に至るのだから。

僕は、なんだか目の奥が熱くなって、本当の事を喋り出したら止まらなくなってしまうそうで、そして泣いてしまいそうで、全てを呑み込んだ。

インターチェンジ周辺に連立するゲルマニウム灯のオレンジ色の光が、後へ飛んでいくのを、僕はただじっと眺めていた。

その夜、長岡から携帯にメールが届いた。

『どちらの性で生きるかはキミしだいだ。がんばって。

N A

G A O K A 』

その後、彼からの援助デートの依頼は無くなった。

僕自身も、こんな事を続けていたら、人間がダメになってしまいそうで、そろそろ足を洗おうかと思っていた所だった。

だから、他の客を取る事はしなかった。

結局僕の部屋のクローゼットには、一度も履かないであろうスカート類が、5着もハンギングされている。

そのうち和弥にでも見せてびくりさせてやろうか。

それにしても驚いたのは、自分の心の性を偽って結婚している人がいるとは思わなかった。

もしかして誰にも相談できずに、こっそりと結婚している人が意外にいるのかもしれない。

長岡のように、女性の心を持った男性「M t F」の数は、僕の「F t M」に比べて圧倒的に多いと聞いたことがある。

M t FとF t M同士が惹かれあえば、理論的には著尻が合うと言うが、果たして男の姿をした女性を愛する事ができるか、それが問題になる。

その後も、香織は相変わらず援助デートを続ける事を進めてきたが、彼氏が出来たからと言って断った。

【第16話】

(Good Day)

「楽しんでね」

キッチンで忙しく動き回る千夏が僕に言った。
今、僕は彼女の部屋にいる。

二週間以上カート場に顔を出さなかったので、携帯に千夏から電話が来たのだ。

「もしもし、千夏です」

「あ、こんにちは……」

「しばらく来ないからどうしたのかと思って」

「あ、ちよつとバイトとか忙しくて……」

「よかつたら、ウチに来てツナギの試着してみない？」

そう言って誘われた時は正直驚いたが、よく考えれば、彼女から見た僕はカート好きの、ただの女子高生なのだった。

キッチンからホワイトソースとチーズの焼ける香ばしい匂いがする。

学校帰りに直接立ち寄った為、丁度お腹も空いてきたところだ。
フローリングの床に、白い壁と天上。

床にはチロリアン柄のラグマットが敷いてあり、天上から釣り下がっている照明器具は、黒い傘の少し変ったデザインだった。

黒いチェストの横には小さな、同じく黒い鏡台が置いてあって、コスメが並んでいる。

僕は思わず、千夏がどんな化粧品を使っているのか気になって、少しだけ覗き見る。

「今オーブンで焼いてるから、もう少しね」

彼女はそう言っただけアンティークウッドで出来たテーブルの、僕の目の前にあるグラスにアイステイーを注ぎ足すと、クローゼットに

手を伸ばした。

ハンギングしたセルリアンブルーのツナギを取り出す。

胸にはENDLESSと白い文字で描いてあるそれは、ツナギと呼ぶのが申し訳無い。まさしく、レーシングスーツだ。

お古と言うにはあまりにも鮮やかで、どうしていらないのか疑問さへ沸き起こる。

「カート場に置いてただけど、しばらく来ないから持って来のよ」「すみません」

「うん。カートはお金掛かるから、バイト頑張らないとね」

千夏は笑ってそう言った。

今日は仕事が休みだったらしく、殆ど化粧をせず髪を下ろした彼女は、普段見るよりずっと童顔で、僕と同じ年と言っても判らないくらいだ。

「あの、なんでこんなに綺麗なのに、もう着ないんですか」

「あ、これね。こんどスポンサーが変わって、イメージカラーが赤になったのよ。だから」

千夏はそう言いながら、クリーニング時に掛けられたビニールを、スーツから取り外した。

彼女もカートレースに出る際、僅かながらスポンサーが付くらしい。

「そう言うの、いやだった……」

彼女は僕の表情を探るように、少し上目使いで笑った。

「あ、ぜんぜん。カッコイイし。でも、あたしみたいな素人がそんなの着て、前のスポンサーに怒られませんか」

「大丈夫よ。問題ないわ」

彼女は笑って言った。

僕は制服を脱いでスーツに足を通して、それから腕を通した。

難燃素材特有の臭いが、逆に真新しさを感じさせる。

ジッパーを下からゆっくり上げていくと、心持ち胸の所が緩いのは、彼女の方がバストがあるという事だろうか。

「やっぱり、ぴったりね」

彼女はそう言って、目の前にシューズを差し出した。

「足のサイズいくつ」

「23センチです」

「ちよつと履いてみて。22.5だけど」

千夏が差し出したシューズはぴったりだった。

「これもついでだから、あげる」

僕を見上げて笑う彼女の笑顔は、同性に向ける警戒心の無いもののせいか、小動物のようにとても可愛く思えた。

千夏に会って間もない頃、僕は夢を見た。

彼女を抱いている夢だ。

僕の身体は身長が170センチ以上あって、きりりとした眉に切れ長のクッキリとした二重で、鼻筋の通ったアイドル系の顔。胸板は厚く、少な目の脂肪は腹部に薄っすらと腹筋が浮き出ている。

彼女の洋服とジーパンを脱がせ、素肌を愛撫すると千夏が微かな声を上げて悶える。

彼女の両膝を立て股間に顔を埋めて、そこで見たものや触った感触は、おそらく自分自身のもの……

他の人のものなど知らないから。

そして目が覚めた時、身体が異常に火照っている。

性自認と身体が一致しない場合、複雑な心理状態により、しばしば異常な夢を見る。

しかし今、壁に立てかけた姿に今映っているのは、小柄な女性が二人。

千夏と真夕。ただそれだけだ。

「10月にレンタルカートのワンメイクレースがあるから出てみれ

ば」

マカロニグラタンを頬張る僕に、千夏が言った。

「えっ、素人も出れるの？」

そのレースは素人の為にあるような気軽なレースだと言う。

「マユなら、もしかしたら優勝できるかもよ」

千夏がシーザーサラダをホークで突きながら言う。

「まさか」

僕は冗談を受け流すように呟いた。

しかし、レースには出てみたい。僕が惹かれるのはやはり、男と男の勝負が出来るという事。

「考えておきます」

僕は笑顔でそう言うと、アイスティーの入ったグラスに口を着けた。

【第17話】

ほんのり硫黄臭の混じったパーマ液の臭いと、さわやかなフローラルのアルカリ性シャンプーの香りが入り混じる空間で、僕は二ヶ月ぶりに髪をカットした。

「あ、雰囲気似てるから似合うかも」

タレントのショートヘアの写真が乗った雑誌を差し出すと、何時も僕を担当する美容師の持田が笑って言った。

肩まで伸びた髪を、肩に着かないくらいのミドルショートにして、両サイドに少しシャギーを入れてアレンジした。

なんか、見本と随分違ってきて、安田。沙子みたいになったが、悪くないのでまあ、いいか。と妥協する。

鏡越しに話し掛ける少しニヒルな視線も、指先で髪を撫で上げる仕草も、思わずパンチを繰り出したくなるが、持田はカットの腕前はイイので全てが相殺される。

ブローは何時も「適当でいいです」と言うが、ブラシを中までしっかりと通しながらきっちりブローしてくれる。

（どうせ、自転車を飛ばせばすぐ崩れるのに……）

僕は毎回そう思いながら、レジで精算をする。

国道を横切って農道を走りトウモロコシ畑の横を抜け、住宅街を通って何時の古書店の裏側に出た。

店の裏には車五台分ほどの駐車スペースがある。

日曜日と言う事もあり駐車場は全て車で埋まっていた。

駐車場の端には小さな物置が在って、その周りには使わない什器が幾つか放置してある。

僕はその並びの店舗の壁に、無造作に立てかけてあるものを見て思わず自転車を止めた。

自転車を降りて、壁に立てかけられた物体に近づく。
赤いパイプフレームから飛び出ている四つのタイヤ。

傷だらけの赤いカウルに擦り切れた同色のステアリングは、視界を確保する為に上部が平らな逆D型ステアリングだ。

エンジンは少し白っぽい腐食が見られるが、サイレンサーは明らかにレンタルカートの物とは異なる。

それは純粋な競技用カートだった。

どうして古本屋にカートが…… 見ているだけで心臓の鼓動が高鳴り、ワクワクする。

僕は店の表に回って店内に入ると、立ち読みの連中の間を掻き分けて早川さんに駆け寄った。

「いらっしやい」

彼は何時ものように笑顔で言った。

「あの……」

「なんか、探し物？」

一瞬言葉を呑み込む僕に、早川は笑顔で尋ねた。

「あの、裏のカートって……」

「ああ、あれ。知り合いが要らなくなつて、処分を頼まれたんだ」

「あれって、まだ走るんですか？」

「えっ、いや、エンジンは掛かるって言ってたかな」

彼は、どうして僕がそんな事を聞くのか不思議そうに応えた。

「あのカート、走るなら欲しいんです。安く譲って貰えませんか」

早川の顔は明らかに驚いていた。

「あ、あたし、今カートやってるんです。それで、競技用のカートも乗ってみたくて」

「そうなんだ。多分タダで大丈夫だと思うよ。ただ、あちこち部品の交換は必要かも」

「それくらいなら大丈夫です」

「じゃあ、今日か明日にでも持ち主に連絡取るから、待っててよ」

彼はそう言つて僕の携帯番号を控えると、「期待していいと思うか

ら」と言っていた。

店を出た僕は、裏に回ってもう一度カートの姿を見てから家に向かった。

ダダ同然で競技用カートが手に入るかもしれない。そう思うと、どんよりと低い灰色の梅雨空の下でも僕の心は何時に無く晴れやかで、自転車のペダルもいつそう軽く感じた。

普段通らない住宅地の中を抜けて家に向かっていた。

そんな事をしたのも、思いのほかペダルが軽かったせいだろう。突然赤い何かが目の前に現れた。

ボール？ 家の敷地の中から、それが飛び出て来たのが見えて、僕は急ブレーキを掛けた。

【第18話】

飛び出したボールは勢い付いて向かい側の塀に当たり、バウンドして僕の足元に転がって来た。

どこにでもある野球ボールほどの大きさの、ゴムボールだった。ふとボールが出てきた家を見ると、黒い門がしっかりと閉まっていた、格子の隙間を通り抜けたらしい事がわかった。

意外と広い敷地の奥に、車椅子の少女が見えた。

門を開けて入って行けばいいのだろうが、そうもいかなかった。格子のすぐ向こうには、愛嬌満天で舌を出したラブラドルレトリバーがリードを着けずに座っている。

車椅子の彼女は、おそらくこの犬とキャッチボールでもしていたのだろう。他に人影は見当たらない。

そして、キャッチミスをしたボールが、運悪く門の格子を抜けてしまったのだろう。

僕はボールを拾ったはいいが、どうしたものかと庭の奥を見つめた。

「待つて、あたしが取りに行くから」

彼女はそう言つて、庭の奥から車椅子の車輪を回し始めた。

「投げようか？」

「ごめんなさい、あたしが行くまで待つて下さい」

彼女の車椅子は、門まで15メートルはありそうな距離を、ゆっくり、ゆっくりとこちらへ向かう。

左手だけで車輪を回しているのだから無理も無かった。

僕は彼女の一生懸命な顔を見て、そのまま待つことにした。

レトリバーは門と彼女の間を、何度か行ったり来たりする。まるで、彼女に声援を送っているようだ。

「ありがとう、待つてくれて」

門まで辿り着いた彼女は、犬に「待つて」と言った後、門を少しだ

け開けて笑った。

その額には汗が流れていて、キラキラと光っていた。

「出来るだけ、自分から動きたいの」

彼女の右半身は、全く動かないのだと、ひと目で判った。

「いいよ、どうせ暇だったから」

僕はそう言つて、ボールを渡して微笑むと、ポケットから出したハンカチで、彼女の額の汗を拭いてあげた。

「暑いでしょ」

「うん。オネエさん、高校生？」

「うん。高校二年生。キミは？」

「六年生。でも、入院ばかりで、あんまり学校に行けないんだ」

彼女は、そんな話でも、笑顔を絶やさなかった。

「キミ一人？」

「ううん。ロコがいる」

彼女は首を横に振つて応えた。

「ロコ？」

彼女は、少し後ろで大人しく座っているレトリバーを、ぎこちなく指差した。

「ウチの六人目の家族だから六個目で、ロコ」

彼女はそう言つた後、小さく合図をすると、ロコは彼女の横まで歩み寄り、再びお座りをした。

「向こうまで、押そうか？」

「大丈夫よ。一人で平気」

屈託の無い笑顔とはこう言う笑顔の事を言うのだと、僕は初めて理解した。

「そう、じゃね」

僕は、彼女の笑顔に負けないうに笑つて手を振った。「頑張つて」とは言わなかった。

そんな事を言わなくても、彼女が頑張っているのが判ったから。「うん。バイバイ！」

彼女は小さな手を大きく振った。

10メートルくらい走ってから、僕は一度だけ振り返った。
門は再び閉じられ、少女の姿はもうそこには無かった。

【第19話】

(Dark Sky)

「髪切ったんだね」

家の前まで来た時、声を掛けて来たのは和弥だった。ウチの門柱に寄りかかるようにしてしゃがんでいた。

「あ、うん。けっこうイイだろ」

僕はシャギーの入ったサイドの髪を軽くかきあげて見せた。

和弥は今日、一年後輩の前原朋子と言う、見るからに可愛い娘とデートだったはずだ。二日前に昇降口で彼女と話しているのを見かけた。

「最近彼女とよく話してるね」僕が和弥に尋ねると

「ああ、今度の日曜日にデートの約束させられたよ」

そう言って、少し困った笑顔を見せていた。

僕は、和弥に彼女が出来て欲しいと思っている。それが彼の為になるような気がしてならないのだ。

中三の夏に起きた出来事以来、そんな風に思うようになった。

彼が何時も男らしい瞳で僕を見つめる時、いくら僕が男らしく見つめ返しても、彼には少女の瞳に映ってしまう。

それが、最近無性に腹立たしいのだ。

しかし、その反面、最近彼が他の女性と親しげな笑みを浮かべて話している姿を見かけると、胸の奥になんとも言えない様子の無い、まるで食道を押し潰したような苦しさや憂鬱がさ迷う。

それは、僕の中に微かに残る女性の自認が起す悪戯なのかも知れない。

「もう、デート終わったの？」

クイックシルバーのアロハシャツを着て、しゃがみ込んでいる和弥に僕が尋ねると、彼はスクツと立ち上がった。

「まあね」

それだけ言って近づいて来た和弥の、手に持っていたアクエリアスを奪い取って、僕はごくごくと二三口飲んだ。

「浮かない顔だけど、何かあったの？」

「いや、楽しかったよ」

彼はそう言って僕のマウンテンバイクに跨った。

「乗れよ。少し走ろうぜ」

僕は、リヤタイヤの軸を止めている、長いステップ状のボルトに足を掛けて立ち乗りすると、和弥の肩を軽く叩いた。

和弥は勢い良く走り出し、加速するスピードに合わせてギヤを一段づつ上げていく。

「海見に行かない」

彼は不意に大声で言った。

「海？」

僕は思わず訊き返した。

海までは、一番近い工業港でも4〜5キロはある。

「別にいいけど、遠くないか」

「大丈夫。俺、足腰鍛えてるから」

和弥はそう言ってスピードを上げた。

僕達の高校の前を通って国道へ抜ける。日曜日の学校は閑散として、周りに高い建物が無い為、巨大なオブジェのように聳え立つ。国道を渡って、運河に掛かる大きな橋を渡ると産業道路に入る。片側三車線の大きな通りが、1キロくらいの直線を、永遠に続くかのように感じさせる。

「替わろうか」

僕は後ろから覗き込むようにして和弥に言った。

ハイペースで飛ばした為、和弥の息がだいぶ上がっている。

「全然平気だよ」

彼は息を弾ませながら、笑って応えた。

今日の空をそのまま映し出したような灰色の砂浜。
ウミネコの群れに混ざって時折飛来するカラスが、誰かが駐車場に捨てていったコンビニ弁当の残飯をあさっている。

間近で見るカラスは、意外と大きい。

僕はわざと足音を立てて、小走りにカラスに近寄るが、ソイツは全く動じる様子が無い。

防波堤によじ登って二人並んで腰掛けると、途中のコンビニで買ったコーラを飲む。

走り通して喉が渴いていたのだろう。和弥は殆どイッキに揉み干していた。

少し湿った潮風が二人の間を吹き抜けていく。

「海なんて久しぶりだよ」

「俺も」

和弥はそう言って防波堤の上に寝転がる。

「雨降るのかな」

僕の腰元に頭を置いた和弥が、空を眺めて呟いた。

「今日は降らないような事言ってた？」

僕は、今朝のテレビで見た天気予報を思い出して言うと、和弥を見下ろして

「彼女と来れば良かったじゃん」

彼は額にシワを寄せて、少し上目遣いで僕に視線を向けると「うん……」と煮え切らないリアクションで、再び真上に広がるダークグレーの低い空を見上げた。

「なんだよ」

僕がそう言って、和弥の頭を手の甲で軽く叩くと、彼は「いてっ」と小さく呟いて、ポケットから取り出したラッキーストライクを口に咥えた。

【第20話】

波の音とウミネコの声以外には何も聞こえない。

何処までも広がるその空間は、二人を遠い世界へ連れて行く。

僕も和弥の方に頭を向けて寝転がった。

目の前に落ちて来そうなほど低くて厚い雲が、どんよりと広がっている。

静かに目を閉じると、耳鳴りのような風の音が聞こえた。

潮の香りと波の音は、何故か全ての現実から気持ちを遠ざけてくれる。

和弥の吸うタバコの煙が、やたらと煙くて目を開けた。

上空は相変わらず重い雲に覆われていて、手を伸ばせばその暗雲の中に届きそうだ。

砂浜と反対側に顔を向けると、そこにはあまりにも現実的なパルプ工場のプラントが建ち並び、太い煙突から真っ白い水蒸気の煙が立ち昇っている。

僕はその煙が何処まで行ったら消えるのか、じつと目を凝らして眺めていたが、低い空が邪魔をして、何処迄が煙で何処からが雲なのか判らない。

それは、まるで僕のように。

何処までが女性で何処からが男性なのか、最近判らなくなる。

この心は本当に全て男なのだろうか…… 本当は男と思い込んでいるだけの普通の女の子なのではないだろうか……

あたりは次第に暗くなって、街路灯が光を灯しだす。

潮風を受けた顔や腕に微量の塩が結晶化していた。

「そろそろ、帰ろうか」

僕は起き上がって和弥に声を掛ける。

「俺……」

そう言って和弥は言葉を呑み込む。

「ん？」

僕は自然に訊き返した。

「俺、今日彼女とセックスしたよ」

一瞬彼の言葉の意味が判らなかった。一秒、いや二秒くらい間を置いて、どう言う事が把握した僕は「よかったな」と言って微笑んだ。

彼は、困惑したような複雑な笑顔を僕に返すと、立ち上がって防波堤から飛び降りた。

そして僕達は、街路灯だけが煌々と立ち並ぶ産業道路を家路に向かって走った。

和弥は何故わざわざ彼女とセックスした事を僕に告げたのだろう。僕が誰かとそう言うことをしたとしても、和弥には、いやおそろく誰にも言わないだろう。

僕に対しての踏ん切りを示したのだろうか。

僕は和弥の肩に手を置いて、走る自転車の風を受けながら考えていた。

「なあ、どうかで何か食べていかない」

ずっと黙ってペダルを踏んでいた和弥が不意に声を掛けて来た。

僕は一瞬ビクリとしたが、彼の頭に顔を寄せて「うん、いいよ」

さっきまでいた海岸がやたらと遠くに感じた。

笛付きロケット花火を打ち上げる音が、遠い暗闇から聞こえていた。

その夜僕はなかなか寝つけずに、衛星放送のスタートレックが流れるテレビを点けっぱなしにしていた。

今になって、和弥の言葉が繰返し頭の中を過ぎり、胸の奥がキリキリと苦しくなる。

中学三年の夏、あのまま成り行きに任せていれば、間違いなく彼の初めては僕の身体で体験しただろう。

何故、今更そんな事を考えてしまうのか、自分でも判らない。

僕の中の彼女が、僕を侵食して女の嫉妬心を悪戯に掻き立てているようだ。

それとも、僕が永遠に経験できない男としての喜びを、彼が経験した事に対し、男として嫉妬しているのだろうか。ならば、その方がよっぽどマシと言うものだ。

防波堤の上で和弥が見せた複雑な笑顔が、目を閉じると瞼の裏側に何度も浮かんで来て、カーテンの外が薄っすらと白み架かる頃、僕はようやく眠りにつく事が出来た。

【第21話】

(Break Out)

火曜日に古書店の早川さんから連絡があつた。

カートは現状のまま、タダでくれるそうだ。

僕は早速、カート場へ行き、千夏さんと佐々木さんに話した。佐々木さんが軽トラでカートを家まで運んでくれて、必要な部品を手配してくれた。

純粋な競技用カートの為、エンジンはヤマハ製の100CCを積んでいるらしい。小さいシートもあると聞いて、入れ替える事にした。新しいスリックタイヤも含めて八万円くらいだそうだ。

その他にも、新しいカウルやステアリング、コースにあったスプロケット(駆動ギヤ)。現状でも走るそうだが、きちんとメンテナンスをして走らせた方が良いとの事だ。

これで、援助デートで稼いだお金は殆どなくなってしまった。

濡れたようにしつとりと輝く紺色のボンネットに映りこむ街路灯の光が、ゆっくりと流れていくのを、僕はフロントウィンドウ越しに眺めていた。

「本当に大丈夫かい？」

長岡が優しく微笑む。

今日、僕は長岡の携帯に自分から電話をした。

彼とセックスをする為に。

彼はお金を払うと言ったが、僕は要らないと言った。

これは援交ではない。かと言って長岡に惚れたわけでもない。

レンガの壁に囲まれた入り口からシティーホテルの駐車場に入る。潇洒なロビーとフロントは家族連れにも対応した清楚な造りになっていた。

僕が今日何故、彼、いや彼女と寝る気になったのか。

ただ単に、和弥の初体験に触発されただけなのかも知れない。

しかし、東京ならいざ知らず、地方都市で再びM t Fの人間と出会えるチャンスは無いだろう。

一度は経験しておくのもいい。処女で死ぬのは「彼女」の体が可愛そうだ。

そうやって僕は無理やりに言い訳を考える。

かといって和弥と寝る訳にもいかないし……

色々考えた挙句、やはり長岡が一番の適任者のような気がしたのだ。

僕は車の中でもずっと考えていた。

これから行う行為の際、僕は男に徹した方がイイのか、それともお互い身体の性を演じるのがいいのか……　ここまで来て頭がこんがらがって、イライラしていた。

シャワーを浴びている間、この時間が何時までも続けばいい。この先の時間へ進まなければいいと、心の戸惑いが僕の決意を揺るがす。

しかし時間は僕の思いとは無関係に、いつも通りに過ぎてゆく。

彼の指使いはともしなやかで、真夏の炎天下の元に放置したアイスクリームのように身体がとろけていく。

真っ暗な深海をただゆっくりと漂うような、上も下も無く浮遊しているような錯覚。それは、男とか女とか、そう言った外見の性を越えたもののように思えた。

やけに熱いものが体内へと押し込まれる。

少量の出血はあったが、さほど痛みは無かった。

下腹部の奥に、ジンとした生温い快感が微かに響いて、閉じた瞼の奥には赤と黒の背景がチカチカと交互に点滅した。

よく雑誌に載っているような、裂けるような激しい痛みが無くて

ホツとしたのは事実だ。

帰りの車中から空を見上げると、久しぶりの星空が僕のバージン・ブレイクを祝っているかのように瞬いていた。

自転車を置いてきたファミレスで食事をした後、長岡に手を振って別れる。

おそらく、今度こそ本当に永遠の別れになるのだろう。

僕はチョットだけ、僕の処女を呉れてやった長岡を愛しく思っ
て、
暇の奥が熱くなるのを感じた。

これも、自分の中に潜む女性自認の悪戯なのだろうか。

自転車に跨った時、何時もとは違った違和感が股間に纏わり着いている事に気付く。

まるで、まだ何かが入っているような錯覚。

構わず、何時ものようにトップギヤまで入れる勢いでペダルを踏んだ。

田んぼに面した県道は街灯が少ないが、歩道の工事をやっている為に赤い点滅等が連なっていて、何時もより走りやすかった。

夕飯時をとくに終えた住宅街は閑散と静まり返って、時折何処かの茶の間から、スポーツニュース番組の音声が届いてくる。

「何処行ってたんだ」

家の前まで来た時、小さな街灯に照らされている誰かが声を掛けて来た。

【第22話】

僕は聞き覚えのある、その声に目を凝らした。

和弥だった。

「別にいいだろ。何処だつて」

僕は何時に無く素っ気無い態度で言った。何故か今は和弥と話をしたくない。

「なんだよ」

和弥が言った言葉に、僕は少し苛立った口調で「何でもないよ。何か用？」

「マユのお母さんから、携帯電話が繋がらないからって伝言頼まれただ」

今日は、夕方からずっと携帯電話の電源を切っていた。

「それで、伝言つて？」

僕は早く和弥と離れたかった。今だけは……

「今日の夕方から急な出張で、東京に行くつて。明日、また電話するつて」

「そう、ありがとう。じゃあ」

僕は玄関の横にマウンテンバイクを止めて、そそくさと彼に挨拶をして家に入ろうとした。

「携帯切つてた事なんて、今まで無かったじゃん。何かあったのか」
彼は玄関先で僕の手を掴んだ。

「うるさいな、何でもないよ」

僕は、和弥の手を振り解いて玄関先にカバンを放り投げると、ガレージの隅に置いてあったカートを、家の前の公道に引っ張り出して勢い良く押した。

まだ何のメンテナンスもしていない、古書店から貰ってきたままのカート。

赤いフロントカウルの左角が割れて、スウェードのハンドルは擦

り切れている。

しかし、佐々木が試運転で調子を見たときには、エンジンの調子は良かった。

その時入れたガソリンがまだ入っているはずだ。

5〜6歩でエンジンに火が入った。

遠心クラッチの無い競技用カートは、後輪とエンジンが直結されている為、押し掛けでエンジンをスタートさせる。

見様見真似の押しがけにしては上出来だった。

「おい、こんな所でどうするつもりだよ。そんなもんで公道走ったら危ないだろ」

和弥が僕の肩に手を掛けて制止させようとするが、僕はその手を大きく振り払ってバケットシートに飛び乗った。

アイドリングで走るカートのアクセルバーに足を乗せる。

「おい、よせ。危ないだろ」

和弥が息を切らせながら走って、カートを追いかけて僕の横に並ぶ。

さすがにサッカーで鍛えた足は凄かったが、僕がアクセルを踏み込まなかったのも確かだった。

「止まれ、マユ！」

視界の隅から聞こえる和弥の息がかなりあがっている。

そして、僕は無言のままアクセルバーを一杯に踏み込んだ。

100CCのエンジンが唸りを上げると、人間の足では全力で走っても到底追いつけない速度まで一気に加速した。

それは、レンタルカートとは、まったく時限の違うものだった。

初めて体験する加速力に一瞬怯むが、僕は構わずアクセルバーを踏み続けた。

ノーヘルの髪の毛が一気に後へ引つ張られる。

街路灯の明かりだけが照らす薄暗い景色が、勢い良く自分に向かって飛び込んで来る。

暗闇の錯覚で、昼間に比べるとスピード感はない。

小さな虫か何かが右肩に勢いよくぶつかった。

「痛っ……」

遠ざかる後方で、和弥が僕の名前を叫んでいたが、競技用のマフラーから出る騒音と切り裂かれる風の音で、殆ど掻き消されていた。

住宅地から県道へ交差する道路を右折した時、マンホールのバンブで車体の底が干渉し、ズルズルのタイヤが思った以上にスライドした為、危なく道路脇の田んぼへ落ちそうになった。

立て直して、再びアクセルを全開にした。シートが遠くてアクセルが踏みにくい。

何もかも忘れたい…… 考えたくない。

無性に苛立つ自分の心が、この風圧で全て吹き飛ばされればいい。梅雨の合間の晴れ渡る夜空に、甲高いエンジン音が鳴り響いて空気を震わせ、その振動で星が零れ落ちそうだった。

高速の高架橋を潜った辺りで、急激にエンジンの回転が下がり、ストールした。

ガス欠だ。

止まる寸前に惰性で路肩に寄った僕は、カートのシートに座ったまま空を仰いだ。

星に手が届きそうで、思わずを夜空に向かって右手を差し出した。濃紺の空に散りばめられた無数のコンペイトウと銀色の三日月は、ただ静かに僕を見下ろしていた。

【第23話】

「明日、カート場に持って置いて置くから。佐々木君も、整備してくれそんな事言ってたし」

僕は、千夏に電話してレガシーで迎えに来てもらい、二人掛りで荷台にカートを乗せると、そのまま彼女の部屋に押し掛けてしまっていた。

「すみません、呼び出した拳句にお邪魔しちゃって」

「ううん。気にしないでいいよ。でも、カートで公道を走るなんて馬鹿な真似は、もうやっちゃ駄目だからね」

彼女は弟を諭す優しい姉のような口調で言った。

「判ってます。ちよっとカッとなって、つい……」

「何かあったんでしょ。家に帰りたくないなんて」

「はあ…… まあ」

俯く僕に、千夏はコーヒーを差し出した。

彼女の部屋は相変わらず甘いミントの香りが漂っていて、差し出されたドリップコーヒーの香ばしい 香がそれを掻き消したが、どちらも心地のいい匂いに変りはない。

黒いショートパンツにピンクのキャミソールを着た彼女の肩から、ブルーの下着の肩紐が見えている。

「あの…… 千夏さんは彼氏とか、いないんですか」

僕は熱いコーヒーを啜りながら彼女に訊いた。

「いたけど、二ヶ月前に別れたわ。あたしが、カートでレースに出る事が気に入らなかつたみたい。今は募集中」

彼女は鼻の頭に小さなシワを寄せて笑った。

「あなたは？」

彼女の問に、僕は大きく溜息をつく。

「さては、彼氏と喧嘩でもした？」

彼女は笑顔のまま、バージニアスリムに火を着けた。

「あの・・・性同一性障害って、知ってますか？」

僕が彼女にそう尋ねると、意表をついた質問に、彼女は怪訝な顔で僕を見つめた。

「聞いた事はあるけど」

彼女はそう言っ、パチパチと数回瞬きをする。

（あたし…… いや、俺、本当は男なんです）そう言ったら、どうなるだろう。彼女はどんな反応を示すのだろう。

僕は喉まで出かかった言葉を呑み込んだ。

「いや、知り合いにそう言う子がいて。悩んでるみたいで……」

僕にはやっぱり言い出す勇気は無かった。

「そう。大変ね。身体の性と心の性が逆ってやつよね」

彼女は、少しだけ真剣な顔をする瞳を曇らせた。

やっぱり、言えない。だいたい言ったからってどうなるって言うんだ。僕の身体が女であることに替わりは無い。

彼女が僕を男として受け入れる可能性など万に一つもないのだ。性同一性障害と同性愛者やニューハーフ等をよく混同する場合があるようだが、あくまでも自認する性と相反する性に引かれる訳であって、認識する性別だけで見れば極当り前の事なのだ。

恋愛感情などに左右される事無く、あくまでもG I Dは独立した個別の現象なのだ。

「あの、あたしやっぱり帰ります」

僕は不意に玄関の前に放り投げて置きっぱなしにして来た、学校のカバンを思い出した。中には貴重品も入っている。

「そう。じゃ、送って行くわ」

彼女の赤いレガシーに乗せられて家に着いたのは、深夜12時を過ぎていた。

千夏にお礼を言っ、手を振ると、彼女はボツシュホーンを軽く二回鳴らして走り去って行った。

玄関の前を見ると、確かに放り投げたはずのカバンが見当たらない。

誰かに持っていていかれてしまったのだろうか。化粧道具や財布も入っている。

ふとスカートのポケットから携帯を取り出して見ると、着信メールが一件入っていた。受信メールは和弥からのものだった。

『カバンは、盗まれると大変だから預かる』

短いメッセージだが、あの状況下でしっかりカバンを片付けるあたりは、和弥らしい気の利き様だと思って、途端に僕の顔に笑みが零れた。

玄関のカギもカバンの中だったが、近くの植木蜂の下に予備が隠してあるはずだ。

五つ置いてある植木蜂を全部除けてみようやくカギを見つけた。僕は母親の携帯に、和弥から言伝を聞いた事をメールしてお風呂に入った。

薄いグレーの下着を脱ぐと、内側に少しだけ血痕が滲んでいた。

【第24話】

(H a p p e n i n g)

期末考査も間近と言うのに、僕はガソリンスタンドでアルバイトを始めた。

ガソリンとオイルの匂いは何故か落ち着く。それはきっと、エンジンが剥き出しのカートもこんな匂いがするからだ。

裾の広がったキュロットパンツが少々不満ではあるが、ハンバーガーシヨップよりはマシかもしれない。

ここは、給油以外のサービスをセルフにしている為、窓拭きや灰皿交換がない。ただガソリンを入れることに集中すればいいのだ。

「刑部さん、洗車手伝って」

しかし、有料のサービスは他にも色々あるので、当然洗車作業などもこなすが、屋外で働くのも意外と心地いい。

僕は「ハイ」と笑顔で応えて、洗車作業に加わる。

僕は週に5日、夕方から夜の9時までバイトに入る。

土日は日中になる事もあるが、出来るだけ入りたいと店長には伝えてあった。

土曜日の夕方、この日のシフトがもうすぐ終わる頃、一台のバイクがスタンドに入ってきた。

真っ赤なカウルに覆われた威つい猫のような顔をしている。

バイクのメカニカルな雰囲気は、走る為の意欲を剥き出しにしている、カートに似ている。

僕は、「いらっしやいませ」と大きく叫んでバイクを迎い入れた。
「レギュラー満タン」

彼の声に大きく笑顔で復唱し、給油口にノズルを差し込んで給油を開始する。

「マユ」

バイクの彼は、派手な色合いのヘルメットの、スモークシールド

を開けて微笑んだ。

僕は誰なのか判らず、フルフェイスから覗く瞳の笑顔を見つめた。明らかに見覚えのあるその瞳。

「ここでバイトしてるんだ」

秀雄だった。

「うん」

秀雄に訊かれるまま僕は肯いた。

「あ、もうすぐあがりなんだけど、これから用事？」
精算をしながら僕は秀雄に言った。

どうして秀雄を引き止めたのか、自分でもよく判らない。

ただ、お互いに携帯番号も知らないまま別れるのがとても惜しいように感じたのは確かだ。

「ビックリしたよ。バイクっていうから、原付だと思ってた」

「中古だけどね」

「それでも凄いや。ピカピカじゃん」

僕達は近くのコンビニでアイスを買い、その駐車場の隅に腰掛け
ていた。

「学校には内緒だけどね」

秀雄はガリガリくんを齧りながら笑って言った。

空は真夏のような陽射しが照りつけて、腰掛けた駐車場の縁せきが熱かった。

「なあ、明日、ツーリング行かない」

少しの沈黙が流れた後、彼が言った。

「ツーリング？」

「ああ、二ケツで何処か気晴らしに、走ろうよ」

「いいよ」

何故か僕は二つ返事でOKした。

何も考えなかった。

心が男とか、身体が女とか、そんな事は何も考えずに返事をした。そうなんだ。いままでだって、ずっとそうして来た。

これから、このまま行こう。

二人は携帯の番号を交換して別れた。そして僕は、バイト休めるかな…… と考えた。

幾つかの小さな山を抜けるワインディングコースを小気味良く走る。

バイクのタンデムシートは目線が高く、座っているのに、自転車で立ち乗りしているようだ。

カーブが迫ると、秀雄は軽くブレーキを掛けて、シフトダウンする。

二つの手と二本の足が、エギゾーストの奏でる音のリズムに乗って、バラバラに、しかも正確にそれぞれの仕事をこなす。

車体をバンクさせてコーナリングするこの乗り物は、遠心力を腰で感じる。

松島マリントワーの横を通って国道へ出ると、間もなくお土産屋の軒が連なる松島海岸へ出る。

道路を挟んだ反対側の観光桟橋付近では、バスガイドが小さな三角旗を靡かせて観光客を案内している姿や、ひな壇に列をなして記念写真を撮っている集団が見えた。

交番前のS字カーブを抜けると右手にはJRの駅。左手には寂びれた水族館がある。ここは幼稚園の遠足で来た事がある。

自由時間で保護者と過ごす時間にも拘らず、うめ組の先生の後を何時までもついて歩いたっけ。

あんなに大きく見えた水族館の敷地が、やたらと小さく見える。稼動していないモノレールが、朽ち果てた古時計のように時間を止めていた。

象牙色の岩肌に力強い松ノ木が茂る孤島の合間を縫うように、遊覧船が水面を掻き分けて進んでいく。

僕達は海浜公園の海岸に腰を下ろして、青い空の映る水面を眺めていた。

「晴れてよかったね」

秀雄が自販機で買ってきたアクエリアスを差し出して微笑んだ。目の前を、ミニチュアダックスを連れた女性が通り過ぎていく。最近僕がつけている、ムスク系の香に反応したのか、犬の鼻がしきりにこちらを向いていた。

「気持ちいいね」

僕は、受け取ったアクエリアスを飲んで彼に言った。

「マユを後に乗せると走り易いな」

「そう」

「バイクに乗った事あるの？」

彼の問いに僕はNOと応えた。

おそらくカートに乗っている為、カーブの進入時にどういう動作がバイクにとって最適なのかが、早い段階で判ったせいだと思う。

「それに、女の子は軽いから楽だよ」

秀雄はマイルドセブンに火を着けながら、目を細めて言った。

教習所で教官を乗せて走る時は、後の重量が負担になって操作し難いのだそうだ。それだけ二人乗りは難しい。と言う事を教えられているらしい。

教官の体重が60キロ以上はあるとして、僕は何を隠そう43キロ。

それだけ違えば随分感じは違うのだろうと思った。

僕は、秀雄がくゆらせたタバコの煙を目で追いながら微笑んだ。

【第25話】

松林の遊歩道をぶらぶらと歩いた。

松の枝と葉に日差しが遮られ、所々薄暗いその小道は、芭蕉も通ったと言う。

赤い橋を渡って離れ小島へ渡り、断崖の先まで行くと神社がある。経年劣化によって真っ黒に焼けた木の壁や柱は、その古さを物語っている。

木を模造したコンクリートの柵に身を乗り出して下の断崖を見下ろす。

波に浸食された岩肌に打ち寄せる更なる波は、これから先もこの島を浸食し続けるのだろう。

それは、まるで女性ホルモンに侵食を受け続ける僕のようなだ。

日曜日と言う事もあって、絶え間なく観光客やデート中の男女が周辺を行き交う。

僕達の隣にいたカップルが神社を後にした時、一瞬その空間に人影が途絶えた。

その一瞬の隙を突いて、秀雄は僕に素早くキスをした。かわす暇など無かった。いや、本当は顔を背けてかわす事が出来たのではないのか…… 生暖かい彼の唇の感触を僕の唇が受け止める。

長岡とも交わさなかった唇同士のキス。

僕は、あの日処女を喪失して以来、心のバランスがおかしい。まるで、今まで微妙な釣り合いで保たれていた心が、その僅かな欠損によってバランスを保てなくなってしまったかのように。

「怒った……？」

黙って俯く僕に、秀雄が言った。

「ねえ、もしも、あたしが本当は男だったら…… 秀雄、どうする」僕は俯いたまま呟いた。

その時、再び観光客の群れが神社の周りを囲むように流れ込んできて、賑やかになる。

「えっ……」

秀雄は困惑した笑みを浮かべて、俯いた僕の顔を覗き込む。

「だって、マユはどう見たって女じゃん」

僕がおかしな冗談で彼をからかっていると思ったようだ。

「心の中が、男だとしたら？」

僕は秀雄の顔を見つめた

「そんなの…… 冗談だろ」

彼の笑顔が、急激に曇る。彼も、性同一性障害の事は知っているようだった。

僕は彼の「冗談」と言う言葉に無言で首を横に振った。

「もしかして、俺と付き合えない訳って……」

さすがに県下一の進学校へ通うだけの事があって、察がいい。

僕は変な所で彼に感心した。

「そう言う事だから」

僕はそう言っただけで寄り掛かっていた柵から身を離し、一人で観光客の群れの中に消えようとした。

「待つて」

秀雄は僕の手を掴んで言った。

「キミは本当に100%、心の中が男なのか？」

秀雄の言葉に、近くにいた年配の夫婦がこちらを振り返った。

「俺がさっき触れたマユの唇の感触は、どう考えても男性とは思えない。その顔も…… 身体だって…… そんな割り切りはできないよ。もし、少しでも女性なら……」

僕は、周囲を気にせず喋る彼の言葉が半分しか耳に入らなかった。この小島にいる十数人全てが、僕らの話に聞き耳を立てているような気がしたからだ。

僕は、彼の手を引いて小島を出ると、赤い橋を渡って来た道を速足で戻った。

「男の心なのに、女の服装に抵抗はないのか？女の言葉も普通に使ってるじゃん」

足早に歩く僕の後から秀雄が追いかけて質問を投げ掛ける。

僕は黙って歩きながら、何処から説明すればよいのだと、頭の中を整理していた。

海浜公園のかなり外れまで来て、ベンチに腰掛けた。駐車場から遠いこの辺りまでは、ほとんど誰も来はしない。

秀雄も僕の隣に黙って腰を下ろすと、タバコに火を着けた。

僕は、物心付いて以来ずっと男として性自認している事。

小学校まで男言葉を使っていたが、中学に入って以来人前では女言葉を使っている事。

今でも、思考する時は男の言葉で思考する事。そして、唯一僕を理解してくれる和弥の存在が大きい事。

それらを順番に話した。

秀雄は僕が全てを話し終えるまで、ずっと黙ったまま静かにタバコの煙をくゆらせて聞いていた。

時々彼が吐き出すタバコの白い煙が、風に乗ってさ迷いながら消えていく。

西に傾いた太陽が、淡い山吹色に輝きを変えて、水面に反射光を光らせている。

「帰ろう。送るよ」

僕の話が全て終わった時、彼は、力無く呟いて立ち上がった。

僕は、秀雄と一緒に彼のバイクの所まで来たが、ホルダーから外したヘルメットを受け取ると

「電車で帰るから」

そう言って、駐車場から駅へ続く歩道を一人で歩き出した。

黙って見つめる秀雄の視線が、幾つもの小さな針で突いたように僕の背中に突き刺さって、激しい痛みに襲われた。

ローカル線は東京と違い、数分毎に電車が来ると言う事は無い。僕は、ヘルメットを抱えてホームのベンチに座り、十分以上海岸とは反対を向いて、ただの岩山の壁を見つめていた。

風になりたい。サーキットを思い切り走りたい。

あの吹き付ける風と、身体に架かるGと、人間離れした低い視界が全てを掻き消してくれるから。

周囲には、水筒やリュックを背負ってピクニックに来た家族連れが何組かいて、遊び疲れて眠った子供を背負った父親が、僕の隣に腰掛けていた。

重そうな子供を背負った父親も、十分に疲れた顔をしているが、その優しい笑みはとても幸せそうだ。

ホームに入ってきた電車に乗り込んで外に視線を向けた時、誰かが階段を駆け上がったのが見えた。

ただ漠然と外の景色に目を向けていた僕は、自分の目を疑った。階段を上がってきたのは秀雄だったのだ。

もうとつくに帰路へついていると思っていたので、ビックリしてドアから身を乗り出そうとしたが、その瞬間、無常にもドアは閉まってしまった。

「俺、やっぱり諦めないよ。どんな形でも、マユの近くにいたいから。また連絡するから。スタンドにもガソリン入れに行くから……」
容赦なく走り出す電車の中の僕に向かって、秀雄は息を弾ませながら叫んだ。

新幹線と違って、その声は全て僕に届いていた。

そして、他の乗客のみんなにも……

【第26話】

セルリアンブルーのレーシングスーツに手足を通して、ブルーのドライビングシューズを履く。

靴紐を硬く締め、胸のジッパーを首まできっちり上げる。

戦闘準備完了。

薄っすらと霞むような雲を張り巡らせたブルーグレーの空は、直射日光こそ遮ってくれるが、ヘルメットを被ると、七月の蒸した空気にそれだけで汗が滲みそうになる。

スモークシールドを閉めて、四つ付いているエアインテークは全て全開にする。

グローブを両手に嵌めて、マジックテープをしつかりと固定する。真新しいスウェード貼りの赤いステアリングに左手を掛け、右手をグラスファイバー製のシートに添えたら一気にカートを押し切る。後輪に直結したクランクとピストンの空回りする音が消え、同時にサイレンサーから確かな排気音が聞こえる。

シートに飛び乗ったら、間髪入れずにアクセルバーを踏み込むと、路面を蹴飛ばすリヤタイヤが背中を突き飛ばすように加速する。

1、2コーナーとS字を抜けてヘアピン手前、買い換えたブレーキの効き具合もいい。

バックストレートの加速が恐ろしく早い。

異常なスピードで迫るカーブにアクセルOFFだけでは足りず、軽くブレーキを踏む。

100CCの競技用カートはバックストレートエンドの直角コーナー手前でブレーキングが必要になった。

このコースはレンタルカート用に設計されている為、純粋な競技用カートには聊か狭いのだそうだ。ただ、本来バックストレートはあと十メートルほどあり、パイロンで遮られている。

大会などで使用する際にコースレイアウトを変えるのだそうだ。

自費で購入したスリックタイヤのグリップもシャシーの出来もいいせいか、コーナリング速度も速い為、身体にかかる負担が大きくなったようだ。

5周して、1周クールダウンした後、ピットへ入る。持ち込みの場合、コースをレンタルする事になり、二十五分間で三千円になる。

「どう。調子」

佐々木がガレージから声を掛けて来た。

ようやく揃った部品を彼が組んでくれたので、今日は早速ナラシをかねて調子を見に来たのだ。

当り前の事だが、以前公道で走らせた時とは比べ物にならないくらい調子はよく、エンジンも良く吹ける。

ペダルの位置やシートの大きさも自分に合わせているので、段違いに操作し易い。

「凄いいいです。佐々木さんのお陰だね」

僕は佐々木に対するお礼を込めて、少しキュートな笑顔を演じる。

「何かあつたら言つてよ。仕事の合間にだったら見てあげるから」

彼は、少しテレ笑いを浮かべて言った。

やっぱりこの身体は少し徳だな。こんな時でも、ついそう思ってしまう。

僕は他の人の邪魔にならないように、自分のカートをピットの隅に移動させて一休みしようとロビーのドアを開けた。

「そろそろ、学校は期末テストじゃないの」

ロビーに戻ってヘルメットを脱いだ僕に向かって、千夏が声を掛けて来た。

「明後日から。だから、今日と明日は午前授業なの」

僕は、午前授業をいい事に、午後一でここへ来てカートに乗っていた。

「ねえ、来週海に行くんだけど、一緒に行かない。テストも終わっ

てるでしょ」

海…… 勿論泳ぐ為に行くのだろう。僕は中学校の体育の授業以来、水着を着ていない。

身体の線がはっきり見える水着姿は、やはり抵抗があった。

しかし、僕は千夏の水着姿が見たいと言っ不順な動機でOKしてしまったのだ。

期末考查が終わった日、6日ぶりにスタンドのバイトに入った。期末考查中は休ませて貰っていたのだ。勿論、バイトを休んだからと言って、命一杯勉強に励む訳ではないのだが。

「リコさんはもう上がりですか？」

休憩に入った時、同僚の平井理子が帰り支度の為、着替えをしていた。

ボタンを閉めるピンクのブラウスの胸元から、淡い水色の下着がチラリと覗いていた。

「うん。これから出かけるんだ」

彼女は僕よりも二つ年上で、フリーでこのスタンドで働いている為、早番の時にはこうして僕よりも早く帰って行く。

明るくて、色白の彼女は、スラリとした長い足で何時もスタンド内を駆け回っている。

仕事中、後で束ねている黒髪は、解くと背中の中辺りまでく。身長は160センチ以上あり、張り出た胸とくびれた腰は完全なモデル体型だ。

ただ彼女はアトピー性皮膚炎らしく、体調によってその症状にムラがあるようで、全然判らないかと思えば、顔全体が水ぶくれのように腫れ上がるほどに症状を露わにする事がある。

そんな時でも、彼女は大きなマスクをしてお客の前に立つ。

「じゃあ、お先に」

彼女はバックを肩に掛けて休憩室のドアを開けながら笑った。

「お疲れ様」と言っ
て僕も笑顔
を返す。

僕が休憩を終えて給油フロアに戻ると、その隅で誰かが口論して
いる様子が映った。

【第27話】

もめている2人のうち女性の方は理子だった。

男の方は彼氏だろうか、車から降りた男性と口論になっているようだ。

幸い他の客が途切れているが、まずい状況だ。店先で誰かと揉める様子をもし店長にでも見つかったら大変な事になる。

「あれ、平井の彼氏だよ」

近くにいた坂本が言った。彼もアルバイトだが高校の時から五年もここで働いているので社員並みの仕事をこなす。

「まずいなあ、あんな男の何処がいいのかね」

彼は顔を顰めて理子と男の様子を伺っている。

理子の彼氏は濁ったような色の金髪で、ガッチリした体型の日に焼けた肌を露わに黒いタンクトップを着ていた。どちらかと言うと清楚なりコには不釣り合いな男だなと、僕は思った。

ふと横に止まっているアメ車の大きなバンを見ると、中には派手な化粧をした白いキャミソールの女性がタバコを吸っている。

目の周りが真っ黒で、睫毛と黒目の境目がここからではよくわからない。

トラブルの原因はアレらしい。

「止めなくていいんですか」

僕は坂本に言った。

「止めるって言ってもなあ……」

坂本は少し困った顔をした。

確かに、背丈はあるが何処か弱々しい体つきの坂本が、あの男を相手には出来ないだろう。

「お前、アトピーだからめんどくせえんだよ」

濁った金髪の男が大きな声でそう言い放った時、車内の女が「アハハ」と口を大きく開けて笑うのが見え、理子は悲痛な顔で立ち尽

くしていた。

僕はその瞬間、男に走りよって、そのタンクトップに掴みかかった。

何故だか男の行為に無性に腹が立った。

いや、本当はあの白いキャミソールの女の方にこそ腹を立てたのかもしれない。

生まれながらのデイスアドバンテージを、誰が好き好んで背負うだろうか。

それらは本人自身が、日常のどんな時でも一番苦痛に感じているはずだ。

いきなり僕が掴みかかった男は、熊のように後ろに大きくよろめいた。僕はそのまま小さな拳で男の左頬を殴る。

低く積んであった古タイヤに足を取られ男は後ろに倒れた。

僕も一緒に倒れこんで、男に覆い被さるように殴り掛かるが、強い力で後に突き飛ばされた。

簡単に飛ばされる僕の軽い体と男の力強さに一瞬驚く。

「なんだ、お前！」

男が立ち上がりながら言った。

「やめて！」

理子は尻餅をついた僕に掛けより、男との間に入って制した。

「その女がいきなり飛び掛って来たんだろうが」

男は低い声ですごんで見せた。

理子は詰め寄る男から僕を守ろうと、僕に覆い被さるように抱える。

おそらく彼がキレた時の怖さを知っているのかもしれない。

「どけ、おら。俺は男女差別しない主義だから」

理子を僕から引き剥がすようにして、僕の襟首を男が掴んで引き上げた時、その男の顔は、もはや人間ではなかった。

日に焼けた黒い顔は、野獣のようにシワを寄せて、開いた瞳孔がギラついていた。

「この女、どういっつもりだ」

男は必要以上に僕に顔を近づけて言った。
異様なタバコの臭いがした。

その時、誰かが横から男に飛び掛って、いきなり手を離された僕は再び尻餅を着く。

僕は最初、坂本が見かねて助けてくれたのかと思ったが、その飛び掛った後ろ姿はスタンドの制服では無い。

「秀雄！」

それは、紛れも無く秀雄だった。

男に馬乗りになって何度も左右の拳を繰り出す。

「てめえ、女相手に何やってんだ」

秀雄の怒鳴り声が聞こえる。

秀雄のあまりの勢いに、僕は立ち上がって彼を止めた。

「もう、いいよ。もう大丈夫だから」

まるで、吠え盛る犬を宥めるように、僕は秀雄に声を掛ける。

僕に強く肩を引っ張られて、ようやく秀雄の手が止まる。彼の肩は筋肉の固まりのように硬かった。

「ごめんね、マユ」

理子が僕に言った。

「こんな男、やめた方がいいよ」

僕は彼女にそう言っ、秀雄の腕を掴んでロビーまで引っ張って言った。ちらりと坂本を見ると、青い顔をしてただ呆然と立ち尽くしていた。

その時、丁度一般のお客の車が入ってきたのが見えたので、僕は小さく合図して「お客が来たよ」と彼に知らせた。

「何があっただんだ」

秀雄はロビーの椅子に腰掛けると僕に問い掛けた。彼の息は、まだ少しだけ荒く胸を動かしている。

「知らないで、飛び掛ったの？」

僕は驚いて彼に訊き返す。

「いやあ、マユのピンチだと思って」

彼は、乱れた髪をかきあげて笑った。

「スタンドに寄ろうか迷いながらこの道を通ったら、何か揉めてるみたいだったから」

彼はそう言つて、僕の差し出した紙コップのコーヒーを啜った。

外を見ると、彼のバイクは道路脇に停めたままで、秀雄はあそこから走つて来て、そのままあの男に飛び掛つたらしい。

ロビーの窓からその後の様子を見てみると、理子に助け起こされた金髪の男は、彼女の手を振り払つてアメ車のバンに乗り込むと、大きな音を立ててスタンドの敷地から出て行つた。その間、あの助手席にいた白いキャミソールの女は一度も車から降りる事は無かつた。

「刑部」

坂本が僕を呼ぶ声が聞こえて、振り返ると給油レーンが満車になつていた。いくら給油以外のサービスが無いとは言え、一人で駆け回る彼を助けに僕も外へ出て行つた。

「お前、喧嘩つばやいんだな」

彼のバイクに給油する僕に、秀雄が言つた。

「だつてさあ」

「さっきいた、リコさんて人に聞いたよ」

秀雄は笑つて言つた。

彼の視線に、少し照れた僕は思わず、しなくてもいいのにタオルで彼のバイクのミラーを拭いた。

「なあ、秀雄の学校も試験終わり？」

「いや、明日で終わりだけど」

さすが、県下一の進学校は試験日も長いのか？

「じゃあ、明後日海に行かない？」

僕は、何故秀雄を誘う気になつたのか判らない。さっき助けてもらつたお礼のつもりなのかもしれない。

千夏が誰か友達を連れて来ていいと言っていたが、和弥は年下の彼女と上手くいつているみたいだし、特に誘う友達なんていない。和弥以外とは、いままで全て上辺だけの付き合いで過ごしてきた気がする。結局、学校内では、男子にも女子にも本気で属する事が出来ないのだ。

「あつ、今日はあたしのおごりにしておくよ。今日のヒーローって事で」

僕は、財布を出した秀雄にそう言っ、掛売りのキーを押した。

あの男の力で顔を殴られたらどうなっていたのだろう。少しは加減してくれただろうか……

そう思うと、今更ながら、あの野獣の顔が目に浮かんで恐怖が沸き起こり、膝が震えた。

【第28話】

(Summer Dream)

川沿いの道を河口へ向かって走り、途中で右折して古い住宅街を通り抜ける。

しばらく松原が続き、そこを道なりに通過するといきなり視界が開け、長い海岸線に出る。道路を挟んで海岸の反対側には、永遠に松原が続いている。

緩く湾曲した海岸線は、かなりの距離続くが、遊泳できる区間は決まっている。波の荒いこの海岸は、遊泳禁止との仕切りが紙一重で、毎年水死事故が起きるのだ。

海開きして間もない平日の割には、思った以上に人出があるのは、この狂ったような暑さのせいだろう。

佐々木が乗ってきた軽トラには水上バイクが積んであった。ジェットスキーと言うやつだ。遊泳区画では危険なので、当然遊泳禁止区域へ持ち込んで走らせる。が、はたしてこの場所でジェットスキーを走らせていいのかも僕には判らなかった。

海岸線を一度通り越して、岩場の影から突き出た船着き桟橋からジェットスキーを下ろす。

小さなクレーンの着いている軽トラは、本来カート場の持ち物であるが、そのお陰で、ジェットスキーを海面に降ろすのに、あまり手間はかからなかった。

波を蹴って走る風は、陸を走るのとはまた別で、飛び散る波しぶきが身体や顔に跳ねる度に爽快感は倍増する。常に上下に揺れる浮遊感は、何処となく不安定で地面をグリップして走るような安心感はない。ただ、常に横滑りをしながら旋回する感覚は、何処となくカートに似ている。

千夏と二人乗りをして水面を走った。ターコイズブルーのビキニ

を着る彼女の素肌の腰に手を回した。

細くて柔らかいウエストから直に彼女の体温を感じる。

彼女は巧みなアクセルワークで右に左に大きく波しぶきを立てながら、急旋回を繰り返して後ろの僕を楽しませる。

激しい拳動に大笑いしながら、僕は彼女を抱きしめるように背中から強く腕を回した。

彼女の滑らかな素肌の背中からは、日焼け止めオイルのまったりとしたムスクのような香が漂っていた。

途中で運転を交代して、僕が前に千夏が後へポジションをとる。

彼女は布と薄いパッドのみに包まれた胸を、遠慮無く僕の背中に押し付けてくる。自分で自分の胸を触るのは全然違う感触は背中で感じているからなのだろうか。

僕は今年、何年ぶりかで水着を買った。いや、学校水着以外を買うのは初めてだった。

試着室が空いていたので、これ見よがしにいろんな水着を試着した。ビキニも何着か着けてみたが、さすがに人前で着る気にはなれなかった。

僕は、鮮やかなオレンジ色のワンピースタイプを選んだ。

それでも、背中が大きく開いている為、千夏の胸の感触は直に背中を感じた。

秀雄は痩せ型の割には意外と筋肉質で、スタンドで金髪の男に飛び掛った勇ましい姿を思い出させる。

バイクに乗っているだけあってか、初めてのジェットスキーを意外と上手に扱う。

熱い太陽が真上に来る頃には、僕達は遊びつかれて焼けた砂浜にマットやタオルを敷いてゴロゴロと取立てのトウモロコシのように横たわる。

ビーチパラソルの下に敷かれたマットに横たわって休んでいた僕の横に、秀雄が来て無言で腰掛けた。

「本当に、また会いに来ると思わなかった」

僕は彼に聞こえるように呟いた。

「あの時、松島の駅で言った言葉は本当だよ」

彼も呟くように、ただ海を見つめて言った。

「だから、当分は友達として普通に接するよ。希望はその先だけだね」

「どうして…… 他にも女性らしい本物の女の子なんていっぱいいるじゃん」

僕は、上半身を起こして、彼と同じ海を見つめた。

「俺にも判んない。俺、変なのかもな」

秀雄はそう言っただけ肩をすくめて笑うと、クーラーボックスからコーラのミニペットを取り出して蓋を開け、ゴクゴクと喉を鳴らして飲んだ。

佐々木は周辺に人影が無のをいい事に、バーベキューの準備をしている。

遊泳区間では海岸での煮炊きは禁止されているが、ここなら誰も注意はしないし迷惑も掛からないのは確かだ。

千夏が連れてきた友達は二人共ノリの良い女性で、一人は白、もう一人はグリーンの花柄の鮮やかなビキニを着ていた。

真っ赤なペディキュアはそのまま二人の性格を現しているようだった。

彼女らは三人共21歳だと聞いて、僕はその時千夏が21歳なのだ始めて知った。

佐々木は終止女性に囲まれ嬉しそうだったが、秀雄は年上の女性を相手に少々苦戦していた。

「高校生の彼氏もいいよね」

白いビキニのカナエが言った。

「最近年下狙いが流行ってるもんね」

そう言っただけ、ひとときわ胸の大きいグリーンのビキニを着たナナミは、秀雄の肩を抱き寄せたりする。

秀雄の腕が、彼女の大きな胸に食い込んで、彼はどうしたものか

と目を泳がせる。

彼女達には、高校生の秀雄が初々しく見えるらしい。そう考えると、男も女も年下を見るときの感覚は似たようなものだ。

シャワーを使う為に遊泳区画にある海の家までみんなで歩いた。サンダルの中から砂浜の熱が伝わってきて、まるでフライパンの上を歩いているようだった。

有料のシャワーを浴びた後、まだ出てこない連中を待つて海の家、座敷の隅に腰掛けていた。

「マユ」

聞き覚えのある声に振り返ると、そこには和弥の姿があった。

【第29話】

隣には朋子がいて、淡いピンクのビキニの上に白いＴシャツを着ていた。

「あれ、今日は部活なかったの」

僕が和弥に尋ねると、「サボリ」と言って笑った。

彼は、僕がいったい誰と海へ来たのか知りたそうな顔をしていた。付き合いが長いので、そんな事ぐらい直ぐに判る。

その時シャワーを終えた秀雄が出てきた。

「あつ、彼…… S 高の武中秀雄」

僕が、少しきこちなく秀雄を紹介すると、彼は軽く首だけの会釈をして微笑んだ。

秀雄はひと目で目の前の男が、僕が以前話した和弥だと悟ったようだったが、とりあえず和弥の紹介もした。

「あ、カート場の人達と来たんだ」

僕は二人で来たと思われるのが嫌で、すかさず説明する。ちょうど千夏や他の連中もシャワーと着替えを終えてざわざわと出てきた。和弥は複雑な笑みを浮かべながら、みんなに挨拶をすると「じゃあ」と言って僕達の前から離れて行った。

二人の歩く後ろ姿を、僕は少しだけ目で追ったが、直ぐに歩き出した。

「いいのかい」

秀雄が小声で言った。

「何が？」

僕は彼を見ずに応えた。

「彼、彼女がいるんだね。知ってたの？」

「ああ、知ってたよ。別におかしくないだろ」

「平気なのかい」

「あのねえ、和弥とは同性の友人として付き合いが長いんだ。秀雄

の友達に彼女が出来たからって、どうにか思う？それと一緒にだよ」
先を歩く千夏達に聞こえないように小声で話したが、何故か僕は
苛立って声を荒げていた。

そう、この苛立ちが何なのか…… 僕とは一度も来た事がない海
水浴場に朋子と二人で来ていた事への嫉妬なのだろうか。

「そうだな」

秀雄はそう言ったきり黙っていた。

その時、別々の方向へ歩いて行く和弥と僕の姿が、まるでこれか
ら歩む人生の違いのように思えて少しだけ寂しかった。

これまでの和弥との運命の糸が解れて消えてなくなるような、そ
んな不安で心がいっぱいになった。

別れ際に見せた彼の笑顔の中にも、それを感じ取った何かが見え
たような気がした。そして、一度解れた糸は二度と元通りにはなら
ないのだと。

それでも僕は一度も後を振り返る事はしなかった。

夏の日差しを受ける屋外での仕事は、露出した素肌を嫌でも小麦
色変えていく。

梅雨明け宣言はまだ無いが、ここ数日間、真夏日の晴天が続いて
いる。

車体に跳ね返る霧状の水飛沫に小さな虹が掛かり、ほんのりとそ
れが頬にかかるだけで、砂漠で見つけたオアシスのように身体を潤
してくれる。

こんな日は洗車の仕事が最高に気持ちいい。

同僚の平井理子はあの後彼氏とは別れたらしい。

「一昨日は有難うね」

二日後に会った時、理子が僕に言った。

「マユってなんか男の子みたいね。ビックリしたよ、アイツに正面

から突っかかってくから。そんなにかわいいのに」

彼女の「男の子みたい」と「かわいい」という二つの相違する言葉に、僕は複雑な気持ちで笑った。

スラリと手足の長いモデル体型の彼女にしてみれば、155センチの小柄な真夕の身体は、パッケージングが「かわいい」のだろう。店の敷地内でのいざこざに責任を感じて、一端は辞めると言っていた彼女だったが、店長には知られていない事だと言って、坂本と他の社員が引き止めたようだ。

良く働く笑顔の素敵な彼女を手放したくは無かったのだろう。

僕はバイト、和弥は部活に明け暮れている為、この一週間二人が偶然に会う機会は無かった。

カート場にも度々足を運ぶが、試験休みに入った大学生の来客が多くてなかなか競技用のカートを走らせる時間は取れなかった。

「昼間は当分ダメそうだな」

久しぶりに顔を合わせた龍二が言った。

レンタルカートでの走行者が多い場合は、競技用カートは走れない。

走れたとしても、ローテーションに従って5分ごとに再び順番を待つ事になる。

それでも25分で3千円取れるのだ。下手したら、3千円払って、5分しか乗れないかも知れない。

「競技用のカート、手に入れたんだって」

「ええ、三年以上前のお古ですけど」

「本格的にレースに参戦する訳じゃないなら十分だよ。早いだろ」
「ええ、最初はビビりました」

僕がそう言って笑うと、龍二も同じように笑ってタバコを啜えた。走るお客の数が多い為、千夏も忙しそうにラップタイムのプリントアウトや、受付をこなしている。

「昼飯でも食べに行かない」

龍二が言った。

僕は少々驚いたが、午後からバイトがあるから少しの時間ならと言って、彼の黄色いS2000に乗り込んだ。

龍二は電動ソフトトップを開けると、オートエアコンの冷房を全開にして走り出した。

屋根の無い車には初めて乗ったが、バイクとはまた違った不思議な感じがした。

正面の景色からは風を一切受けず、頭の上にそよぐ程度で、それでも上を見上げれば直に大空が広がっている。

「頭、暑かったら閉めるよ」

龍二はブラウンレンズのレイバンを掛けた顔を少しだけこちらへ向けた。

「大丈夫。気持ちいい」

確かに太陽の照りつける日差しは暑かったが、屋根の無い開放感に浸っていた僕にはあまり気にならなかった。

龍二の啞えたタバコの煙が一直線に後方へ流れて消えていく。

「千夏から何か聞いた？」

食事が一段落した時、龍二の口から思いもかけない言葉が出た。

「えっ、何かって？」

「いや、別に何でも無いよ」

そう言っただけは意味ありげな笑みを浮かべると、食後のアイスコーヒーをストローで吸った。

ファミレスを出て、国道をカート場に向かって戻る時、前方から見覚えのある自転車が見えた。

それが和弥だと言う事は一瞬で判った。おそらく部活が午前中で終わったのだろう。

信号で止まった車の横を彼が通り過ぎる。

和弥は左のドアの横から無言で盗み見るようにチラリと僕を見下ろした。

僕は一瞬だけ上目遣いで和弥を見上げて視線を逸らした。疚しい事など何も無いはずなのに、なんて気まずい瞬間だろう。

僕の身体が男なら、軽く声を掛け合えたかも知れないのに、この身体はどんな男と並んでいても、傍目には誤解を招く確率が高いのだ。

和弥にはそれを理解してもらっているはずなのに、最近気まずくなる事が多い。

それは、僕自身が和弥と朋子の関係に嫉妬を抱いているからに他ならない。

きつと僕は、和弥を特別な存在として独占していたかったのだ。しかし、今は朋子にとって一番特別な存在であり、それは和弥にとっても同じ事だろう。

和弥が朋子と身体の関係を持った時から、僕の存在は特別ではなくなっただの。

今はちよつと風変わりな、ただの友達に過ぎない。

【第30話】

(Vision — 幻影)

試験休みから、正式な夏休みに移行する際、終業式と言うものがあり、一度学校へ行かなくてはならない。成績表などと言うものが配られる日でもあるが、母は何も言わないし、そこその成績は取っている僕は、特に憂鬱と言う訳でもない。

学年女子の中で三分の一以内に入っていれば、自分の中では「よし」としている。

それとは別に、今日は、久しぶりに腰が重くて非常に辛い。二日目とはいえ、こんなに酷いのは久しぶりだ。しかし、今朝二錠半飲んだ鎮痛剤が効いたらしく、学校に着いてしばらくすると具合は良くなった。

終業式の放課後、掃除当番を終えて帰る準備をしていた僕は、クラスメイトの加奈に呼び止められた。彼女は一年生の頃から、仲の良い女友達だ。

「ねえ、マユ。ちょっと付き合ってよ」

加奈は少し困った顔で言った。

「どうしたの？」

「なんかさあ、三年生の男に呼び出されて……」

「リンチ？」

「ちがうよ、もうっ！」

僕の冗談に笑い返す余裕もないようだ。

加奈は、彼女に好意を持っている上級生の男子に呼び出されたらしく、用件は間違いなく告白だろう。

「そんなの一人で行きなよ。その男に失礼でしょ」

「そんな事言わないでさあ、何処かに隠れて見守ってて」

勝手な事を言っている……しかし、加奈は、僕より一回り大きな体格をした健康的な身体をしていて、その割におっとりとしてい

て何処か憎めないのだ。

僕は小さく溜息をついて肩をすくめると、そのまま、彼女が呼び出された場所までついに行った。

この学校の屋上には、小さな天文台が在って、一つのウリになっているが、授業でも殆ど使った試しが無く、時々活動している天文部の為にあるようなものだ。

屋上に続く階段は途中で別れ、片方は直接天文台に繋がっている。勿論、屋上から天文台に入る事もできる。

彼女が呼び出されたのは、屋上から入る天文台の入り口だったので、僕は屋上に出る手前の踊り場から少しだけドアを開けて、彼女の様子を見守る事にした。

加奈を呼び出した三年生は先に来て彼女を待っていた。

「あの、あの、あの………あ、あ、あの………」

緊張しているのか気が弱いのか、上級生らしい風格がまるで無く、ただ背がデカイだけのその男子生徒は、どう考えても加奈のタイプではなさそうだと、直ぐに見て取れた。

「あ、あ、あの……俺と……俺と、付き合ってくださいませんか」「ムリ！」

加奈は愛想笑いを浮かべるでもなく言い放った。

僕は、その光景を見て思わず目を丸くした。

告白に3分、返事が1秒といったところか……

彼女は二つ返事で断りの言葉を発すると、身体の向きを変えてそそくさところちへ向かって来た。

「ちょっと、もっと優しく断れないの？」

僕達はそのまま階段を足早に駆け下りた。

「だって、気持ち悪いんだもん。そんな余裕ないよ」

「わざわざあたしがついて来る事無かったじゃない」

「だって、どんな男か判んなかったし、マユが近くにいたから、強

気で断れたんだよ」

彼女なりに緊張していた事は、額に薄っすらと浮かぶ汗で判った。勿論、暑さのせいかも知れないが……

女二人？、きゃっきゃと階段を駆け下りて、三階に差し掛かった時、

「刑部先輩」

僕は突然誰かに呼び止められた。

振り向くと朋子が立っていた。

三階は一年生の教室が在るのだ。因みに、二年生は二階、三年生が昇降口に一番近い一階部分に陣取っている。

「ちよつと、いいですか」

朋子は僕と話したいと言うので、加奈は「じゃあ」と笑って手を振ると、先に一人で階段を下りて行った。

僕と朋子は四階に在る音楽室に向かった。

いったい何の話だろうと、胸の奥で心臓の鼓動が高鳴る。彼女が僕に話しと言えば、おそらく和弥に関係することなのだろう。

四階まで戻る階段が、やけに長く感じた。

【第31話】

僕のグーは小さい。握りこぶしの事だ。

他の女子と交わっている間、そんな事は意識しない。

僕が始めてそれに気が付いたのは、中学3年の時。あの夏に、和弥が僕の手を握った時だ。

その手の大きさは僕の全てを覆い尽くしてしまいそうな気がした。僕には父親がいない。母親の手もさして大きくはないから、男の人の大きな手というイメージや感覚は普段、身近に感じる事が無かった。

高校になっても僕の手はやっぱり小さくて、男子の誰かの手を真直に見ただけで、僕の現実は女性なのだと実感する。

身体つきからして、どう見てもそれは当り前の事なのに、何故だか僕の中では手の大きさが一番男女の差を実感するのだ。

目の前の階段を上る朋子の手が、ちょうど僕の視線に入る。僕はこっそり自分の手と彼女の手を見比べる。

やっぱり僕は、こちら側なのだと思った。

校舎の四階は音楽室の他に視聴覚室や美術室などの特殊教室しかないので、部活をやっていない限り人気は無い。内緒の話にはうつつけか。

「いきなり呼び止めてごめんなさい」

音楽室に入ると、朋子が言った。

「別にいいけど。話って何？」

僕は小さく微笑んで彼女に尋ねた。

朋子は、僕より少し背が高いので、僕はあえて一段高い教壇の場所に立った。

「和弥の…… 和弥先輩の事どう思ってるんですか？」

言い難そうではあったが、彼女のいきなりに不仕付けな質問に僕

は目を丸くする。

「どうって、どういう事？昔からの友達…… だけど」

「ウソです」

彼女は僕が応え終わるが早いか言い返した。

「ウソじゃないよ」

僕は少しだけ激しい口調で言い返してしまう。

「だって…… 彼があなたを見る目はそんなんじゃない。まるで想いの届かない恋人を見つめるような悲しい目」

「あたしを見るって、何時？」

「いつも…… お昼休みに渡り廊下で見かけた時、放課後教室の窓から昇降口を出るあなたを見つけた時、全校集会で体育館に入って並ぶ前の雑踏に包まれている時、そして、この前海で会った時も……」

僕は何も言葉が出なかった。彼女はただ和弥を見ていただけなのだろう。

そして彼の視線の先に映るのが何時も僕だと気付いたのだ。

和弥はそんなに僕を見ているのだろうか。

何を思い、僕さえ気付かない程の遠い距離で彼は見つめるのだろうか。

それは判りきっている。判りきっているが、僕はそれを受け入れず、判らないふりを通さなければならない。

「和弥先輩とは、以前に何かあったんですか」

彼女は真剣な顔で尋ねる。

僕はどう言って説明すればいいのか迷ってしまった。

「何も無いよ。ただの幼なじみだよ。」

僕は穏やかな少女の笑みを浮かべて言った。しかし、彼女の顔はもどかしい梅雨空のように曇っている。

「あたし…… 怖いんです。ある日突然彼に振られそうな気がして」
和弥は積極的な娘と言っていたが、それとは裏腹に彼女なりに現実を見つめ不安を抱えているのだ。

「でも、それはどんな男女の仲にもありえることでしょ」

「だって、刑部先輩を見る彼の瞳には絶対勝てない……」

彼女から見た僕を見つめる和弥の視線は、それほどに絶対的なもののだろうか。

「目の前にあっても決して掴む事の出来ない幻影……」

不意に朋子が呟いた。

「何、それ？」

「和弥先輩が前に言ったんです。あたしが付き合ってくださいってコクった時、俺の心の中にある幻影にキミは勝てないかも知れなよって」

僕はただ瞬きを繰り返して彼女を見つめた。

「幻影って、どう言う事ですか。それって、きっと刑部先輩の事ですよね。こうして実在しているのにどうして幻影なんですか」

彼女の口調が少しだけ激しくなると、僕はすっかり困惑して、音楽室の蒸し暑さがいつそう額の汗を誘発させた。

やはり、和弥の僕への、いや女性である刑部真夕に対しての思いは断ち切れていなかったのだ。

僕の心が男である事をこの場で言えば…… いや、そんな事をしたら、その僕に気がある素振りを見せる和弥が、おかしい目で見られるかもしれない。

それに、今更そんな事が学校中に知れたら、晴香や加奈とこの先どう接していけばいいのか判らない。

「それは、たぶんあたしの事じゃないよ」

僕はポツリと呟く。

「変な事に悩んでないで、しっかり和弥の気持ちを抑えな」

僕はそう言い切ると、朋子に背を向けて音楽室を出た。

彼女は僕を呼び止めはしなかったが、じつと僕の背中を見つめる視線がブスブスと突き刺さり、痛かった。

目の前にあっても決して掴む事の出来ない幻影…… そうか、僕

のフィジカルな刑部真夕はまさしく幻影かもしれない。

その幻影に惑わされ、悩んでいる男がもう一人いる。

秀雄だ。

しかし、彼はその幻影を掴もうともがいている。和弥が言ったとおり、おそらく絶対に掴めないだろう。

天体望遠鏡のレンズ越しに見た、銀色に輝く大きな満月に決して手が届かないように、刑部真夕という純粋な女性はこの地上に存在しないのだから。

しかし、それと同じくらい僕には千夏の身体に男として触れる事は出来ないのだ。

【第32話】

(TONIGHT)

混濁のない炎天の真っ青な空を見渡すと、遠くに連なる山並みの向こうから、真っ白な入道雲が立ち昇っている。吸い込まれそうな「白」にも微妙な陰影があつて、遙か上空にも確かな空間が存在しているのだ。

眩暈がしそうなほど広大なその空間を見上げると、自分の立っているこの地上がやたらとちっぽけに感じて、それと同時に、そんな大げさな事ではないのだが、微かな希望や勇気が湧き出るような気がする。

それが、大まかに言えば、清々しさなのかもしれない。

午後からスタンドのバイトに入って夜の八時にあがると、僕は千夏のアパートへ向かった。

午前中にカート場へ行ったら、彼女が夏風邪で休んでいると聞かされたからだ。

途中にあるスーパーに立ち寄って見舞いの果物と飲み物を買う。最近はや遅くまで営業しているスーパーが増えて便利がいい。

一軒家の多い住宅街の路地を進むと、真新しいアパート群が三つ並んでいて、その左のアパートの201号室、そこが千夏の部屋だ。閉じられた窓のカーテンから明かりが漏れている。

僕は階段をつま先だけで駆け上がり、ドアの前に立つとチャイムを鳴らした。

十数秒してガチャリとドアが開く。

「あら、いらつしやい」

完全なスツピンの彼女は、パジャマ姿のまま土色の顔で笑った。
「大丈夫？」

見るからに体調が悪そうな彼女に僕は尋ねる。

「うん。随分良くなった。入って」

僕は少し遠慮気味に玄関に足を踏み入れた。

「寝てていいよ。あたしやるから」

そう言っただけで勝手を知っている僕は、キッチンからグラスを取り出し林檎ジュースを注いでテーブルに置く。

「何か食べた？」

「うん、お昼に少し」

何時も元気なだけに、彼女の弱々しい声が痛々しい。

「キウイでも剥こうか」

僕がそう尋ねると、千夏が小さく肯いたので、キッチンから持ってきた果物ナイフを使ってキウイを剥き輪切りにする。

朝からあった熱は下がったらしく、食欲も出てきたと言うので、僕は冷蔵庫に入っていたうどんを卵で綴じて煮込んであげた。

「なんか、誰かにご飯を作ってもらったのって、久しぶり」

千夏はそう言っただけで嬉しそうに煮込みうどんを食べる。

僕は自分に注いだ、グラスのジュースを飲みながら彼女を盗み見た。

弱々しいスツピンの笑顔は、まるで赤ん坊のように無防備で、それが体調の不良からくるものだとも知りながらも、何故だかいとおしい。

「ああ、マユが来てくれて助かった」

食事を終えた彼女が呟いた。

「いつもしてもらってばかりだから、こんな時くらい力になるよ」

僕はキウイを一切れつまんで笑った。

洗い物を片付けて部屋を覗くと、千夏はタオルケットを胸まで掛けて眠っていた。その静かな安堵に満ちた寝顔にそっと近づくと、口紅を着けていない淡い色の無垢な唇が、とても柔らかそうに寝息を立てている。

今なら、彼女の身体の全てを僕の思いのままに自由に出来るような錯覚に陥る。

そこには千夏の意識や感情などなく、ただ僕の欲望を満たす為の人形が横たわっているだけだ。

あと三センチ。僕は唇を近づけて、そこで止めた。

彼女の香が間近に鼻孔を擦って正気に戻る。

それでも彼女に触れたくて、僕はそつと千夏の額にかかった前髪を指でなぞった。

最初に見た時よりも、彼女の顔色はだいぶ良くなっていた。

僕は書置きを残すと、テレビを消して、部屋の明かりを豆球だけにし、アパートを出た。

帰り際に見上げたアパートは、彼女の部屋だけがしっとりと静かな眠りに落ちていた。

【第32話】（後書き）

【一口メモ】GIDの多くは一般の男女と同じく自分の『心理的性別』に相応しい服装を好み、『心理的性別』と反対の性を恋愛対象とする場合が多い。その為、身体的性別を基準に見た場合『異性装を好み』『同性を恋愛対象とする』かのように見えてしまう。

【第33話】

(HANABI)

夜空に伸び上がる閃光の帯びが上空で炸裂すると、鮮やかな光の花が咲き乱れる。一瞬遅れて爆音が空気を震わせ、身体のシンに響き渡る。運河の水面に映り込んだ空と同じ光の花は、緩やかな流れの波間に消える。

僕は、あまり花火が好きではない。

あの、鮮やかな光のオブジェが夜空を染めて、一瞬で消え入る際の果かなさが、まるで、消えるために光り輝くようで、見ていて切なくなるのだ。

何時もは閑散とした駅周辺の商店街も、屋台の出店が連なり、大勢の人の頭でこった返す。

「花火大会なんて久しぶりに来たよ」

人込みで肩がぶつからないように、右に左に身体を振りながら歩いた。

今朝、秀雄に誘われて、何となく来た夜のお祭りである、河川の花火大会は何故かとても懐かしい。

僕は、何時から花火が好きではなくなっていたのだろうか。

小さい頃、母親が連れて来てくれた時、既に今と同じ事を感じながら、次々に打ち上がる花火を見つめていたのかもしれない。

「俺も高校に入ってから初めて来たな。昼間は来た事あるけど」

秀雄は僕の姿が人込みで消えてしまわないか、心配そうにこちらをチラチラと見下ろしながら歩く。彼と僕の身長差は二十センチくらいあるのだ。

小学生の頃以来で金魚すくいをやってみた。

「お姉ちゃんうまいね」

二匹連続ですくった僕に、テキヤのオヤジが笑った。

秀雄も負けじと金魚をすくう。

「なんか、メダカみたいなのばかりだな」

そう言って、秀雄は自分の捕獲したオレンジ色の貧弱な金魚を眺めると

「ほら」

そう言って、何気に僕に押し付けた。

金魚の入った小さなビニール袋を二つぶら下げて歩く上空からは、相変わらず花火の炸裂する音が、真夏の星空に響き渡っていた。

「ここからじゃ、ほとんど花火は見えないね」

駅前商店街は、歩道部分がアーケードになっている為、空はあまり見えなかった。もちろん、僕の視界には、それ意外にも人ごみという障害物が立ちほだかる。

「河川沿いに行ってみようか」

秀雄が僕を促した。

僕達は人込みを掻き分けて、屋台が連なる大通りから小道に入って河川に出る。

河川沿いの細い旧道には、花火見物の人垣が出来ていたが、メインの観覧会場に比べれば空いているのだろう。

僕達のいた場所には、小さな古い灯台があった。

昔、商業用航路として盛んに使われたこの運河を照らして、行き交う船を導いていたのだそうだ。

次々に打ち上がった花火の炸裂光は、上空と水面の両方から辺り一面を照らし出して、朽ち果てた古い灯台が、まるでカクテルライトを浴びたように輝く。

「おい、おまえ」

突然、左の後方からドスのきいた低い声が聞こえた。

何かと思い僕は振り向く。それが僕達に関係のある事だなんて、微塵も思わずに。

男が三人立っているのが見えた。

他の二人の顔は暗がりによく見えなかったが、真ん中の男の顔は

一瞬だったかはつきりと見えた。それは、秀雄に向かって突進するように駆け寄って来たからだ。

その野獣のような顔には見覚えがあった。

「あっ」

僕は声を上げた。

男の右手に、微かに光る刃を確認したからだ。その刃は真っ直ぐ秀雄に向かっていているのが判ったが、彼を突き飛ばす暇はなかった。

秀雄の視界からはナイフが見えなかったのか、彼は慌てて避けようとはしなかった。

「ザッ」っと鈍く乾いた音が微かに聞こえた。

「うっ」

秀雄が一瞬うめき声をだす。

男が後退りで秀雄から離れると、彼のわき腹にはナイフが呑み込まれ、柄だけが突き出ていた。

【第34話】

無言で後退りする男の顔を見て、僕は思い出した。

その男は、以前秀雄が馬乗りになって殴りつけた、理子の元カレだった。

「ボコるだけじゃなかったのか」

後にいた二人のうち、どちらかが震える声で突然叫んだ。

「俺達は関係ないからな！」

暗がりにはいた二人がバタバタと路地に走り去った。秀雄は一瞬何が起ったか判らないように顔を歪めて、僕の前に崩れるように倒れ込んだ。

「秀雄、秀雄、しっかりしろ」

崩れ落ちた秀雄を見て、刺した男も慌てるように走り出して暗闇に消えた。

周囲にいた群集が、何かとこちらをみているが、みんな訳が判らず手を差し伸べる者はいなかった。

秀雄のわき腹から少しずつ血が滲んでTシャツを染めている。

僕は急いでポケットから携帯電話を取り出し、警察に電話した。

「どうしたんだ」

「何かあったの？」

「あの少年、刺されたみたいだ」

「うそ、マジで」

ひそひそと、そんな会話が僕の耳を素通りする。

秀雄は目を細く開けて僕を見つめると、無意識のように自分のわき腹に刺さったナイフに手を伸ばし、柄を掴んで抜こうとした。

「抜かない方がいい。抜いたら出血がひどくなるかもしれないから」

僕は彼の手を掴んで言った。

「傷、ひどい？」

秀雄は心細そうな笑顔を作って僕に尋ねる。

「うっん。大丈夫だよ。出血もあまり無い」

僕はそう言って彼の頭を胸に抱かかえた。

秀雄の額からは、苦痛に耐える脂汗が吹き出っていて、僕は自分のＴシャツを引っ張って彼の汗を拭った。

実際は刃渡りがどの位あったのか判らない。一瞬花火の閃光に反射して光った刃は、ごく小さかったようにも思えるし、とてつもなく長かったような気もする。だからどの位、傷が深いのか判らなかつたし、出血が少ないのはナイフがそれを止めている為だと思った。

僕は、救急車が何時まで経っても来ない事に少し苛ついていた。

１１０番の通報で、１１９番にも連絡がいつているはずだ。

花火の音に混掻き消されるように、微かにサイレンの音が遠くで聞こえる。

（こつちだ、早く来い！）僕は心の中で連呼する。

そうしているうちに、駅前交番から警官が二人、その後自転車でもう一人駆けつけて来た。秀雄を見るなり、警官の一人が無線で何かを話している。

犯人の人相や背格好を彼らに伝えと、再び一人が無線を使つて話していた。

自転車の警官は、その後男達が消えた方角へ向かってペダルを踏む。

「大丈夫だからしつかりしなよ。すぐ救急車来るから」

警官の一人が優しく話し掛けてくる。普段うつとおしい制服が、チヨットだけ頼もしい。

目の前の暗闇から大きなサイレンの音と共に救急車の姿が現れた。あの白いボディと眩しく光る赤色灯が、あれほど安堵の色に見えたのは初めてだった。

僕達とは無関係に、頭上の花火は夜空を染め上げ、盛大に輝きを増し、フィナーレに近づいていた。

【第35話】

幸い急所が外れていたらしく、秀雄は命に別状が無いと医師から説明を受けた。病院に運び込まれてしばらくした頃、警察が来て犯人を確保した事を告げられた。

秀雄の容体が回復した頃に事情調書を取りたいので、再び来訪するとの事で、彼のわき腹から抜かれたナイフは、証拠品の凶器として警察が回収していった。

その後、秀雄の母親が病室に来たので、僕は一端家に帰った。彼の携帯のメモリーから自宅を探して連絡したのだ。

母親は、何で息子が……と言ったような困惑した顔で僕の説明する事情をただ黙って聞いていた。

「アイツ、すぐに捕まったらしいよ」

翌日病院へ行くと、秀雄は顔色も良くなってベッドに横たわったまま雑誌を読んでいた。まだ、起き上がれはしないようだ。

「今朝、警察が来て聞いたよ。あんな危ない奴、当然だ」

秀雄を刺した男は、屋台の並ぶ駅前通りで僕達を見かけて、ずっとつけて来たらしい。他の二人連れも共謀で捕まったが、秀雄を刺した男は、障害では無く殺人未遂で起訴されるようだ。

僕は、買ってきた花を、窓際のワゴン式ラックの上に置いて

「でも、よかった。秀雄が死ななくて」

秀雄は笑って「このぐらいで死んでたまるか」

病室のドアが再び開く音がして、僕達は同時に振り向いた。

「とりあえず病院の駐車場に停めて来たよ」

和弥がそう言って病室に入ってきた。

「ありがとう」

僕はそう言って少しだけ微笑んだ。

「バイクの移動、頼んだんだ」

和弥の顔を見て少し驚いていた秀雄に僕が言った。

秀雄のバイクを駅前に置きっぱなしには出来ないの、和弥の友人で二輪免許を持っている智弘に移動を頼んだのだ。

「智弘は？お礼言おうと思ったのに」

「ああ、帰ったよ。別に礼なんていいよ。アイツ、CBRに乗れただけ喜んでたから」

和弥はそう言って笑いながら、バイクのキーを僕に手渡し、それを僕から秀雄に渡した。

「ありがとう」

秀雄は和弥の方を見て笑った。二人の視線が絡み合うその空間は、他の景色を遮絶したかのように、異様な空気を醸し出す。

「あ、あたし花瓶の水替えてくるから」

僕は、もともと手頃な台詞を呟いて、その居た堪れない空間から離脱した。

流し場で花瓶の水を一端捨てて、水道の蛇口をひねる。ふと、前方の鏡を見ると、そこにいるのは女子高生の刑部真夕だった。

僕はニツと笑って見せるが、ピンクのリップを塗った唇から覗く白い犬歯と、ビューラーでカールした長めの黒い睫毛に、つい深い溜息をつく。

別に女になりたくて化粧をするわけではない。この顔をベストの状態にしたいと思うと、つい塗ってしまうのだ。何も塗らないからと言って、この顔が男に見えるわけでもなく、それならいっその事、という具合だ。

社会適合がどのと言うよりも、単純にそう思ってしまうのだから仕方が無い。そのくせ、鏡を見て溜息をつく自分がいるのだから、まったく世話がやける。

両手で花瓶を抱えて病室に入ろうとした時、中から彼らの話し声

が聞こえて、僕は思わず足を止めた。まさか喧嘩しているのではない、立ち止まって部屋の中から聞こえる声に聞き入る。

「この前、海で会ったよね」

「ああ」

「あのかわいい彼女は元気？」

「まあ。何とかね」

なあんだ、彼女とは上手くいつてるのか。

「幻影をいくら追っかけても、抱きしめる事は出来ないと思うよ。

彼女は彼女であって、彼女じゃないんだから」

和弥が少し冷静な声で話している。幻影と呼ぶ彼女とは、どう考えても僕の事だろう。

「なあ和弥、マユの胸って、柔らかくて暖かいんだぜ」

秀雄の声だ。僕は持っていた花瓶を危うく落っこしそうになった。

昨夜、彼の頭を胸に抱かかえた時の事だろう。何もわざわざ和

弥に言わなくても……僕は一人で頬を紅潮させた。

「ああ、知ってる」

和弥の少し優越感のある声。

そして、フツと笑う秀雄の声。

「やっぱりキミも知ってたのか」

「ああ、昔ね」

奇妙な間はあったが、二人が同時に笑い出した。僕は一瞬その場に立ち竦んだが、笑い声が終わらないうちに病室のドアを開けた。

「ずいぶん仲良しになったんじゃない」

僕は、そう言いながら、今日買ってきた花を花瓶に生けた。

ふと手を止めて、青空の向こうに浮かぶ雲の波間に目をやると、手前の窓ガラスに映る3人の姿が見えた。

ここにいるのは男三人のはずなのに、そこに映っているのはどう見ても二人の男と紅一点……

「まさか、俺達はライバルなんだぜ」

秀雄の言葉に僕は思わず振り返る。

「ま、そんなところかな」

和弥が笑ってそう言っていると「じゃあ、俺は帰るよ」

と、片手を上げて病室のドアを開けた。

和弥とまともに会って言葉を交わしたのは、夏休みに入ってから初めての事だった。僕は何故か少しだけ名残惜しい気持ちで、病室を出て行く彼の背中を見つめた。

【第36話】

(Physical Counsel)

空が一瞬閃光に包まれて、思わずみんなが顔を上げる。直後には地鳴りのような雷鳴が大気を震わせ、内臓まで響いてくる。その間、僅か一秒あるかないか。

雷はほぼ真上で放電している事になる。

僕はバイトを終えて家に帰ろうとスタンドを出た所だった。

何処からとも無くパタパタと何かを叩くような音が聞こえて来たと思つたら、アツと言う間に水煙に覆われた風景にのみ込まれた。

旋毛に痛みを感じるほどの大粒の雨だった。

僕は一瞬スタンドに引き返そうかと後ろを振り返つたが、その距離が異様に遠く感じて、目の前に見えたTUTAYAの庇の影に飛び込んだ。

アスファルトに叩きつけられた雨水が飛沫をあげて、地面全体が白く煙っている。

カツと空が光った時、稲妻が縦に走つたのが見えた。バリバリツと言う、空を切り裂くような物凄い音と共に大地が震えた。

何処かに落ちただろう。と、僕は心臓の鼓動が速まるのを感じながら遠くを見つめた。

目の前を足早に歩く制服姿の女子高生は部活か何かの帰りだろうか、降りしきる豪雨に傘が役目を果たしていない。

その二人は互いに悲鳴を発しながらTUTAYAの店内に駆け込んでいった。

クラクション、と言うには品のある、聞き覚えのある優美な音色が二回鳴るのが聞こえた。僕が俯いていた顔をあげると、赤いレガシーが目の前の路肩に止まっている。

それが千夏だと言う事は直ぐに判った。しかし僕とレガシーの間は、激しい滝のような雨で仕切られていた。

携帯の着メロが鳴る。車の中の千夏も携帯を手にしていた。

「もしもし……」

「凄い雨ね。乗せてあげたいけど、チョットでもそこから出たらずぶ濡れね」

千夏は何時もの明るい声で話しながら、車の窓越しにこちらを見ている。

「自転車積んでもいい？」

僕がそう尋ねると「いいよ」と言っ、て、彼女はリヤゲートのハッチをオープンにした。

既にずぶ濡れの僕は、構わずリヤゲートを自分で全開まで開け、マウンテンバイクを押し込んで素早く後のドアからリヤシートに滑り込んだ。

「とつくにずぶ濡れだったから」

僕は千夏にそう言っ、て、髪の毛から雫を垂らしながら笑った。

「そのタオル使っ、て」

彼女に言われるまま、リヤシートに置いてあつたバスタオルで頭や顔を丹念に拭く。

「助かつ、ちや、った」

僕がそう言っ、て笑うと、彼女も笑い返した。

「うち、寄っ、ていきなよ。ご飯まだでしょ。あたしもこれからなんだ」

彼女は僕の家が母子家庭で、母親が忙しい事を知っている。

「じゃあ、喜ん、で」

僕はそう言っ、て笑った。

千夏は、料理が上手だ。一見派手そうに見える彼女の外観からは、想像出来ないくらいに家庭的なのだ。

彼女の家は、自分以外に兄弟が3人いて、みんな男の子だったそう。だから千夏は、自営業で忙しい両親に代わっ、て、中学の頃か

らよく食事の仕度をしたのだという。自然に身に着いたものだから、その料理も家庭的で、それが僕には心地よかった。

兄弟のいない僕には、その面倒を見るという事自体が、あまりピンとこなかったが。

僕達は、駐車場から全速力で、彼女の部屋へ駆け込んだ。

彼女の部屋へ入ると、濡れた上着を脱いで乾かした。履いていたジーパンも、まるで河へでも飛び込んだように濡れていたので、一緒に乾燥機に押し込んだ。

「乾くまでこれ」

そう言っただけ千夏は自分のＴシャツとスエットパンツを渡してくれた。彼女も車から降りる際にかなり濡れたので、着ていたシャツを脱ぐ。

三分の二カップの淡いピンクの下着がかわいらしかった。

やっぱり僕より大きいみたいだ……

【第37話】

甘い香と唇に感じる柔らかくて暖かい、なんとも言えないまろやかな感触で意識は目か覚めた。

瞳を閉じた千夏の長い睫毛がアップで見えた。

まろやかな感触が彼女の唇だと言う事は直ぐに気付いた。しかし、何がやら理解できずにそのまま考えた。

彼女は僕にキスをしているのだと、感触ではなく頭の中で理解する。

それでも僕は、彼女の唇の感触があまりにも気持ち良くて、少しの間されるがままになっていた。

どうやら食事の後、僕は千夏の部屋で横になり、そのまま眠ってしまったらしい。

彼女は横たわる僕に、仔犬に寄り添うように屈んで唇を重ねていたのだ。

薄っすらと目を開けた彼女の瞳が、僕の瞳と力チ合った。

「ご、ごめん……」

彼女はとつさに飛び跳ねるように、僕から離れると、頬を赤く染めた。

気まずさよりも、僕はこの現実が信じられず、頭が混乱していた。まさか、彼女までが、F t Mと言うことはあるまい。

「ち、チカさんって……レズ……なの？」

僕は横になったまま恐る恐る、座って背を向ける彼女に訊いた。

「うっん。違う」

千夏は大きく頭を振って、それを否定した。

「ノーマルよ。そのはずなのに、マユといるとなんだか変な気持ちになるの。全然男っぽい訳でもないのに、どうしてか、あなたの瞳の奥に男性に感じるような、何だか判らないものを感じてしまうのよ。あたし、やっぱり、おかしいのかな……」

千夏は、自分の火照った頬に手を当てて「ごめんね、変な事して」
彼女は真夕の中にいる、いや、真夕の正体である僕を感じ取って
いたのかもしれない。

そう思うと、僕は嬉しかった。

「チカ……………さん。あたし……………」

何度も経験するこの瞬間。僕はその先を言葉にすることは無かった。

どうしても、その先の言葉は出ない。

自分が男性の自認をしていると言う事。

その些細な言葉が、どうしても僕の口から発せられる事を拒むのだ。

僕達は深い泥沼にはまってしまったかのように抜け出せなくなつて、もがき苦しむ事になる。しかし、確かに感じる安らぎと安堵は麻薬のように身体、いや心に染み込んでその関係を更に深いものと押し沈めるのだ。

その禁断の關係に…………… いや違う。僕にとってはこれが正常な關係なのだ。

もしも、お互いのフィジカルな部分を全て取り除いて、魂の塊として対峙する事ができたなら、紛れも無くこれは男と女の關係なのだ。

しかし、そんな事は絶対に不可能だと言う事も判っている。

それでも僕はバイトが終わると、毎晩のように千夏のアパートへ行く。そして、お互いの思いを確かめ合うように、身体を絡め合う。「どうしてだろう……………」

彼女が不意に呟いた。

彼女はこんな關係を良くは思っていない。それでも、時に心と身体がバラバラに動いて、本能のまま欲する事があるのだ。

寝ている僕に最初にキスをしてきたのは彼女の方だ。僕は、そう

考える事で、この関係に彼女を引き込んでしまった僅かな罪悪感から逃れている。

千夏の心は、自分の感情と一般的な恋愛の常識の狭間に、常に葛藤し、困惑している様子だった。

「マユは、こんな事になって平気なの？」

僕は、少しの間沈黙した。

それを彼女の瞳が真っ直ぐに見つめる。

この状況を第三者にでも見られない限り、僕はそれなりに満足しているだろう。

ただ、彼女の身になって考えた時、僕の目が第三者となってその行為をする二人の女性を冷静に見つめているとき……

その光景は、やはり異様だ。

そして彼女は何か思い出したかのように突然

「あつ」と小さく声に出した。

「何？」

「うつん、何でも無い」

千夏はそう言って少しだけ目を伏せた。

そのすぐ後、今度は僕が「あつ」と声を出しそうになって言葉を呑み込む。

彼女は、以前僕が性同一性障害の友人がいる、という話をした事を思い出したのではないかと思ったからだ。

彼女の表情は、何かを感じ取ったかのように複雑に変化していた。

「マユ…… 正直に言って」

長いキスの後、千夏が僕の目を見つめて言った。

「マユは、本当は男の子なんじゃないの？前に言ったよね。性同一性障害の事。あれって、あなたの事なの」

やっぱり、彼女は思い出していた。僕が以前言った言葉を。

僕は再び沈黙した。

その時、彼女の手が、タオルケットの下で僕の手をそっと握り締めた。

ひんやりとした彼女の手が、何故かとても暖かく感じた。

僕は、彼女の瞳の中に映る自分の顔を見ながら小さく頷いた。そして、何故か、自然と涙が零れた。

「嫌いになる？」

僕がそう言っていると、彼女は小さく首を横に振って、僕の顔を胸に抱きしめてくれた。

とても暖かく、そして安らかだった。

【第37話】（後書き）

この作品を書くきっかけになったのは、テレビでF t M、G I Dに悩む人を見たときでした。その人は、男の性自認をしながら女子高へ通っていました。この人凄い。その時は正直にそう思いました。その後、その人は手記を出版したようですが、私はあえて読んでいません。既に、この小説を書き始めていたので、そのリアルであるう文面に影響されなくなかったからです。

【第38話】

(Elder Brother)

お盆中は、帰郷する人で地方の町は大変混雑する。

いつも空いているバイパス道路も朝から晩まで混み合つて、僕がバイトしているガソリンスタンドも、お客の入りが何時もの二―三倍あり、給油フロアには殆ど切れ間無くお客の車が止まる。

それでも夜の9時にもなると、さすがにお客の数も減ってくる。

夜の部に入っているバイトの大学生と入れ替わりに僕は上がりとなつて帰宅の準備をしていた。

「刑部、お客さんが来てるよ」

ノックの後に休憩室のドアが開いてスタッフの声がする。

休憩室の奥は女性専用になっているが、パーテーションで仕切られていてだけで途中にドアは無い。

私服に着替えた僕は、ロビーへ入った。そこには、40歳前後であろう女性がソファに座っている。

彼女は立ち上がつて会釈をすると、マジマジと僕を見つめて

「石田由美といいます」

僕は名前を聞いても、それが誰なのか判らず、ポカンとしたままとりあえず会釈をした。

「あの…… さんの御用ですか」

「あなたが、刑部真夕さんでしょ」

彼女は微笑みながら言った。

「そうですけど」

「石田勇次の現在の妻です」

「はあ……」

そう言われても、まだ僕には判らない。

「石田勇次は、あなたのお父様です」

僕はその言葉を聞いて少しだけ驚いたが、あまり現実味を感じな

かったし、実感もなかった。父とは一度も会ったことが無いのだから、当然と言えば当然だ。

「それで、なんの用ですか？」

僕はまるで他人事のような口調で尋ねた。

「一度、どうしても会ってみたくて」

僕の母とそう変らない歳であろう彼女の笑顔は、随分老けて見えた。

「あのひと…… いつもうなされて……」

「はあ……」

僕には彼女の言葉が、どうしても自分に関係在る事には思えなかった。

「うなされるって、どうしてですか」

そう言えば、僕は父と母がどうして別れたのか知らない。しかも、今まで考えた事も無かった。

「あなたのお兄さんの事だと思うわ」

「兄………ですか」

「あ、ごめんなさい。あなたにこんな事」

彼女は少し俯いて目をそらした。

「兄って？」

「やっぱり、聞いてないわよね。ごめんなさい、いきなりこんな事」

彼女はそう言って立ち上がると「ひと目、見れてよかったわ。じゃあ」

「あの、兄ってどう言う事ですか」

彼女はゆっくりと会釈をすると、

「何でもないのよ。それじゃ」

そう言って、待たせてあったタクシーに乗り込んで去っていった。僕は、突然現れた石田由美という女性に乗ったそのタクシーのテールランプを、しばらくの間眺めていた。

兄…… 生き別れた兄でもいるのだろうか。父が引き取ったのか。

しかし、彼女は兄の事で父がうなされる。と言っていた。

僕はその夜、なかなか寝つく事が出来なかった。

後から考えると、何故、兄弟がいる事を伏せられているのか疑問が湧いてきた。父と母は、何か深い訳があつて離婚したのだろうか・
・それと兄の事が関係しているのだろうか。

僕は、テレビの揺らめく明かりが照らし出す、薄暗い天井を眺めていた。

「ねえ、お兄さんってなに？」

翌朝、仕事に出かける前の母に尋ねた。忙しそうにサラダを食べながらコーヒーを啜っていた母は、僕の問い掛けに息を呑んで、血の気が引くように顔色が変わった。

「どうしたの、急に」

彼女は作り笑顔で応える。

「本当は、お兄さんがいたの？お父さんと暮らしてるの？」

「誰に聞いたの。お父さんに会ったの？」

僕は首を横に振った。

「今の奥さんって人が、昨日会いに来た」

「その人、なんて？」

母の顔は確かに強張っていた。僕が何を聞いて、何を知っているかをしきりに探る。

「よく判らないんだ。なんか、あの人が時々うなされる。とか言うて」

母は、俯いてしばらく黙って、そしてコーヒーを一口飲んで呟いた。

「死んだわ」

カップにコーヒーを注いでいた僕は、思わず注ぐ加減を間違えてカップの外にコーヒーが零れてしまった。

「死んだって……？」

僕は、テーブルに零れたコーヒーを布巾で拭きながら訊き返す。

「いずれ判ってしまうでしょうから……」

そう言って、母は重そうな口を開き、話続けた。

「あなたは、二卵性の双子だったのよ。そして、お兄さんの方は、訳あって死産だったの。その時は、あなたも危なかったのよ」

双子だったなんて初耳だった。そして、兄が死産だったなんて。あまりに現実感がない話で、僕の頭は少し混乱した。だから、ショックを受ける余裕は無かった。いや、ショックを受けたからこそ混乱したのか。

「お父さんと離婚したのはそれが関係してるの？」

母は小さく肯いた。

「そうだと思う」

そう言った後、何故兄が死産になってしまったのか、彼女は記憶の限り話し出した。

「アイツの声が聞こえるんだ。アイツは生きようとしていた」

あの人は毎晩そう言って、夜中にベッドから飛び起きたわ。あなたの、お兄さんの声が聞こえるんだって、夢に出てくるって。

「生まれる前の子供が言葉を話すはず無いのにね」

母はそう言いながら、悲しい笑みを浮かべる。

病院でカウンセリングも受けたの。事故の際に運転していた自分を責めているんだらうって、医者は言ってた。でも、結局あの人は出て行っただわ。真夕が一歳になる前にね。

父は、妊娠中の母を乗せて車で移動中に、交通事故に巻き込まれたのだそうだ。

彼女は、話終わるとカップのコーヒーを飲み干して

「大変、こんな時間。もう行かなくちゃ」

そう言って、カバンを片手に玄関に向かった。

「ねえ、その後お父さんに会った？」

僕は廊下に顔を出して尋ねると、彼女は小さく首を横に振った。

「あの人は、二度とあたしに会おうとはしなかった……」

母は、微笑んでいたが、その笑顔は何処か寂しそだったのは決して僕の気のせいではないだろう。

「マユがどうこう考える事じゃないわ。もう17年も前の話」

そう言い残して、母が玄関を出て行った。

母のアルファ・ロメオがガレージから出て行く姿を、僕はキッチンの出窓から見送った。

【第39話】

(Twins)

生きたい、死にたくない。こんな所で死んでたまるか。僕は生きるんだ。生きてこの暗闇から出て、そして自分の肺で酸素を吸うんだ。

分娩室に子供の産声が響き渡る。二卵性の双子と診断されていたはずだったが、子供の声は一人分しか聞こえなかった。

石田勇次は荒い息を立てて目覚めた。顔は冷や汗でびっしょりと濡れている。

「どうしたの」

石田の隣で眠っていた由美も、彼のうめき声で目を覚ました。

「何でもない……」

石田は両手で額の汗を拭いながら言った。

「またあの夢を見たの」

由美は少し心配そうに尋ねる。

「ああ……」

彼はそれだけ言うと、再び布団を自分の首まで掛けた。

由美は、石田が再婚して暮らしている現在の妻だ。子供はいないが、仲良くそれなりに幸せに暮らしている。

再婚前、家族として一緒に暮らしていたのは刑部小夜子。刑部真夕の母親だ。すなわち、石田は刑部真夕の父親なのだ。

石田は度々うなされる夢に悩まされていた。
初めてその夢を見たのは……

そうあの時だ。

.....

.....

「旦那さんはこちらでお待ちください」

看護士が言った。勇次は妻小夜子と共に分娩室へ入ろうとしたが、止められたのだ。

「お子さんは大変危険な状態です。双子のうちどちらかはダメかもしれない」

医師は真剣な顔付きで勇次に向かって言った。

「何とかお願いします。なんとか……」

勇次は医師の腕にしがみ付くように言った。

「私達はベストを尽くすだけです」

そう言って医師は殺菌室を通って分娩室へ入って行った。

―― 1時間前 ―

勇次は小夜子と共に買い物に出かけた。

青い空にぽっかりと白い雲が浮かぶような、天気の良い日曜日だった。

もうすぐ生まれる双子のためにそろそろ買って置きたいモノもある。

高速道路を使って隣町的大型子供用品店へ出かけた帰り道、再び高速道路に乗った。

石田勇次は建築会社に勤める普通のサラリーマンだ。

妻の小夜子はインテリアデザイナーとして成長している最中で、最近では勇次の月給に迫る勢いだったが、そんな事は関係なく二人の暮らしは幸せに包まれていた。

緩いカーブの向こうの非常路側帯に、緊急停車しているトラックの姿が見えた。

（こんな所で故障だろうか）勇次はふと、そんな事を考えていた。隣に座っている小夜子は少し疲れたのかウトウトしていた。

その時、トラックが急に動き出して通常走行車線に出て来るのが見えた。

「あ、危ない」

勇次から見て、巡航して走る車、四〇五台先での出来事だった。彼は反射的にアクセルを戻して、ブレーキペダルに足を乗せた。乗せただけでブレーキペダルは踏まなかった。かなり先での出来事だったから、それで十分だと思った。

しかし、出てきたトラックは加速が遅い。その遅いトラックに軽自動車は衝突した。

前方を良く見て運転していれば、ありえない出来事だった。

後続車は忽ち急ブレーキを踏む。

それでも勇次はきちんと車間を取って走っていた為、急ブレーキだけで難を逃れられる確信があった。

前方で二〇三台が玉突き衝突して、四方に跳ね飛ばされる車が見えた。

自分のすぐ前方の車も何にもぶつかる事無く停止して、その後に勇次も無事に止まることができた。

額に冷や汗をかいてホッとして隣の小夜子に目をやった。

しかし、その時後から嫌な音が聞こえた。

大型トラックの急ブレーキを引きずる音が、あまりのスピードで接近していた。

勇次が振り向こうとしたとその瞬間、車は大きく揺れて身体が激しくシートの上でバウンドする。

シートベルトのリミッターが働いて、肩と腹部にベルトが強く食い込んだ。

パン！と言う破裂音と共にハンドルのエアバックが開いた。勇次の目の前は一瞬真っ白になって何も見えなかった。

前後からの激しい衝撃の後、目を開いた勇次は愕然とした。

さっきまで前方にいたはずのミニバンのリヤガラスが、自分の車のフロントガラスに完全にくっ付きあってグシャグシャに割れているのが見えた。

彼の頭は混乱して何が起こったのか判らなかった。

ふと、隣に目をやると、小夜子がグッタリとシートにもたれているのが見え、勇次は事態を把握して後を振り返った。後は完全に鉄の塊で覆われて、それがトラックなのかどうかは判らないほどだ。

「小夜子、小夜子、しっかりしろ」

勇次は彼女の肩に手をあてて揺すった。

助手席のエアバックも開いた後があり、小夜子自信は出血も無いようだった。

「うっ……お腹が……」

彼女のうめき声で、勇次ははじめてその大きく張ったお腹に注意が行き、その中の生命が危機に面している事を悟った。

外へ出ようとしたが、車体が大きく歪んでいる為、ドアが開かない。

怪我の軽い人たちが車の外に出てきているのが見えた。

「すみません。妻を……妊娠しているんです。助け出してください」

勇次はガラスが無くなった窓から顔を出して必死で叫んだ。

数人が助手席のドアをこじ開けて小夜子を助け出そうとしたが、人力でどうにかなる状態ではなかった。勇次は窓から這い出ると助手席にまわって一緒にドアを引っ張る。

アルミホイルのようにくしゃくしゃになったドアが開くはずは無かった。

「こっち、開いたよ」

一人の茶髪の青年が右のリアドアを開けた。みんな気が動転して他のドアを試そうとしなかったのだった。

シートベルトを外して、シートをリクライニングさせ、4人掛けで小夜子を引っ張り出した。

「お腹が……」

小夜子が自分のお腹を抱えて苦しんでいた。そして、その時勇次がチラリと見た後ろのトラックの運転席は完全に潰れ、隙間から運転手らしき人の手だけが微かに見えた。

パトカーと救急車が到着して、すぐに小夜子は病院に運ばれた。

「出産予定日には一ヶ月早いですが、しかたありません。ただ、二人共無事に生まれる保証は出来なと思います」

医師は真剣な顔でそう言った。

「旦那さんはこちらでお待ちください」

分娩室へ入ろうとする勇次は看護士に止められて、仕方なく廊下の長椅子に腰掛けた。

鞭打ちの首が重苦しくて、頭痛がひどかったので通りかかった看護士に言って、頭痛薬を貰って飲んだ。

彼は何時の間にかウトウトしていた。そして、誰かの声が聞こえた。

最初は、廊下で誰かが立ち話でもしているのだろうと思った。しかし、勇次は夢うつつの中で思った。それは、廊下で誰かが話している声では無い。

頭の中から直に響く誰かの声が聞こえていた。

生きたい、死にたくない。こんな所で死んでたまるか。僕は生きるんだ。生きてこの暗闇から出て、そして自分の肺で酸素を吸うんだ。

【第40話】

(Spirit)

僕の心はボクノモノ、彼女の身体もボクノモノ。

ちがう、この身体はアタシノモノ、この心もアタシノモノ。

朝、目覚める一瞬前。眠っているのと起きている事の間ぐらいの、まどろみの意識に半分浸っている時だろうか。時々声が聞こえる。

それは、僕である刑部真夕の声のようでもあり、違うようでもある。

それとも、それは目覚める直前に見る、ただの夢なのだろうか。

二週間で退院した秀雄は、お盆があけた頃、ようやく外を歩きまわれるまで回復した。それでも、当分バイクは乗れないらしい。

何度か電話で話したが、退院してから会うのは今日が初めてだ。

「よかった、元気になって」

秀雄の家が在る、最寄の駅の喫茶店で僕達は待ち合わせをした。

「まあ、俺も元気が取り得だからね」

秀雄はそう言っ、アイスカフェオレを飲んでいる。

「和弥には会ってるの？」

秀雄がさりげなく訊いて来た。

正直なところ、最近は殆ど会っていない。特に用事も無いし、バイトと千夏に会うのが忙しかったから。

「ううん。バイト忙しいし、和弥は部活が忙しいから」

僕はそう言っ、首を横に振った。

僕は、千夏と身体を合わせる事によってどうやら心のバランスを取り戻したようだ。秀雄に会っていても、以前、時折起こる静かなときめきのような不思議な感情が全く現れない。それは、一緒にバ

イトをしていた頃と同じ感覚だった。

「カートのレース出るの？」

秀雄はストローの袋を指先で小さく折り畳みながら言った。

「うん。一般の部で」

僕は、レンタルカートカップと言う、レンタルカートのワンメイクレースと同日に行われる、競技用カートのサンデーレースに出る事にしたのだ。

中には競技用カートをレンタルして出る人もいるくらい気軽なレースだが、表彰台に立つのはかなりの実力者達だと言う。

「俺も応援に行こうかな」

秀雄はタバコを咥えながら笑った。

そんな時、僕の携帯電話の着メロが鳴った。着信モニターを見ると、母からだ。

どうせまた、急な出張か何かだろうと思いながら通話ボタンを押す。

「もしもし」

「あ、マユ。今晚からちょっと、東京に行って来るから」

「うん。仕事？」

僕の問いに、母はしばらく沈黙していた。

「お父さんが亡くなったらしいの」

お父さん…… あの前次という男が死んだ。会った事も無い僕の父親。

「あ、あたしも行っているかな」

僕は父という男の顔が見てみたくなった。勿論、遺影でしか見れないのだろうが。運がよければ、火葬前の本人に会えるかもしれない。

「いいけど……」

母の声は少し困惑しているようだった。

「大丈夫だよ。何となくお父さんでどんな人だったのかわかって」
僕はわざと明るく応えた。

「そう。じゃあ、今、家で仕度してるところだから、帰ってらっしゃい」

母はそう言っただけで電話を切った。

「悪い、なんか父が亡くなったらしくて」

「あ、そうなんだ。大丈夫？」

秀雄は心配そうな顔で僕を見つめる。

「うん。父って言っても、一度も会った事無い人だから。でも、葬式には行ってくる。帰ってきたら電話するから」

僕はそう言っただけで喫茶店を出ると、マウンテンバイクに乗って帰宅した。

【第41話】

「ちょっと飛ばしすぎじゃないの」

僕はアルファのスピードメーターを覗き込んで言った。

「大丈夫よ」

母は余裕の笑みで言う。

GPSレーダーが警告音を発する度に一端スピードを緩めるが、また直ぐに160キロまで加速して、追い越し車線と通常車線を行ったり来たりする。

東京と言っていたが、亡くなった父は埼玉に住んでいたようだ。

と言う事は、この前僕に会いに来た由美という女性は、はるばる埼玉県から来たのだろうか。

母は喪服の黒いワンピース姿で高速ドライビングに夢中だ。

僕は、制服ではなく、黒のスーツを着て来た。

去年、親戚の結婚式に着る為に、母に頼んで誂えてもらった三つボタンの少しタイトなシルエットのやつだ。

家を出る際、玄関にある姿見に映った自分の姿をみて、まるで口ン毛のホストのようだ。と思った。

「ねえ、お母さんは、由美って人に会った事あるの？」

僕はさっきサービスエリアで買った缶コーヒーを片手に訊いた。

「うん。一度だけ。あの人と再婚する事が決まってから、一人で会いに来たわ。あなたがまだ小学校の時ね」

「そうなんだ…… 知らなかった」

「お父さんの事、マユが訊いて来たら話そうと思ってたけど、あなた、あまり関心無いようだったから」

母は少しだけ巡航スピードを落すと、後ろの窓をちょっとだけ開けて、タバコに火を着けた。

僕は今まで父と母の事について訊いた事は無かった。子供心に、何故か訊かない方がいいのだと思っていたから。

浦和インターから関越自動車道に入って、所沢で下りた時には、日もかなり傾いて西の空に浮かぶ雲を、朱色に染め始めていた。

渋滞する大通りをしばらく走って小道に入ると、辺りは次第に長閑な風景に変っていき、両側には茶畑が広がっている。畑の中には小型扇風機のような、小さな風車が幾つも生えていて不思議な光景だ。

道路標示の看板に入曽駅と書いてある。おそらく、この辺の地名も入曽と言っのだろう。僕はそんな事を考えながら車窓から外を眺めていた。

交差点を曲がって住宅街に入るが、やはり空き地や畑が所々にあって、ここが東京近郊という感じはしない。

父の家は小さな古い一軒やだった。一階建てだが小さな庭もついている。

既に何台かの車が停まっている、隣の小さな空き地に車を停めて家に入ると、廊下を挟んだ茶の間の向かい側に、六畳の和室を半分占領した祭壇が見えた。

茶の間には何人かの喪服の男女がいて、一番端に由美がいた。

母は彼女達に丁寧なお辞儀をして靴を脱ぐ。その横で僕も同じ動作をする。

家の中は焼香の匂いが充満していた。

僕は、今まで意外と母に似ていると思っていた。しかし、目元や口元は完全に父に似ているのが、祭壇に飾ってある遺影をみて判った。

火葬には間に合わなかったが、僕は遺影の写真をしばらくの間眺めていた。一昨日亡くなった勇次は、今日の日中に火葬されたようだ。

僕の後には焼香していた母は、位牌を前に長々と手を併せた後、遺影を見つめて涙を流していた。僕は横目でその様子をチラリと盗み見ながら、元夫婦の絆のようなものを感じた。

「よく来てくれたわね」

由美が僕に声を掛けてきて、冷えた麦茶を差し出し

「こっちは暑いでしょ」と言った。

確かに東北と比べると異常に湿度が高く、じっとしていても汗が滲んでくる。

周りにいる人たちは、殆どが由美の親戚らしく、勇次の親戚はいなかった。ただ、時折仕事関係か何かの男が焼香に来て香典を置いていく。

「あの・・・この前、わざわざ僕に会う為に来たんですか」

僕は、何気なく訊いた。

「いいえ、たまたま仙台の方に用事で出かけたので、足を伸ばしたのよ」

彼女は、静かな笑みを浮かべて言った。

由美はこれからこの家で、一人で生きていくのだろうか。僕はそんな事ばかり考えて、何故か父が死んだという悲しみはあまり無かった。

夕方になると、葬儀屋が来て、6畳間を占領していた大きな祭壇を片付けていった。仮の祭壇を置いていったが、ちゃぶ台ほどの粗末なものだった。

その夜、ホテルで一泊し、翌朝早く東北自動車道に乗った。忙しい母は、そう何日も仕事を休んでいる訳にはいかないのだ。

「お父さんって、どんな人だったの」

カーオーディオからは、母が好きなチャゲ&アスカの曲が流れている。

昨夜、ホテルの部屋は母と一緒にだったが、父の話を超えるように、母はカーットの事や友達の事をしきりに訊いて来た。

「真面目な人…… かな」

母は正面から目を離さずに言った。

「ふうん」

僕は、遠くに広がる青い空とぽっかりと浮かぶ雲を眺めて言った。
そして、それ以上父の事を訊こうとはしなかった。

「結局、あの人は、あの子の亡霊に勝てなかったのよね」

昨晚、由美がポロリと溢した言葉だった。どういう事なのか問い質す僕に、彼女は言った。

「勇次さんは、ずっとあなたのなくなったお兄さんの亡霊に獲り付かれていたの」

彼女は勇次がうなされる夢の話をしてくれた。勿論母は止めようとしたが、僕はどうしても聞きたくて、話を続けてもらった。彼女も、聞いてもらいたい様子だった。

17年間、彼は兄の声にうなされ、神経が衰弱していたそうだ。
生きたいともがき苦しむ兄の声。そして、生まれた僕。

勿論、母が言ったように、お腹の中の胎児が話すはずなど無いだろう。

でも、僕は考えた。

僕自身が、その兄なのではないかと……兄の魂が、無理やり妹の身体に入り込んで生まれてきたのが僕。これは、神の悪戯でも手違いでもない。

死を否定した僕の魂が自然の摂理を無視して行った行為。

そして妹の魂はこの身体から追い出されてしまった…… いや、彼女はここにいる。

時折感じる微かな女心と、夢の中で聞こえる声は、おそらく彼女の魂の欠片が奏でる主張なのだ。そして、その魂の欠片は、僕の魂と一緒に成長し、和弥や秀雄に恋心を抱くのだ。

らせん状に激しく絡みあったまま、決して融合する事無く、僕と彼女の魂は同じ身体の中で生き続ける……

そんな事はいえないと知りつつも、僕にはそう思えてならないのだった。

【第42話】

「よう！」

歩道から和弥が声を掛けて片手を上げた。

今日は夏休みを取った社員の代わりに午前中からスタンドのバイトに入っていた。

そこへ、和弥が自転車に乗ってやって来たのだ。

「久しぶりだね。部活は？」

「二日間休みなんだ」

「そう。デートでもすればいいのに」

僕がそう言っていると、和弥は少し俯いて笑った。

「お父さん、亡くなったって」

「誰に聞いたの」

「秀雄が電話くれた」

僕は少し驚いたが、その様子は見せずに「なあんだ。やっぱり仲良しなんだ」

そう言って笑うと、和弥もつられるように笑った。

「元気みたいで、安心したよ」

彼はどうやら、僕の父が亡くなったと聞いて、僕の様子を見にきてくれたらしかった。

「もうすぐお昼休みだから、何処かで食べない」

僕がそう言っていると、彼は笑って肯き、近くにある本屋で待っていると言って、スタンドから立ち去った。

「この前の彼と違うのね」

理子は何気に声を掛けて笑う。

彼女は、元カレのあの男が、殺人未遂で捕まった事を知っている。新聞でも、ニュースでもやっていたから。ただ、その刺された相手が秀雄だという事は知らないし、僕はあえて知らせるつもりも無かった。彼女は、もう十分に辛い思いを味わっているから。

「そんなんじゃないから」

僕はそう言って笑いながらその場を離れると

「いらっしやいませ」と叫んで、入ってきたお客の給油に駆けつけた。

「お父さんって、会った事無かったんだろ」

スタンドの近くの洋風レストランに入った僕達は、久しぶりに一緒にの食事をした。相変わらず和弥の豪快な食いつぶりは、思わず笑みが零れる。

彼は、僕の家が母子家庭という事も、父とは会った事が無いことも知っている。いつか僕が話したのだろう。

「まあね。だから、別に涙は出なかった。ああ、この人が僕のお父さんかって感じで思っただけ」

「ふうん」

和弥はその感覚にピンと来ないという顔付きで肯いた。

「彼女とは、どうなの？」

僕は、話題を変えたくて彼に訊いた。

「まあ、ぼちぼち」

和弥はそう言ってアイスコーヒーのストローに口をつける。

「マユの方は？」

「んん、まあ、ぼちぼち」

僕は、和弥の真似をして応えた。

「秀雄？それともオーブンカーの彼？」

和弥はさりげなく言ったが、その瞬間は少しだけ、顔が強張っていた。

「まさか…… どっちも男じゃん」

「えっ、じゃあ…… まさか、女性と？」

「まあ、そんなとこ。この先どうなるか判んないけど」

僕はアイステイーの中の氷をストローで転がす。

「へえー。まあ、先が判んないのはみんな一緒だろ」

彼はそう言って笑いながら、タバコを啜えた。

レストランを出ると、僕はバイトに戻る為に彼の自転車の後に立ち乗りした。

来る時は歩いたのだから、ほんのすぐ近くなのだが、なんだかそうしなかったのだ。

スタンドの前で自転車から飛び降りると、僕は和弥に手を振る。

「ありがとう。心配で様子を見に来てくれたんだろ」

そう言った僕に、彼は少しテレ笑いを浮かべて軽く手を上げると「暇だったしな」とだけ言って、そのまま自転車で行った。

僕は双子だった事を和弥に話そうと思ったが、とりあえず止めた。なんだか、また彼に寄添ってしまいそうな感じがして、気が引けたのだ。

もし、誰かに話すとするば、千夏に話すべきなのかも知れない。しかし…… おそらく彼女には話さないだろう。

今でも僕は、和弥や秀雄、それと千夏、どちらが同性でどちらが異性なのか混乱してしまう。

誰もが、同性だから相談できる事、異性だから話せる事、と言うように自分の性別を基準に考える事があると思う。

しかし僕の場合、メンタルとフィジカルでどちらを基準にするか迷ってしまうのだ。

学校にいる時は、女子生徒という群れの中の一人として存在している為、そう言う迷いは生じない。

自然に見た目の違いが性別の違いを意味するからだ。しかし、自由な空間に放たれると、周りと自分の属する位置関係が判らなくなつて、迷いが生じる。

この迷いは、一生消える事は無いだろう。

それでも、性転換の治療をすると、少しは楽になるのだろうか。

「特に問題はないよ。と言っても、G I Dの症状はあるけどね」

精神分析結果の書類を見て医師は微笑んだ。

僕は一時電車で揺られ、以前通った事のあるクリニックを訪れていた。

父の葬儀から帰って来て間もなく、五年振りでここを訪れた僕は、精神分析テストを受け直したのだ。

「魂が二つ入ってる事と違って、無いですか？」

僕は診察室で医師に訊いた。自分でも馬鹿げた質問だと思った。

「魂が二つ？」

彼は怪訝な顔を浮かべて、それでも柔らかな笑顔は崩さない。

「多重人格症状の事を言っているのかな？」

「ええ、まあ…… そんな感じですかね」

魂が二つも三つも一人の人間に宿るわけが無い。それ以前に、医学的見解では魂は存在しないのだ。

「検査結果を見る限り、解離性の症状は見られないようだけど、何か心あたりがあるのかい」

彼は、バインダーで閉じた僕の分析結果のページをパラパラと捲りながら言った。

「あ、いえ。そう言うわけじゃなんです」

双子の魂が、二人分僕の中にいるのでは…… とは、どうしても訊けなかった。

「本当に、治療を受けなくていいのかい」

診察室を出るとき、医師が僕に尋ねた。

「ええ、今のところは考えていません。でも、ほんと言つと、自分でも判りません……」

僕はそう言つて笑顔を返した。

「じゃあ、正式な検査報告書は後で郵送するから」

「はい、お願いします」

僕は診察室を後にした。

結局、以前検査した時とあまり変らない結果しか得る事は出来なかった。やはり、医学に頼っても、僕が生まれる事の出来なかった兄の魂かどうかなんて、解るはずがないのだ。そんな事は判っていた。しかし、どうしても検査を受けておきたかった。

その結果を聞くことによって、僕が間違いなく正常な一人の個別の人間として存在する事を確認したかったのだ。

それが、せめてもの、気休めになると思ったから。

【第43話】

(Tear Stains)

病院の帰り道、最寄りの駅から自転車で走っている僕の横を、軽やかなエンジン音が減速して、直ぐ先の歩道に横付けした。

「やあ」

龍二だった。

「最近どう？」

彼は会うつと必ずそう言う。

「いや、普通」

僕はそう言って笑う。

「こんな所でどうしたの」

精神科の帰り。とも言えずに「いや、ちょっと用事で」

「飯でもどう？」

相変わらず軽いノリで彼は誘ってくる。

「あ、この後予定があるから」

僕がそう言って笑うと

「そうか。じゃ」と笑って龍二は車で走り去った。

龍二は以前千夏の恋人だったそうだ。

以前、一緒に食事をした時に彼が話してくれたのだ。まさか、この女子高生が千夏と付き合っているなどとは、思いもよらないだろう。

龍二の誘いを断ったのには、もうひとつ理由があった。

前に一度会ったきりになっていた車椅子の少女の事を思い出して、どうしているか気になったのだ。

これまでも何度か足を運ぼうとは思ったが、何となくまた今度でいいやと言う気になってしまっていた。

あの少女の動かない右半身は先天的なものでは無いだろう。もし

そうなら、動かせない部分は成長のバランスが悪くなる。しかし、彼女は左右均等に成長していた。動かなくなってから、そう何年も経っていないのだろう。

何が原因でそうなったか、僕は少しだけ考えてみたりした。

しかし、何よりも僕は、彼女の笑顔がもう一度見たかったのだと思う。微笑みかけられただけで幸せになってしまいそうな、あの笑顔。

古書店の脇道に入って、住宅地の中を抜ける。一度通っただけの道なので、途中で一本間違えて通ったりして、少しだけ住宅街をぐるぐる走り回った。

風に乗って焼香の匂いが漂ってくる。今年の夏は、暑いから、お年寄りにはキツイのかもしれない。などと考えていた。

確かに少女に会った家の前に来た時、僕は少し手前で自転車を止めた。

門柱に掲げられた喪中の行燈が見えたからだ。

僕は自転車を降りて、押しながらその家に近づいた。門は開け放たれていて、奥を覗くと隅の方には、あのレトリバーのロコがリードで繋がれているが見えた。

自分の前足に顎を乗せて静かに寝そべるその姿が、何処となく元気が無いのは気のせいだろうか……

数人の人影が見えたが、その様子から葬儀などは既に終わっているのだろうと判る。

「あの、どちら様ですか」

後から女性に声を掛けられて、僕は一瞬飛び上がりそうになった。

「あのう…… どなたか亡くなられたんですか？」

僕は、少し息を整えてから尋ねた。

「娘のサヤカです……」

喪服の女性は俯き加減で呟いた。

「あの…… サヤカちゃんって、まさか、車椅子の……」

「サヤカをご存知で？」

僕の足はガクガクと振るえた。いや、足だけでは無く、手も震えていた。

思考が何処か遠くへ飛んでいきそうな、頭の中身だけが宙に浮いているような、そんな感覚にみまわれた。

「あ、前に一度ここで、会って……」

思わず返事がぎこちなくなる。

「良かったら、お線香あげていただけますか？サヤカも喜びます」

母親の目は真っ赤に腫れ上がっていたが、涙はもう枯れ果ててしまったかのように、その対応は毅然としていた。

サヤカは脳腫瘍だったそうだ。手術は不可能で、発見されたのが去年の春。余命一年と言われ、その後一年と四カ月生きたそうだ。

母親は、医者告知した余命よりも彼女が4カ月長く生きた事を、笑みを浮かべて話した。

今月に入ってから、全身がほとんど動かなくなつて、ずっと入院したきりになり、5日前に息を引き取ったのだと言う。

彼女は、両親に負担を掛けまいと、かろうじて動く左手と左足のみで、最後まで自分の事は出来るだけ一人でやろうと努力したそうだ。

僕が見たのは、おそらく彼女の努力のほんの一欠けらにすぎないだろう。

「サヤカはやつと自由な身体になれたんです」

枯れたと思われた母親の目には再び涙が溢れ出ていた。

あの屈託の無い柔らかな笑顔が目に見え、僕の頬にも、何時の間にか涙が零れ落ちていた。

それは、いままでに流した事の無いほど密度の濃い、重い雫だった。

僕は心と身体の性が違っているとは言え、好きに動き回り、走り回り、五体満足でこうして健康に17年間生きている。

12歳で生涯を終えたサヤカの事を思うと、自分の悩みがとてつもなくちっぽけで、そして贅沢なものに思えてくるのだ。

一言、二言、三言、言葉を交わしただけのはずなのに、サヤカに会ったことで、僕の心が大きく揺さぶられた事は確かだった。

【第44話】

8月も、もうすぐ終わりが近づくと、林や田畑を抜ける風はいくばか涼しくなる。それでも青空から照りつける太陽は、追い討ちをかけるように焼けた素肌を刺激する。

東北の夏休みは東京よりも一週間ほど早く終わりを告げる。

二学期の始業式の帰り、校門を出た僕に誰かが声を掛けて来た。

白い開襟シャツにグレーのミニスカートの制服は、勿論ウチの学校の生徒ではない。

彼女がスッピンだった為、一瞬顔を見ても誰だか判らなかったが、それは香織だった。

「どうしたの？」

僕は数秒のタイムラグの後に声を返す。

何か用事なら携帯に電話をしてくるはずなのに、直接学校の前で待つてるなんて、どうもおかしい。

「うん…… 何となく、顔、見たくなって」

少し俯いた彼女の顔には、以前の弾むような元気は無かった。

「何か、あったの？」

僕は、彼女を自分の自転車の後ろに立ち乗りさせて走り出した。

サーキットの周りに生い茂る緑の木々は、まるで生き物のように喧騒に包まれている。日中は、けたたましい油蝉の声が鳴り響き、残暑に拍車をかけ、夕暮れ時には蜩が夏の終わりを告げる。

夏休みの間、毎日混雑していたカート場も学校が始まったとたんに寂しくなった。とは言っても、大学生がちらほらいるし、平日の日中はこれが当り前だ。

ホームストレートを駆け抜ける時、コース脇のフェンスにもたれて僕を見つめる香織の姿がはっきりと見えた。

僕は、1コーナー侵入手前で、小さく彼女に手を振り、素早くハンドルを握り直す。

彼女は僕に会った事で少しは気分が晴れたのか、僕が一瞬上げた手に、大きく手を振り返していた。

香織は、妊娠したらしい……

援交デートの相手ではない。そう言った行為をしない決まりは、頑なに守っていたと言う。

相手は付き合っていた男だと言うが、妊娠の事実を告げると、途端に連絡がつかなくなったらしいのだ。

おそらく、僕も何度か見た事のある、黒いミニバンに乗ったタトゥーの男だろう。

彼女は、中絶するかどうか迷っているようだ。生めば当然高校にはいられない。

今の彼女には、決断できる答えは一つしか無いはずなのに、微かに芽生えたような母性本能が、彼女の心を揺さぶるのだ。

彼女の家は完全な放任主義…… と言えば聞こえはいいが、両親は彼女にまったく関心が無いという。そんな親に相談する気にはなれないらしい。

でも、どうして僕のところ相談に来たのだろう。何故、学校の友達に相談しないのか……

僕にはよく判らないが、今まで彼女が付き合っていた友達と呼ぶ連中は、深刻な相談事に向いていないのは確かなのだろう。

お互いに楽しい事だけを共有しあう仲なのだ。

「すごい！カッコイイよマユ」

ピットからロビーに入った僕に、香織が駆け寄る。

「ヘルメット被ってると、男の子みたいだね」

彼女が笑って言った言葉に、カウンター越しの千夏がチラリと視線を送る。

「あ、宇佐美香織さん。前のバイトで友達になったんだ」

僕は、千夏に香織を紹介した。

「こんにちは」

香織が笑顔で言うと

「いらっしやい。ゆっくりして行って」

千夏も笑顔で応えた。

「はい。お邪魔になります」

香織の笑顔は、傍目には何時も通りに戻っていた。

「このツナギ、彼女に貰ったんだよ」

香織は僕のツナギの袖をあちこち掴んで「へえー、すごい。こういうのって高いんですよ」

「お下がりだけどね」

千夏が穏やかに笑って言った。

「あたしも、何か夢中になれるものがあつたらなあ」

ロビーのテーブルで、彼女はペプシコーラを片手に頬杖について呟いた。

「見つかるよ、そのうち」

「そうかなあ」

彼女は化粧つきのない素顔で笑う。何時もつけていた真っ黒いマスクとアイライナーが無いだけで、とても清楚な女性に見えた。それから彼女は、しばらくの間黙ったまま、外を覆い尽くす緑を眺めていた。

僕は香織の「女」の横顔を静かに見つめていた。

【第45話】

「そう…… 彼女妊娠しちゃったの……」

香織の話聞いた千夏は、顔を曇らせて言った。

その夜、母が出張だったので、千夏が僕の家に来て夕飯を作ってくれた。

「やっぱり大きなキッチンっていいなあ」と、彼女は野菜を切りながら笑って言ったりした。

そこには確かな安らぎがあった。でも、僕は香織の事が心配で、それを自分の内だけに留めて置くことができなかった。

「どうするのかしら……」

食事の手を一端止めた千夏が心配そうに呟く。

「判らない…… 香織もまだ、迷ってるみたいだよ」

香織とはあの後ファミレスでお茶をして、駅まで自転車で送って別れた。

彼女の家は駅向こうの住宅街にある為、駅の階段を使って向こう側へ歩いて行ったが、手を振りながら笑った彼女の笑顔とは裏腹に、その後ろ姿はとても切ないものを感じた。

僕は香織の姿が見えなくなるまで、しばらく階段を見つめていた。

夕飯を済ませた僕達はドライブへ出かけた。

「たまには、夜のドライブにでも行かない？」

千夏がそう言ったからだった。

もともと外へ出るのが好きな僕には、反対する理由はない。おそらく千夏は、僕に気分転換を促そうとしたのだ。

工業港に隣接する海浜公園に沿った道路を走っていた。誰もいない直線道路に何処までも続く水銀灯の帯びは、何処か別世界へ続く

タイムトンネルのようだ。

このまま何の悩みもない世界に行けたらいいのに……

巡航するレガシーの微かなノイズを掻き消すかのよう、防波堤の向こうからは夜の荒ぶる波の音が響いてくる。

「なんか、一雨あるのかな」

千夏がフロントウインドウ越しに、どんよりと曇った夜空を見て言った。

「ねえ、どうして龍二と別れたの？」

僕は、何となく切り出したが、特に気にしている訳ではなかった。

「ああ………知ってたんだ。彼から聞いた？」

「あ、別に、話したくなければいいんだけど」

彼女は特に隠す様子も無く話し始めた。

「ほら、前にも少し話したけど、彼はあたしがカートのレースに出るのを嫌がっていたのよ。競技用カートは、怪我をする事もあるから」

「自分は、レースに出ているのに？」

「女性は女性らしく、って思ってるみたい」

千夏は少し笑ってチラリと僕を見ると、再び正面を向いた。

「でもさ、それって、本当にチ力の事を好きだったんだね」

僕の言葉に彼女は困惑した笑いをして

「どうして？」と言った。

「だって、僕にはそんな事言わないから、きっと大好きな女性には危険な事をして欲しくなかったんじゃないかな」

「マユって、考え方がポジティブだね。そう言うところ、好きよ」

彼女は笑いながら続けて

「その割には、アイツの浮気の多さは目に余るけどね」

別れた本当の原因は、龍二の浮気の多さだな。僕はそう思ったが、口には出さずに一緒に笑った。

「あつ、停めて」

僕は思わず叫んだ。

防波堤の上に人影が見えたからだ。その人影は、白いシャツにグレーっぽいミニスカートを履いていたのが、公園の僅かな街灯の光に映し出された。

僕はなんだか嫌な予感がして、思わず叫んだのだった。

「どうしたの？」

千夏はそう言つて、とりあえず、路肩に寄せて車を停めた。

「ちよつと待ってて」

僕はそう言い残して車から降りると、防波堤に佇む人影に駆け寄つた。

間違い無い、香織だ。

髪の毛とグレーのスカートが潮風に吹かれて、ゆらゆらと靡いていた。

「香織！」

僕が声を掛けると、彼女は振り返つて、幻でも見るような目で僕の姿を見つめた。

「マユ……」

水銀灯の光に浮かんだ香織のその笑顔は、昼間見た後ろ姿と同じように、切なさで溢れていた。

「家に、帰つてないの？」

制服のままと言う事は、多分家に帰っていないのだろう。

彼女は何も応えずに、海に向かって防波堤に腰掛けた。僕も、防波堤によじ登つて、その横に並んで腰掛ける。

少しの間沈黙が流れた。

広がる闇の中で、打ち寄せる波だけが、僕達とは無関係に音を奏でていた。

「ねえ、心が潰れる音つて、聞いたことある？」

香織は無表情で海を眺めたまま言った。

こころが潰れる時、それは押し潰される思いのキャパを遥かに超

える時なのだ。

僕は何も忖えずに、彼女の横顔を見つめた。

何度信じてもし裏切られ、もう信じるもんかと思いつながら、また信じてしまう。

他人同士の付き合いなんて、そんなものかも知れない。

だからこそ、お互いに信じあえた時、信頼しあえる相手に巡り会えた時、それは大切なものとして心に刻まれるのだ。

「どうしよう……」

再び沈黙が続いた後、不意に彼女は呟いた。

「親には？」

彼女は無言で首を横に振った。

「彼がちゃんとするって……何時も言ってたのに……」

「そんなの言い訳にならないよ。妊娠するのは女の方なんだよ。香織だって判ってるだろ」

「そうだよ……」

彼女はそう言って、肯いた。

「学校、卒業したいんだろ」

僕の問いに、香織は黙って首の折れた人形のように再び肯く。

「だったら…… 答えは出ているはずだよ」

僕は、小さな子供に何かを言い聞かせるように、静かに言った。

彼女はしばらく黙ったまま、真つ黒な海を見つめていた。

波打ち際で砕けた白い飛沫と泡が、厚い雲から覗く微かな月明かりに照らされて浮かんで消えていく。

途端に、香織は防波堤から暗い砂浜へ飛び降りると、海へ向かって駆け出した。

僕は、一瞬訳が判らず彼女の様子を呆然と眺めていたが、波打ち際に足を取られながら水際を沖に向かって進む香織の姿を見て、僕も慌てて防波堤から飛び降りて砂浜を走った。

女は何を考えているか判らない。

身体が女の僕でも、時々そう感じるのは、僕が男性のジェンダー

パターンを多く持っている証しなのだろうか。

【第45話】（後書き）

注）ジェンダーパターンとは意識的、無意識的に学習する、思考や行動様式の男女の違いで、G I Dの場合は通常の男女に比べ、そのあり方は微妙で様々だそうです。

【第46話】

真つ黒な波がジーンズの足に絡み付いて、時折胸の辺りまで跳ね上がった。

命一杯水を吸ったジーンズは、異常に重くて足の運びもおぼつかない。

何度も転びそうになりながら、何とか香織に追いつき彼女の腕を掴んだ。

彼女は、本気で死のうと思ったわけではないのだろう。僕が力いっぱい彼女の腕を掴むと、直ぐに足を止めた。

香織の短いスカートの裾が、波が来る度に水面に触れて、大きく揺らいでいた。

遠くの雲が、一瞬青い光で瞬いて、その瞬間、黒い海は真つ白に輝く。

数秒遅れで、空全体を切り裂くような雷鳴と雷震が響き渡る。

「大丈夫、死んだりしないよ。こんな事で死んでたまるか」

香織は押し寄せる波のずっと沖の方を見つめて「ちよつと水に浸かりたい気分だっただけ……」

そうか、そうなんだ。

僕は、夜更けの公道をカートで走った自分を、少しだけ思い出した。

「帰ろう……」

僕がそう言つて香織の肩に手を掛けると、彼女は弾けるように僕の胸に飛び込んで、頬を埋めて泣き出した。

彼女は、きつと誰かにこうして欲しかったのだ。不安な気持ちを打ち明けて、寄添いたかったのだと思う。

彼女の家は比較的裕福な暮らしをしているが、現在の母親は、彼女が小学生の頃に父親が再婚した相手なのだと言う。後妻の子供、香織から見れば妹に当たるのだが、その娘に両親の愛情は注がれて

いるのだと彼女は以前僕に話した事がある。

派手に遊び歩いているように見えた香織は、本当に心許せる相手を彼女なりに探し続けていたのかもしれない。

母の愛情を受けずに育った香織は、母性の愛に餓えているかのように、僕の胸の中で咽び泣いて、彼女の熱い息が、Ｔシャツを通してその谷間に伝わってきた。

僕はただ黙って彼女の肩を抱きしめた。

遠くから水を叩く音が聞こえて来たかと思うと、激しい雨脚がやって来て、あつと言う間に僕達を包み込んだ。

「マユの胸って、暖かいね」

香織が僕の胸に顔を伏せたまま呟いた。

「よく言われる」

と僕が言っていると、彼女は顔を伏せたまま、フツと吹き出すように笑った。

「帰ろう……千夏さんが送ってくれるよ」

僕はそう言って、彼女を支えるようにして砂浜に上がると、一緒に階段のある所まで歩いて防波堤を下りた。

歩道に停めた車からは、心配になって降りてきた千夏が、傘を片手に佇んでいた。僕達の姿を見つけると、こちらを見つめて微笑んだ。

その暖かい微笑みは、僕達を帰るべき場所へと導いてくれた。

「ここ遠浅でよかったけど、パンツまでびしょ濡れだよ」

そう呟いた僕に

「どうせ雨じゃん」

香織がポツリと呟いて、濡れた瞳のまま明るく笑った。

雨に打たれて濡れそぼった彼女の頬に、涙の跡は無かった。

一週間後、香織は中絶の決意をした。

保護者の同意書には自分で判を押し、両親には結局話さずに決めたそうだ。

僕は、ずっと彼女に付き添って、病院のロビーで半日を過ごした。オペ室へ運ばれる香織の手を握り締めた時、何故だか彼女の手が物凄く小さく感じて、その心細さが僕の手伝わってきた。

「ここに、ずっといるから」

僕がそう言うと、彼女は笑顔で肯いた。

夜まで香織の傍にいた僕は、一端家に帰る為に病院を出た。

「どうだった？」

車で迎えに来てくれた千夏が、心配そうに訊いた。

「うん。大丈夫みたい」

僕は何となく沈んだ気持ちを振り払うように笑った。

「あたし達は、そんな心配は無いのよね……」

千夏が小さく笑って呟いたその言葉は、決して喜ばしい意味ではないのだろうと思った。

「元気？」

翌日、病室を覗くと、初めて会った時のように弾けるような笑顔で香織は手を振って笑った。しかし、それは体験した苦悩を自ら振り払おうとしているようで、僕の心は少しだけ締め付けられた。

僕はそんな気持ちが表に出ないように、笑顔を返し続ける。

「具合、どう？」

「うん。もう、ぜんぜん何ともない」

「でも、2日間は安静なんですよ」

本当は1日で退院して自宅で休んでればいいそうだが、彼女が帰りたくないと言ったので入院したのだ。

家には友達の所に泊まると言ってきたそうだ。そんな簡単な嘘で事足りてしまう家族なのだろうか。

「うん。退屈……」

香織はそう言った後「秀ちゃん、久しぶりだね」と声を掛ける。

僕の後ろに遠慮気味に立っていた秀雄は、彼女に声を掛けられると、少し照れたように僕の横に並んで丸椅子に腰掛けた。

秀雄には、香織自信がメールを送ったらしい。何故そうしたのかは判らないが、学校や家族とは関係の無い誰かに、知って欲しかったのかも知れない。

「俺が、今度そいつ見つけたらぶん殴ってやるよ」

秀雄は香織にそう言って笑う。

「そんなことして、また刺されちゃうよ」

秀雄の事件の事を知っている香織は、そう言い返して楽しげに笑った。

「まあ、男だったら一度や二度は刺されないかね」

「何それ、意味わかんない」

秀雄の言葉に僕がそう返すと、三人の笑い声が病室に溢れた。

秀雄が来てくれて良かったのかもしれない。そう僕は思った。彼の情熱的で明るい性格は、この病室を和ませてくれる。

「じゃあ、あたし、バイトあるから、先帰るね」

僕はそう言って立ち上がると

「えっ、じゃあ、俺も帰るよ」

秀雄も椅子から立ち上がろうとしたが

「いいじゃない、あんたはゆっくりしていきなよ。香織も退屈だらうし」

僕はそう言って秀雄を残して病室のドアを開けた。

「じゃあ、またね」

「うん、メールして」

香織はそう言って、手を振った。

彼女とは、知り合ってから、少し距離を置いて付き合ってきた。

彼女の奇抜な行動に、ついて行けそうも無かったから。しかし、僕に自分の弱い部分を曝け出してくれた彼女を、何故だか今は愛しく思ってしまう。

それが男心なのか母性本能なのかは考えなかった。それとは無関係な、相手を思いやる人間の本能なのかもしれないから。

相手の弱い部分を承知して、それを守ってあげたいと思う気持ちが、時として友情や愛情に変わるような気がする。

昔、和弥が「マユの身体を俺が守る」と言った、あの時のように

……

その言葉は、僕の心の奥で今でも心地よく響いていて、たぶんそれが他人を思いやる気持ちを忘れさせないのだと思う。

【第47話】最終話

(Dear Girl)

日に日に空は高くなり、道端の茂みが黄緑色から枯れ葉色に変わりつつあった。

その風景とは裏腹に、10月に入っても強く輝く太陽の光は、素肌にチクチクと刺さるように紫外線を照りつけていた。

日曜日にしては早起した僕は、パジャマのままベランダから外を一望した後、リーバイスのジーンズと、アヴィレックスのTシャツに着替えてキッチンへと下りた。

「ごめんね。今日、観にいけなくて」

久々に朝食と一緒に食べる母が、申し訳無さそうに言った。

「別にいいよ。かえって、恥ずかしい。友達が何人か来てくれるし」

僕は、ミルクのいっぱい入ったコーヒーを飲みながらトーストを齧る。

前の晩、和弥から携帯に電話があった。

「明日、俺も観に行くから」

「部活、あるんじゃないの」

「そんなの、休み、休み」

彼は、そう言って笑っていた。朋子と一緒に来るのかは訊かなかった。

香織からも電話が来て

「明日、何時に行けばいいんだっけ？」

と、少し惚けた事を言っていた。

彼女は、以前と変わりなく元気な声で、弾むように喋る。

最近、ちよくちよく秀雄のバイクの後に乗って出かけるらしい。

「あいつ、ケバイ化粧はすんなくて、ウルサイのよ」

幸せそうに、香織はそんな愚痴を溢す。

その証拠に、彼女のメイクは一頃に比べると、かなりナチュラル

になった。そんな彼女に僕は

「明日は秀雄と一緒に来なさい」と言っただけだった。

だから、秀雄から電話があった時は、

「香織の事、頼むよ」とだけ言った。

秀雄はただ笑っていたが、照れて頭をかいている様子が目に浮かんで、なんとなく可笑しくなった。

朝食後に歯を磨いていたら、携帯の着メロが鳴って

「もしもし」

千夏だ。

「あ、起きてた？」

「もう、出るころだよ」

「いちおう、心配だったから」

知り合った頃からそうだが、彼女はけっこう世話焼きタイプだ。

「じゃあ、後で」

そう言っただけで僕は電話を切る。

「怪我だけは気を付けてね」

キッチンへ戻った僕に、母は少しでも心配そうに言う。

「大丈夫。けっこう安全なんだよ」

僕は、カップに少し残っていたコーヒーを飲み干すと

「じゃあ、出かけるから」

そう言っただけで長袖のシャツを羽織り、ツナギとヘルメットの入った大きなバッグを肩に担いで玄関へ向かう。

今日は心待ちにしていた、カートのサンデーレースの日だ。

「ねえ、マユ」

玄関先で母が呼び止めた。

「何？」

玄関の上り口に腰掛け、スニーカーの紐を結びながら僕は振り向いた。

「性転換すると、男性の戸籍に出来るのよ。お母さんは、別に反対しないからね」

以前クリニックで再検査を受けた際の正式な検査結果が、1週間前に送付されてきた。

保護者宛に、治療法の事例などを丁寧に説明した書類が入っていたのを、夜中に母が真剣な顔付きで見っていた。

わざわざ再検査をした理由を母に訊かれたが、適当に誤魔化して本当の理由は言わなかった。

母を心配させたくは無いし、父と兄に関する話は、もうしない方がいいと思ったから。

僕はただ、個別の魂の確認をしたかっただけなのだ。

レーシング・カートなどという、男っぽい事に夢中になっている僕が、よっぽど男になりたがっている、母は思ったのだろう。

確かに、心と身体が相違する違和感は消えないし、今後どうなっていくのか考えると不安になる。

この身体では、当然、将来女性と結婚する事も出来ないし、かといって、男性と結婚する気はまったく無い。

勇気が無いと言ってしまえばそれまでかも知れない。

症状は多様で、その個人差がかなりある為、他の人がどう言う道を選んでも、否定する気は無い。

むしろ、その努力と覚悟に尊敬するだろう。

ただ、左手だけで車椅子の車輪を回していた直向なサヤカの姿と、あの無垢な笑顔を思い出した時、結婚や男女交際の為だけに、もちろん精神的ストレスはそれだけでは無いのだが……健康な身体にメスを入れる事が、僕自身、あまりにも贅沢な行為に感じてしまうのだ。

性転換手術をしなければ、戸籍上の性別の変更を認められないのが、今の日本の現状で、戸籍の性別を変えたいが為に、気の進まない外科的療法を受ける人もいると言う。

それに、なんと言っても、いままで17年間一緒に過ごしてきたこの身体。そう簡単にあちこちを切りたくもない。

そして、何よりもこの僕が、この華奢だけれども、ちょっぴり色

気のある「彼女」の身体を意外と気に入っている。という事かもしれない。

そう、今は、まだ……

僕は立ち上がって玄関のドアを開けると

「大丈夫だよ！ あたし、この身体、けっこう好きだからサ」

刑部真夕は、そう言って振り返ると、とびっきりの笑顔を母に返して見せた。

秋の晴れ渡る陽射しの下、僕は少しでも空を仰いで眩しげに目を細めると、いかにも女性らしい小さな足で、自転車のペダルを力強く踏み込んだ。

D e a r G i r l E N D

【第47話】最終話（後書き）

この異色な作品を思いの他たくさんの人に読んでいただいた事を、大変感謝いたします。この作品は性同一性障害の症例を事細かに描いた作品ではありません。あくまでも、GIDは主人公のキャラクターの一部であり、そこに関わる同世代の人々との、恋愛感情を中心とした交流を描いた作品です。自分なりに資料を集め、独自の理解に架空の可能性などを加えながら、内容が暗くならないように意識して書きました。タイトルの「Dear Girl」は直訳すると「親愛なる女性」です。それは、主人公マユが自分に囁いた言葉なのだと思います。まだまだ未熟な作品ではありますが、ご意見・ご感想はお気軽にお書きください。そして、このお話には「続編」があります…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0731b/>

Dear Girl

2010年10月8日11時58分発行